

論文概要

熊谷うちわ祭の祭典組織の研究

—祭礼における権威と権力に注目して—

市東真一

本論文は、埼玉県熊谷市の熊谷うちわ祭で実際に活動を行っている鳶、旦那衆、若連の3者の動きに注目する。そこから、彼らがどのように祭礼を行っているのか考察を行った。そこから、祭礼内における権威や権力について考察する。

「序論」では、本論文の研究目的、研究方法について説明していく。祭礼研究においては柳田国男が「日本の祭」において、指摘した風流の視点から始まり、徐々に観客から祭礼内部への検討が行われるようになった。その後、「創られた伝統」の概念をもとにした観光資源としての祭礼研究へ移っていく。その中で、祭典組織の実態を捉えて分析していく研究が、これまであまり行われていなかったことが指摘できる。

第I部熊谷うちわ祭の歴史と民俗は、本稿の調査地である埼玉県熊谷市について記述した。ここでは、本論の対象地域である熊谷市の地理と歴史、熊谷うちわ祭の現在の行事と日程、歴史と祭典組織について説明する。また、これまでうちわ祭の歴史においてほとんど分析がなされていなかった新聞記事をもとに、明治時代の祭礼の様相について考察を行った。それにより、明治時代の日程の変遷、当時の山車・屋台、熊谷愛宕八坂神社についての事柄が明らかになった。あわせて、祇園柱、団扇の頒布、大山代参についても考察を行った。

第II部で旦那衆・町鳶・祇園会の攻防は、それぞれ鳶、旦那衆、若連について、現代の役割に注目しながら、その役割の変遷、存在意義について考察した。そこから、熊谷うちわ祭がどのような祭典組織によって運営されていたの考察を行った。その結果、祭礼における旦那衆の権威は鳶との相互交渉によって創造されていることが明らかになった。また、京都祇園祭の船鉾町で活動を行う作事三方の大工方を事例に、関西圏の祭礼の内部構造について分析した。

第III部祭礼の変容と祭典組織の動向では、千葉県成田市の成田祇園祭、群馬県沼田市の沼田まつりについて考察した。成田祇園祭では、祭礼における祭礼の観光化について分析した。そこから、成田祇園祭の先鋒と呼ばれる役職の誕生と新勝寺との関係について考察を行った。沼田まつりでは、マンドウと称される山車の変容について分析を行った。このマンドウの新造において、積極的に江戸型山車の形が導入される要因について考察を行った。

「結論」では、熊谷うちわ祭において行われた鳶による旦那衆の権威の創造とその行使について分析する。最後に、熊谷うちわ祭をはじめとする祭礼における権威と権力について考察する。

目次

序論

1 1 研究の目的と視点—“旦那を創る”ということ—	1 頁
2 都市祭礼の視点	”
(1) 民俗学における祭り・祭礼研究	
(2) 祭礼研究の多様な視点	
(3) 先行研究の課題	
3 3 本研究の対象と方法	5 頁
(1) 研究対象と方法	
(2) 本論の構成	

第 I 部 熊谷うちわ祭の歴史と民俗

第 1 章 熊谷市と熊谷うちわ祭の概要

1 熊谷市の位置と歴史	7 頁
2 熊谷愛宕八坂神社と祭礼の日程	”
3 各町内と祭典組織	8 頁
(1) 12か町と8か町	
(2) 町内の役職	
4 熊谷うちわ祭の歴史	9 頁
(1) 江戸時代の祭礼	
(2) 明治時代の祭礼	
(3) 中断と復興	
(4) 祭礼の発展と観光化	

第 2 章 新聞にみる明治時代の熊谷うちわ祭

はじめに	2 1 頁
1 熊谷うちわ祭の新聞記事	2 2 頁
2 愛宕八坂神社の記述	2 6 頁
おわりに	2 8 頁

第 3 章 熊谷うちわ祭に関わる民俗事象

はじめに	3 2 頁
1 熊谷うちわ祭の祇園柱	” 頁
(1) 現在の祇園柱	
(2) 古文書に見る祇園柱	
①江戸時代の記述	
②明治時代の祇園柱	
(3) 資料に見る祇園柱	

2	団扇の頒布と祭礼	37頁
	(1) 現在頒布される団扇	
	(2) 資料にみる熊谷うちわ祭の団扇	
	(3) 頒布品としての団扇	
3	鳶と総代の大山代参	41頁
	(1) 熊谷うちわ祭の大山代参	
	(2) 熊谷の大山信仰	
	(3) 大山代参と町内の行事	
	(4) かつての大山代参	
	おわりに	47頁
第Ⅱ部 旦那衆・鳶・若連の攻防		
第4章 祭礼における熊谷鳶の変容		
	はじめに	54頁
1	鳶を巡る研究	〃頁
	(1) 職業としての鳶	
	(2) 祭礼の中の鳶	
2	熊谷鳶の実像	56頁
	(1) 熊谷うちわ祭の鳶	
	(2) 祭礼での活動	
	(3) その他の活動	
3	かつての熊谷の町鳶たち	59頁
	(1) 防災と鳶	
	(2) 日常での雑務	
4	熊谷うちわ祭の鳶たち	62頁
	(1) 仕事師から象徴的な鳶へ	
	(2) 祭礼の役割としての鳶	
	おわりに	64頁
第5章 旦那衆の権威の創造		
	はじめに	67頁
1	大総代と総代の役割と活動	〃頁
	(1) 大総代と総代の位置づけ	
	(2) 大総代の活動	
2	総代と旦那衆の変遷	70頁
	(1) お祭り旦那の葛藤	
	(2) 資金源による祭礼の変化	
3	伝統的な旦那から比喩的な旦那へ	73頁
	(1) 人口の過疎化と総代の変遷	

(2) 祭礼の拡大と大総代誕生	
(3) 他町内への意識	
おわりに	75頁
第6章 若連の変容と拡大	
はじめに	79頁
1 若連から祇園会への再構成	〃頁
(1) 現在の祇園会	
(2) 旧若連の人びと	
(3) 祇園会成立後の動向と役割の拡大	
2 旦那と鳶と若者たち	83頁
3 熊谷うちわ祭の若者組織	84頁
おわりに	85頁
第7章 関西圏の祭礼組織の内部構造—京都祇園祭船鉾町を事例に—	
はじめに	89頁
1 京都祇園祭と船鉾町	90頁
(1) 京都八坂神社の祇園祭	
(2) 船鉾町の歴史と船鉾	
(3) 現在の祭典組織	
2 大工方の活動	94頁
(1) 船鉾町の行事と作業	
(2) 大工方の作業	
おわりに	97頁
第Ⅲ部 祭礼の変容と祭典組織の動向	
第8章 観光化による祭典組織の変化—千葉県成田市成田祇園祭を事例に—	
はじめに	102頁
1 新勝寺と門前町の祇園祭	103頁
(1) 成田山新勝寺の門前町	
(2) 成田山門前町の祇園祭	
2 先鋒の役割と観客	105頁
(1) 先鋒という役割	
(2) 先鋒の成立	
3 成田祇園祭の観光化	107頁
おわりに	110頁
第9章 祭礼における外部的な権威—沼田まつりのマンドウを事例に—	
はじめに	116頁
1 地域と祭礼の概観	117頁
(1) 祭典地域と神社の歴史	

(2) 沼田まつりの歴史	
2 マンドウの変遷	120頁
(1) 江戸時代のマンドウ	
(2) 明治時代のマンドウ	
(3) マンドウの転換期	
おわりに	124頁
結論—祭礼における権威・権力という視点—	
1 熊谷うちわ祭の中にみる鳶、旦那衆、若連	131頁
(1) 旦那と鳶との関係	
(2) 権威を創る目的	
(3) 大総代の創設	
2 祭礼における権威付けと競争	134頁
(1) 観光化の影響	
(2) 江戸型山車化と権威	
4 都市祭礼の権威と権力という視点	136頁
(1) 視覚化される町内の権威と権力	
(2) 外側の権威と権力	
付記	137頁
参考文献	138頁
初出一覧	144頁

〈写真〉

第1章 熊谷市と熊谷うちわ祭の概要

写真1	祇園柱	14頁
写真2	石原八坂神社の神事	〃頁
写真3	渡御発輿祭	〃頁
写真4	神輿渡御	15頁
写真5	途上奉幣祭	〃頁
写真6	渡御着輿祭	〃頁
写真7	ヒッカワセタタキアイ（引きあわせ叩き合い）	16頁
写真8	会所巡拝	〃頁
写真9	巡幸祭	〃頁
写真10	行宮祭	17頁
写真11	年番送りの大総代の見栄きり	〃頁
写真12	還御発輿祭	〃頁
写真13	祇園会による神輿還御	18頁
写真14	還御着輿祭	〃頁
写真15	神輿洗いの儀	〃頁
写真16	総代	19頁
写真17	祭事掛	〃頁
写真18	鳶	〃頁
写真19	ハッキリ	20頁
写真20	祇園会	〃頁
写真21	お囃子会	〃頁

第3章 熊谷うちわ祭に関わる民俗事象

写真1	撤去される祇園柱	49頁
写真2	熊谷うちわ祭で頒布される団扇	〃頁
写真3	行宮で販売されている団扇	〃頁
写真4	明治時代の祭礼の団扇	50頁
写真5	明治時代の祭礼の団扇②	〃頁
写真6	明治時代の祭礼の団扇③	〃頁
写真7	第一本町区の神酒粹	51頁
写真8	第二本町区の神酒粹	〃頁
写真9	筑波区の神酒粹	〃頁
写真10	筑波区の神酒樽	52頁
写真11	大山代参の服装	〃頁
写真12	阿夫利神社下社での神事	〃頁
写真13	第一本町区の神酒粹巡行	53頁

写真14	神酒粹式	〃頁
写真15	筑波区の神酒粹式	〃頁

第4章 祭礼における熊谷鳶の変容

写真1	お祓いの獅子	66頁
写真2	木遣り奉納	〃頁

第6章 若連の変容と拡大

写真1	屋台を曳く弥生町の祇園会	88頁
写真2	熊谷うちわ祭のマンド（昭和30年代）	〃頁

第7章 関西圏の祭礼組織の内部構造—京都祇園祭船鉾町を事例に—

写真1	船鉾	100頁
写真2	船鉾の大工方	〃頁
写真3	船鉾の部品	〃頁
写真4	組み立て最中の船鉾	101頁

第8章 観光化による祭典組織の変化—千葉県成田市成田祇園祭を事例に—

写真1	初日大本堂前集合	114頁
写真2	出囃子披露	〃頁
写真3	ポール先鋒	〃頁
写真4	綱先先鋒	115頁
写真5	上乗り	〃頁
写真6	昭和49（1974）年の土屋青和会	〃頁

結論—祭礼における権威・権力という視点—

写真1	沼田まつりのマンドウ	130頁
写真2	明治時代のマンドウ（上之町）	〃頁
写真3	自動車マンドウ（西倉内町）	〃頁

序論

1 研究の目的と視点—“旦那を創る”ということ—

本研究は、埼玉県熊谷市の熊谷うちわ祭で活動する鳶、旦那衆、若連の祭典期間中の活動について注目する。そこから、熊谷うちわ祭の内部において、どのように祭典組織が活動していき祭礼が実行されているのか考察する。

私は、平成27(2015)年から令和元(2019)年まで、熊谷うちわ祭の年番町の参与観察を行ってきた。その中で、祭礼で活躍する鳶が祭礼の執行に関して欠かすことのできない存在であると知った。修士論文では、「熊谷うちわ祭の鳶職—上演行為を中心に—」という題で、熊谷うちわ祭の鳶の活動について論じた。その後、私は博士後期課程に進学し、継続して熊谷うちわ祭の参与観察調査を行った。

鳶と旦那衆の関係に注目する契機となったのは、平成29(2016)年7月28日に祭典関係者が神奈川県伊勢原市の大山阿夫利神社へ参拝する大山代参に同行したときであった。その日の夜、大山の宿坊にて各町内の鳶の人たちと談笑していた際、ある町内の組頭が若い鳶たちに「いいか、山車の手間賃については、お前らがしっかり旦那に教え込まないとダメなんだぞ!」と語っていた。この年、伊勢町区が屋台から新たに山車を新造することが決定した。これに対して、古株の組頭から山車の町内は、人形などの上げ下げがあるために屋台の町内よりも鳶に対する手間賃が増加すると語っていた。また、その後に強い口調で「旦那は、祭礼のことは何も知らないんだ。だから、俺たちが教え込まなければ、旦那になれないんだからな!旦那は俺たちが造るんだ!」と声をあげた。

私は、その言葉を聞いた際、僅かに違和感を覚えた。なぜなら、熊谷うちわ祭では、鳶はあくまでも旦那に雇用され、彼らを下から支える存在である。なにより、鳶は旦那を立てなければいけない存在であった。その中で組頭が語った、“旦那を造る”というは鳶が旦那になる人びとを指導して、一人前の旦那衆にするというものであった。この言葉を聞いたとき、私は熊谷うちわ祭の旦那衆の存在において鳶の存在が重要な存在であるのではないかと感じた。従来の祭礼研究などでは、祭礼での旦那衆などの存在は、自身の財力などによって町をまとめていると認識されていた。しかし、実際は旦那衆の存在に関しては、鳶が何らかの交渉があってこそ成立するものではないかと考えた。

そこで、私は祭礼で活動する鳶などの職人と彼らを雇用する町の旦那衆の相互交渉の中で、どのように祭礼が実行されているのかを明らかにするため研究することにした。

2 都市祭礼の視点

(1) 民俗学における祭り・祭礼研究

祭礼研究の歩み 柳田國男は、『日本の祭』で祭りから祭礼へ変化する過程において、祭礼を行う側の間人は、見る側の間人を意識し、徐々に祭りを派手にする風流の存在を指摘した。柳田は『日本の祭』において、数多の日本の祭礼はその地に住む氏子が中心となり、その地域の豊作や安寧を祈願するために行われていることを述べていた

〔柳田 1989 [1942] 276～277〕。また、この『日本の祭』には観客の存在により、祭礼がより華美になる風流について指摘がなされた。桑江友博は、柳田民俗学における祭りの構成要素を①物忌み、②神霊来臨、③オコモリ、④人身共食、⑤後宴と指摘する。

真野俊和は、「民俗学的視点からの祭り研究といえども、というより民俗学だからこそ、その視線は多くの場合、過去に向けてしまっていた。(略)それはそれなりに意義深い仕事ではあったが、いままさに目の前で表出されている祭りの「意味」の把握はついにこぼれおちたままだったとあってよい。」〔真野 2001 3〕と柳田民俗学における祭礼研究について言及している。

桑江友博は、初期の民俗学の祭礼研究について以下の4点の指摘を述べている。

- ①農村もしくは村落共同体の内部で行われる催事・神事。
- ②善神型、祖霊崇拜。
- ③調査研究の最大の目的が、過去からの連続性を確認できるという確信、もしくは期待。
- ④中世・近世の社会事情や文化状況を明らかにしようとしていた。〔桑江 2009 99〕

このように、柳田を中心とする祭礼研究では、神事について注目が行き、風流についてあまり考察が行われてこなかったと指摘できる。

(2) 祭礼研究の多様な視点

宗教学の視点 その後、1960年代から宗教学、文化人類学を中心に都市祭礼の研究が起こった。柳川は、政治現象や社会運動を宗教と重ね合わせてみる合わせる視点で、「祭りを研究すれば、何か日本人の一つの生き方といったものがわかるのではないかという希望から」という理由で祭礼を研究したとされる〔柳川 1987 77～78〕。桑江は、柳川の祭の諸特徴の4点について以下のように指摘している。

- (1) 神職などの宗教専門家だけではなく、多数の人間が祭の主役・裏方・見物人まで含めて、組織の能率を考へることなく、最大に「動員」に動員される。
- (2) 伝統とのつながりをもつシンボルが「動員」される。
- (3) 個別的な儀礼の複合であり、全体を通す一つの筋を持ち、ドラマに類比することができる。
- (4) この祭へ積極的、消極的な参加によって、過去とのつながり、家、地域社会とのつながりを再確認する。〔桑江 2009 100〕

宗教学の祭り・祭礼研究では、日常性と非日常性について注目する視点のもとで研究が行われてきた。いずれもこれらは、宗教学や人類学的な視点を通して、祭礼の構造を分析したものであった。また、藪田稔は、祭儀と祝祭の関係に関しては以下のように指摘している。

祭りの表象はすべき位相も、この融即状況(コムニタス)の位相に他ならない。この位相は、社会の依拠する世界観によってさまざまな象徴的表現も様相を呈する。(略)祭が、祭儀における聖別と祝祭における混融の相乗作用を結果として、終局的全体の超越的な融即状況の位相を表彰し得る限り、祭る者の実感する

実在的充足は彼の日常的自己疎外を癒し、共同体の場に自己の存在証明を見出すことができるのである。〔藪田 1990 63〕

藪田が述べている「融即状況（コムニタス）」は、ターナーのコムニタス論の援用である。さらに「聖別」はヴァン・ジュネップの通過儀礼の理論をもとに祭礼を捉えている。それから、藪田は祭礼の研究に関して以下の方法を述べている。

たとえば祭りする者どうしが共有するであろう主観的現実の意味を、その外側にあつて観察する者がいま現に祭している者たちを目撃して同時進行的に共感するもうひとつの現実認識を通して解読する。内側の現実の意味をこうして解読することは、内側の主観に外部で共感する観察者の主観が関わって主体的に祭の現実性を客体化（対象定立）して試みることであつて、これは絶対に、観察者の主観性を排除した客観的というたぐいの観察結果ではない。そして、この客体化された解読の成果が出た段階で、初めて鑑札のデータ（外側の現実）と、それを手がかり（記号）とした意味（内側の現実）解読との、その学的妥当性を巡るの評価が問われるのだ。〔藪田 1990 63〕

藪田は、祭礼研究のアプローチに関しては、現象学的社会学の方法を採用している。このように、いずれも、柳川と藪田が都市祭礼を通して明らかにしようとしたのは日常性、非日常性に目を向けるものであつた。これらについての分析は、海外の文化人類学や宗教学の議論を含めた検討であつた。

都市祭礼と文化人類学 福原敏男は、「日本の都市祭礼研究は、1960年末から1970年代にかけて本格的に始まったといつてよい」として、「人類学的祭礼研究は、基本的に伝統的都市祭礼をフィールドに成果をあげてきたといえる。以降、現在までの約三十年間、人類学者の日本研究において、『都市祭礼』は常に好ましいテーマであつたらし」と指摘している〔福原 1999 23～24〕。文化人類学では、中村孚美¹と米山俊直²の両者が、都市祭礼を対象に研究を展開した。谷部真吾は、中村孚美の祭礼論について「祭礼のありよう（行事構成や運営組織など）、各祭礼の特徴の明示、アーバニティーの抽出の3点であつた」としている〔谷部 2011 56〕。同様に谷部は、米山が都市を文化の創造・革新の場という視点で祭礼を研究していると指摘している〔谷部 2011 62〕。この両者の研究に対して、谷部は以下のように指摘している。

2人の研究は、祭礼を詳細に記述することに重点が置かれていたように思われるからである。確かに、中村のアーバニティーという概念や、米山の祭礼を手がかりとして都市をとらえるという方法論は、現在でも魅力的である。しかし、これらの可能性を秘めた諸道具は、果たして有効活用されたのであろうか。本稿で示したように、筆者の目には残念ながら、これらの概念・方法論を駆使して祭礼

¹ 中村孚美 1972 a 「秩父祭り—都市の祭りの人類学—」『季刊人類学』3巻4号

中村孚美 1972 b 「都市と祭り—川越祭りをめぐって—」『現代諸民族の宗教と文化』社会思想社、1987 「博多祇園山笠—そのプロセスと都市性—」『季刊人類学』18巻3号
京都大学人類学研究会

² 米山俊直 1974 『祇園祭—都市人類学こどはじめ』中央公論新社、1979 『天神祭 大阪の祭礼』中公新書

や都市について深く考察されることはなかったように思われる。その意味で、中村・米山の祭礼研究は、研究の方向性を模索していた段階にあったといえるのかもしれない。〔谷部 2011 63〕

谷部の指摘する通り、彼らの研究目的は都市祭礼を事例としてアーバンティニーや創造・革新の場である都市を明らかにすることが目的であった。

社会学の祭礼研究 社会学の祭礼研究では、祭礼中の人びとの行動について注目が為されていた。田中重好は、資源動員論、集合行動論、シンボル分析論の3点を指摘している〔田中 2007 81～84〕。に関しては、伊藤雅一は、この田中の研究視点は「祭り＝社会運動」として捉えているとした〔伊藤 2015 106〕。

資源動員論は、祭りをさまざまな社会的資源が動員される過程として見る立場であり、社会的資源とは、人的資源・経済的資源・物的資源・技能的資源の4点を指す。集合行動論は、祭典組織の人びとの集合行動に注目するものである。「合衆型」というのは、「不特定多数の人びとが、自分たちの自由意思で選択し、さまざまな縁につながって、ごく一時的に結びつく集合的な祝祭」〔松平 1990 18〕を指している。具体的には、「伝統型」が「スル」（運営）と「ミル」（観客）を分離させていたのに対し、「合衆型」では「ミル」が「スル」へと参加していくことを挙げている〔松平 1990 348～351〕。シンボル分析論は、生死、秩序、破壊などの祭礼に見られる文化的意味を研究する視点である。

田中は、集合行動論を参考に青森県の三都市のネブタ祭りを検討した〔田中 2007 69～138〕。この検討を通して、各集団の関係で組織化された集団とそうではない組織の2層構造を指摘した〔田中 2007 110～111〕。この集団が祭礼を運営している祭礼について、地域的な共同性の発現形態であり、地域的な共同性を育む場でもあると論じている〔田中 2007 138〕。

このように、祭礼研究は現在でも様々領域で研究が行われている。その中で、様々な研究課題を明らかにするために、さまざま視点で研究が行われていることが指摘できる。これらの関心は、特に都市祭礼、ないしはその背後にある都市社会を描き出そうとするものである。その都市社会の具体的なイメージは、文化の革新・創造の地であるということと、様々な地縁や社縁などのつながりを自分の意思で取捨選択できる空間である。

創られた伝統と祭礼 エリック・ホブズボウムらは、伝統の「創出」に関する考察を行った。ホブズボウムらは、伝統は長い期間を経て成立したものと思われているが、実際は近年創出されたものであり、その時分によっては捏造されてきたものとしている〔HOBSBAWM, RANGER 1992〔1983〕 9〕。これは、創られた伝統という概念で、社会学や民俗学をはじめ幅広い学問領域で援用されてきた。竹元秀樹は、都市コミュニティ論を参考に、宮崎県都城市の3つの祭りを分析した³。竹元の研究視点は、都市祭礼を自発的な地域活動と認識して、その地域性に重点を置いている。また竹元は、象徴・意味論などを参照しており、シンボル分析論も行っている。竹元はおかげ祭りを事例に、祭礼がおこなわれる当初の目的であった駅前地域の再生から、目

³竹元秀樹 2014 『祭りと地方都市—都市コミュニティ論の再興』 新曜社

的がそれで本物の祭りを目指すように変遷したと指摘する。この動きに対して、竹元は伝統の創出する活動だとし論じている〔竹元 2014 233～236〕。同様に、金賢貞は、「ローカル・アイデンティティを「地域社会の独自性を主張する集合的認識」〔金 2013 22〕として茨城県の石岡まつりの研究を行った⁴。

いずれも、これらは地方都市の中に存在する祭礼を再構築されていく過程、その受容と展開について注目したものである。

（3）先行研究の課題

民俗学における都市祭礼の研究では、当初は村落の善神型の祭礼を対象に行われてきた。その一方で、真野の指摘する通り民俗学の祭礼研究は、過去に対して視点が向けられるようになっていった。その後、1960年代から隣接する宗教学、文化人類学、社会学において祭礼の研究は頻繁に行われるようになった。それらの研究では、都市祭礼の背後にある文化の革新・発生地としての都市の姿を浮かび上がらせるものであった。その後、民俗学における祭礼研究では、それらの理論をもとに祭礼研究が2010年代から再び行われるようになる。これらの研究では、観光資源としての利用される祭礼を中心にみるものであった。

これらの研究では、1960年代を中心に起こった祭礼の組織を通して都市社会を俯瞰しようとするものであった。その後の研究では、徐々に祭礼組織の外部に視点が進んでいき、祭礼組織について照射する研究が不足している。また、谷部は中村と米山の研究に対して、「概念・方法論を駆使して祭礼や都市について深く考察されることはなかったように思われる。」と指摘している。都市祭礼の研究では、背後に潜む都市社会をあぶり出す有効な手段として研究されていたが、その根本にある祭典組織の人の動きを正確にとらえられていなかった。

3 本研究の対象と方法

（1）研究対象と方法

本論では、熊谷うちわ祭を実行する鳶、旦那、若連の動きについて注目する。本論部分では、平成26（2014）年から令和元年（2019）年までの熊谷うちわ祭の参与観察の記録とともに考察していく。そこから、過去の祭礼に関する資料から祭礼の意味合いが大きく変化していた昭和30年代から現代までの祭礼組織の変容について論じていく。

熊谷うちわ祭について、参与観察を行った町内は以下の通りである。

2014年5月～2015年10月	第一本町区
2015年2月～2016年10月	第二本町区
2016年2月～2017年10月	筑波区
2017年3月～2018年10月	銀座区
2018年3月～2019年10月	弥生町区

これらの町内では、浴衣を貸していただき、祭事係として祭典期間に山車・屋台巡行

⁴ 金賢貞 2013 『「創られた伝統」と生きる 地域社会のアイデンティティ』 青弓社

などに参加した。

調査期間は、平成27(2015)年～平成30(2018)年の熊谷うちわ祭での年番町における参与観察の記録をもとに考察する。あわせて、町鳶が存在しない関西圏の都市祭礼の事例として京都祇園祭の船鉾町の船鉾を事例に、作事三方の一つの大工方について考察をした。その他に、千葉県成田市の成田祇園祭と群馬県沼田市の沼田まつりについても分析をした。

(2) 本論の構成

本論は、3部構成となっている。以下のように論じていく

序論では、本研究の目的、先行研究、調査方法について述べる。

第Ⅰ部では、熊谷うちわ祭りの歴史、祭典組織等を説明する。あわせて、本研究において新たに発見された資料などをもとに祭礼の歴史について検討していく。また、熊谷うちわ祭に関連する民俗事象もふまえて考察する。

第Ⅱ部では、熊谷うちわ祭の旦那衆、町鳶、祇園会(若連)の関係性を考察する。従来研究では指摘されていなかった町鳶や若連などの下位の人びとが上位にいる旦那衆の権威を創造する仕組みについて分析する。あわせて、京都府京都市の京都祇園祭では、船鉾町を事例に町人と山鉾を組み立てる作事三方との関係性を分析する。

第Ⅲ部では、熊谷うちわ祭以外の他の祭礼における祭典組織などについて論じていく。千葉県成田市の成田祇園祭では、観光化によってどのように祭礼が変化していったことについて論じていく。群馬県沼田市の沼田まつりでは、マンドウと呼ばれる山車の形態が祭礼組織の変化や祭礼地域周辺の影響を受けて変化していったことについて論じる。

結論では、熊谷うちわ祭を中心に、祭礼における権威と権力について考察する。

第I部 熊谷うちわ祭の歴史と民俗

第1章 熊谷市と熊谷うちわ祭の概要

1 熊谷市の位置と歴史

熊谷うちわ祭が開催される埼玉県熊谷市は、埼玉県北部に位置する（地図1参照）。江戸時代、中山道の宿場町として発展していた。明治6（1873）～9（1876）年まで、入間県と群馬県の合併により成立した熊谷県の県庁所在地となり、地域の中核都市として発展する。明治5（1872）年に熊谷町が誕生する。明治16（1886）年7月28日、日本最初の私鉄線路として、日本鉄道株式会社によって上野～熊谷間に鉄道が開通し、北関東と東京を結ぶ物流の拠点となる。明治22（1889）年の町村制施行により、大里郡熊谷町と石原村が合併する。昭和8（1933）年、市制施行により熊谷市となる。昭和20（1945）年8月14日に米軍による空襲、358,000坪、3,630戸が焼失し、戦災罹災者は15,390戸・死者234人・負傷者3000人であった。その後、熊谷市は急速に復興事業を行い、1970年代には完全に復興する。

昭和16（1941）年に大里郡佐谷田村、大麻生村、玉井村、久下村（大字久下字荊原を除く）が編入される。昭和29（1954）年には、北埼玉郡中条村、大里郡別府村、奈良村、三尻村が編入される。昭和30（1955）年に大里郡吉岡村、北埼玉郡太井村の一部、星宮村の一部、平成17（2005）年、大里郡妻沼町、大里郡大里町が熊谷市に編入し、新たに熊谷市が設置される。平成19（2007）年に大里郡江南町が熊谷市に編入される。

2 熊谷愛宕八坂神社と祭礼の日程

熊谷愛宕八坂神社の由来 熊谷愛宕八坂神社は、熊谷市鎌倉町に鎮座する神社である。祭神は、軻遇突智命・須佐之男命・大市姫命・事代主命である。大永2（1522）年大善院3世行源法師が牛頭天王を勧請して邸内に創建したことが始まりとされる。文禄元（1592）年には市神・八坂・伊奈利の三神を合祀し、愛宕牛頭天王稻荷合社と称した。明治時代になると、社号が愛宕神社に改められた。社格は、無格社である¹。昭和20（1945）年8月14日、当社は大戦最後の空襲で焼失した。昭和26（1951）年、国道17号の拡張に伴って八木橋デパートの前から秩父鉄道上熊谷駅付近に移転した。

なお、熊谷うちわ祭の日程や執行については、年番町が決議してそれに愛宕八坂神社の宮司²が承認するというかたちで決められている。

祭礼の日程 熊谷うちわ祭は、毎年7月20～22日までの3日間行われる愛宕八坂神社の例大祭である（表1）。この祭礼は、「関東一の祇園」と称されており、山車7基、屋台5基が熊谷囃子を鳴らしながら、熊谷市市街地を巡行する祭礼である。この祭礼の特徴は、祭礼期間中に国道17号の交通規制³、直径約30センチの巨大な摺り鉦を用いる囃子と2台以

¹ 熊谷愛宕八坂神社は、無格社のため氏子圏が存在しない。祭礼に関わる総代は信徒総代と称される人びとである。一方で、ほとんどの祭典関係者は「総代」と呼称されているため、自分たちが氏子総代と認識している。現在、神社本庁に登録されることによって、社格を向上しようとする運動が起こっている。

² 現在、熊谷愛宕八坂神社は兼務社となっており、近隣の古宮神社に奉仕する神職によって管理されている。

³ 平成28（2016）年の熊谷うちわ祭の交通規制は、7月20日13時～20時に熊谷駅西通り商店街、6時30分～20時まで熊谷駅東口周辺・北口駅前広場から国道17号までの駅前通りになる。

上の山車・屋台を向き合わせて囃子を競うヒッカワセタタキアイ（引き合わせ叩き合い）が盛んに行われることである。その他にも祭典期間中、他の祇園際では見られない祇園柱という支柱が設置される（写真1）。また祭典期間中、アングウ（行宮）⁴や各町会所や商店などで団扇が配られるが、特に団扇を用いた神事や催事は存在しない。

7月19日の9時より、熊谷愛宕八坂神社の境内で、関係者だけで遷霊祭が行われる。翌日の7月20日の早朝の午前3時頃から、鳶による神輿の組み立てがおこなわれる。早朝5時から、石原八坂神社で神事が行われる（写真2）。この神事は、本石区と石原区の総代と祇園会を中心に神事が行われる。その後、8時から愛宕八坂神社境内で、渡御発輿祭が開催される（写真3）。この神事では、神輿渡御と祭礼期間中の安全を祈願して行われる。神輿は鳶に担がれて、各町内を渡御する（写真4）。この神輿渡御の途中、途上奉幣祭という道中4か所で行われる神事がある（写真5）。10時頃、神輿が行宮に到着して渡御着輿祭が行われる（写真6）。この日の午後から山車・屋台巡行が行われる。祭典期間中、ヒッカワセタタキアイと称して囃子の競演がある（写真7）。

中日の7月21日8時頃から複数の神職が各町の会所を巡拝する会所巡拝がおこなわれる（写真8）。13時から、各町の山車・屋台が八木橋デパートの前に集合して、清祓いの儀が行われる。それから、各町の山車・屋台が石原区と本石区を引き連れ、行宮を参拝する巡幸祭が行われる（写真9）。最終日は、午前9時頃から行宮で熊谷うちわ祭の最高責任者である大総代が祈願文を奏上する行宮祭がある（写真10）。21時からお祭り広場と呼ばれる会場で、本年度大総代と来年度大総代予定者による年番札の引継ぎ式である年番送りが行われる（写真11）。23時30分頃に、還御発輿祭が行われる（写真12）。午前0時に各町区の青年集団である祇園会による神輿の還御が行われる（写真13）。神輿が神社に到着後、還御着輿祭の神事が行われる（写真14）。その後、神輿庫の前で神輿洗いの儀が行われる（写真15）。これが終了すると、熊谷うちわ祭の神事は終了となる。

3 各町内と祭典組織

(1) 12か町と8か町

参加町内 現在、熊谷うちわ祭に参加している町内は、第一本町区（本一二）、第二本町区（本三四）、筑波区、銀座区、荒川区、弥生町区、鎌倉町区、仲町区、伊勢町区、櫻町区、本石区、石原区の12か町である（地図2、表2参照）。この内、第一本町区、第二本町区、筑波町区、銀座区、荒川区、弥生町区、鎌倉区、仲町区の8か町では、その年の祭礼の中心となる年番町が順番にまわされる（図1参照）。

(2) 町内の役職

年番・町内総代と祭事掛 年番総代は、大総代を中心に祭礼に関わる全てを差配する人びとである。祭典期間中は、神事の際は袴、それ以外の時は町内浴衣を着用している（写真16）。年番総代は、年番町だけで組織される。町内総代は全町内で組織され、自町内の祭事、鳶、祇園会、お囃子会について権限を持っている。祭事掛とは、総代の指示のもとで山車・屋台巡

7月21日は、13時～21時まで国道17号銀座2丁目～石原駅入口・熊谷市役所通り・国道17号南側からの内側市街地が交通規制になる。7月22日は、13時～22時に国道17号南側から路線までの内側市街、6時30分～21時まで国道17号銀座二丁目交差点～石原駅入口交差点・熊谷市市役所通りが交通規制となる。

⁴アングウ（行宮）とは、神輿を安置するお仮屋である。現在の祇園柱は、熊谷市市役所の前方にあるお祭り広場と呼ばれる場所に設置される。

行時に道路整理などを行う役割である(写真17)。祭事掛は、町内浴衣と呼ばれる各町区統一の浴衣を着用しているに、隣組や地区ごと当番をまわして行う。

薦 各町内では、組頭を筆頭に薦組がまとめられる(写真18)。薦の役割は、祭礼の準備(安全看板、山車・屋台の管理など)の他に、ハッキリと呼ばれる斎竹を設置(写真19)、初日の神輿渡御、全町区纏行進、木遣奉納などである。熊谷うちわ祭の薦は、祭礼の用意から片付けまで行う。近年は、人前に出てパフォーマンスなども行うようになった。現在、行われている薦のパフォーマンスは、初日に纏行進、最終日の纏振り、木遣奉納である。その他に、薦が祭典期間中に飾られる造花の販売を行っている。祭礼終了後、薦は年番総代、各町内の総代長に連れられて神奈川県伊勢原市の大山に大山代参と称して登拝に行く。大山では、総代と薦は大山阿夫利神社で祈祷を受けて、講中安全祈願札と神酒を貰う。大山から帰宅後、薦は町内で講中安全祈願札と神酒を配布する。

祇園会とお囃子会 祇園会は、一部の町内を除いた熊谷うちわ祭に参加する青年集団である(写真20)。主な役割は、祭礼前の準備(ゴミ箱の設置など)、お囃子会の指導、山車・屋台の飾りつけ、山車屋台巡行、還御祭の神輿渡御などである。昭和34(1959)年に各町の若連が統合されて祇園会となった。一方で、祇園会が解散した町内や祇園会と別の若連がある町内もあり、町内ごとに事情が異なる。祇園会は、各町内の支部長を中心に構成される。

お囃子会は、各町で組織されるお囃子を演奏する子どもたちの組織である(写真21)。昭和30年代まで各町区で熊谷市外からお囃子方と呼んでいたが、昭和40年代から自分の町内でお囃子を持つ。お囃子をやる子どもたちは、小学5年生から高校生までである。主に、楽器はツケ(ツケ太鼓、正面にある三連の太鼓)、オオド(和太鼓)、カネ(摺り鉦)、笛(横笛)である。楽器の数は町内によって異なるが、付け太鼓が3つ、大胴1つ、鉦3~4つ、笛2つがほとんどである。これらの楽器は、付け太鼓と大胴と鉦が小学生で、笛は中学生と高校生で演奏される。

4 熊谷うちわ祭の歴史

(1) 江戸時代の祭礼

牛頭天王勧請と祭礼 祭礼の起源は、寛永3(1750)年に町内一同の連署によって町役人の許しを得て、各町内が合同で祇園祭を行ったのが始まりとされる。これ以降の祭礼は記録が無いので明らかになっていないが、文化年間まで祇園柱と呼ばれる白布で飾った柱を札の辻⁵に立て、そこに鉢形村の太神楽師(軽業師)が狐の面と白布で作った尻尾を着用して芸能を行っていた。文化年間(1804~1817)では、軽業師による芸能は行われていない。当時の祭礼では、宿内統一で行われた屋台狂言が行われていた。屋台は深川宿より借り受け、子どもおどりと称して宿内の子どもを踊らせていた。宿内が上下に分かれて江戸より芸者を呼んで、屋台上で芸能が行われた。「熊谷宿祇園祭礼神輿渡御由来」によると、正徳年間(1711~1716)に仲町の熊谷寺境内社の奴稻荷神社の神輿を借りて渡御が行われる。宝暦3(1753)年に神輿を借りることができなくなり、神輿渡御が中断となる。天保元(1830)年、大善院十五世秀宝と町役人石川兵左衛門が発起人になって、町内から浄財を募って自前の神輿が製作された。この神輿は、幡羅郡弥藤吾村の修験者が製作した。

⁵札の辻は、かつて熊谷市本町にあった高札の設置場所である。高札場とも呼ばれていた。江戸時代は、木柵で囲まれた屋根のある高札場があったとされる。昭和29(1954)年11月3日に熊谷市指定記念物の史跡として登録された。

その後、大型の神輿になってから町民が神輿渡御に参加する。その際には、「江戸風」と称される担ぎ方をしてきた。この神輿は、昭和20（1945）年の空襲で焼失した。現在、祭礼に登場する神輿は、昭和33（1958）年に新調されたものである。

（2）明治時代の祭礼

団扇頒布と山車・屋台の登場 幕末の熊谷宿では、祭礼の日に赤飯を炊いて客に、「赤飯振る舞い（せきはんぶるまい）」を行っていたとされている。明治維新後、泉谷横町の料亭「泉州楼」の主人が、赤飯代わりに江戸日本橋にある団扇問屋の伊場仙の名入の渋団扇を配ったところ好評で評判になる。次第に他の店でも屋号や紋章を入れた団扇を配るようになった。その後、祭礼自体が「うちわ祭」と呼ばれるようになる。明治24（1891）年、本三四（現 第二本町区）が江戸神田の紺屋が個人所有する山車を買って、町内での山車の巡行と神田囃子の演奏が行われた。その後、続々と各町内が山車・屋台を持つようになる。明治27（1894）年に鎌倉区が山車を製作し、明治31（1898）年に第一本町区が山車を製作する。明治35（1902）年に、筑波区が鴻巣から山車を購入する。大正13（1924）年、弥生町区が新しく製作した山車で巡行行事に参加する。昭和22（1947）年に荒川区と銀座区が祭礼行事に参加する。この年に年番町を担う8か町制（第一本町区、第二本町区、筑波区、鎌倉区、仲町区、弥生町区、荒川区、銀座区）が成立した。昭和35（1960）年、荒川区から伊勢町区が独立、昭和55（1980）年、仲町区から櫻町区が独立し、独自の屋台にて祭礼と巡行に参加する。

石原地区の参加 明治22（1889）年に熊谷町と石原村が合併して熊谷市となる。旧石原村では、独自の八坂神社⁶の祭礼を行っていた。旧石原村の八坂神社では、毎年7月14日、15日に石原村の上町と仲町と下町の3か町が屋台を所有し巡行していた。昭和8（1933）年に石原村が熊谷市制施行を機に、石原村で使用されていた屋台が祭礼に参加する。町区名は、下町が石原一丁目、仲町が石原二丁目、上町が石原三丁目に変更された⁷。この2町区の神事は、現在も石原八坂神社で行われている。

（3）中断と復興

戦時下の祭礼 昭和13（1938）年に八坂神社の祭典が戦況悪化のため、中止になる。祭礼の代わりに戦意高揚のために、7月21日～22日に国防展覧会が開催される。石原地区では、熊谷市施行前の祭典日である7月14日～15日まで、子ども神輿の巡行だけが行われていた。石原地区での子ども神輿の巡行は、昭和16（1941）年に中止になる。祭礼は7年間中止される。昭和20（1945）年8月14日～15日未明にかけて、終戦直前の空襲により愛宕八坂神社・宮神輿、鎌倉区屋台が焼失する。石原地区では、天王社とそこに納められていた神輿、石原二丁目の屋台が焼失する。翌年の昭和21（1946）年は、有志3名が当時の神職であった野口氏の許可を受け、行宮を立てて祭典だけが行われた。昭和22（1947）年に焼け残った山車・屋台に飾り付けをして、戦前から来ていた囃子方に来てもらい、山車・屋台巡行を行った。同年、荒川区の屋台が巡行行事に参加する。その後、祭礼が完全に復活するのが、昭和23（1948）年である。石原地区でも熊谷5か町と

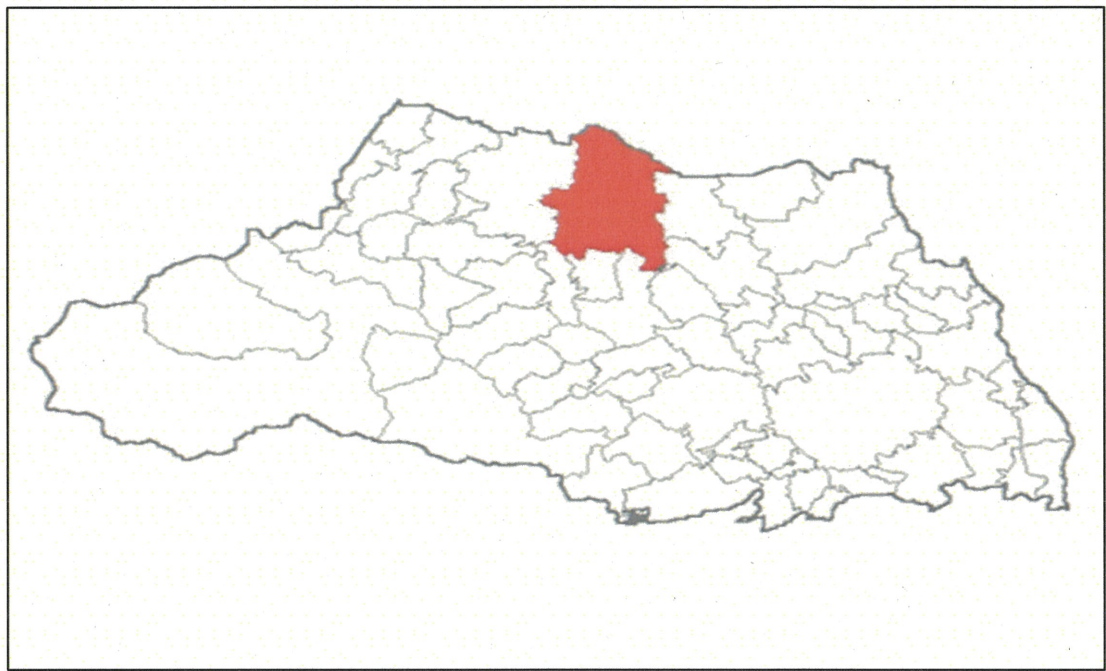
⁶石原地区の八坂神社は、現在熊谷市石原三丁目にある。祭神は素戔鳴尊、櫛稲田姫命、八柱御子神とされる。神社創建については不詳であるが、宝暦2（1752）年の熊谷宿古絵図に「天王社」とあり、同一の天王社が既に存在したと考えられる。明治39（1906）年の神社合祀令の際に、同村内の赤城久伊豆神社に合祀された。その後、鳥居等は撤去され、天王様（神輿）を納めた祠だけが残る。

⁷この石原地区の参加町の町名の変更は仲町が熊谷宿の仲町区と被ってしまうために、変更されたとなっている。

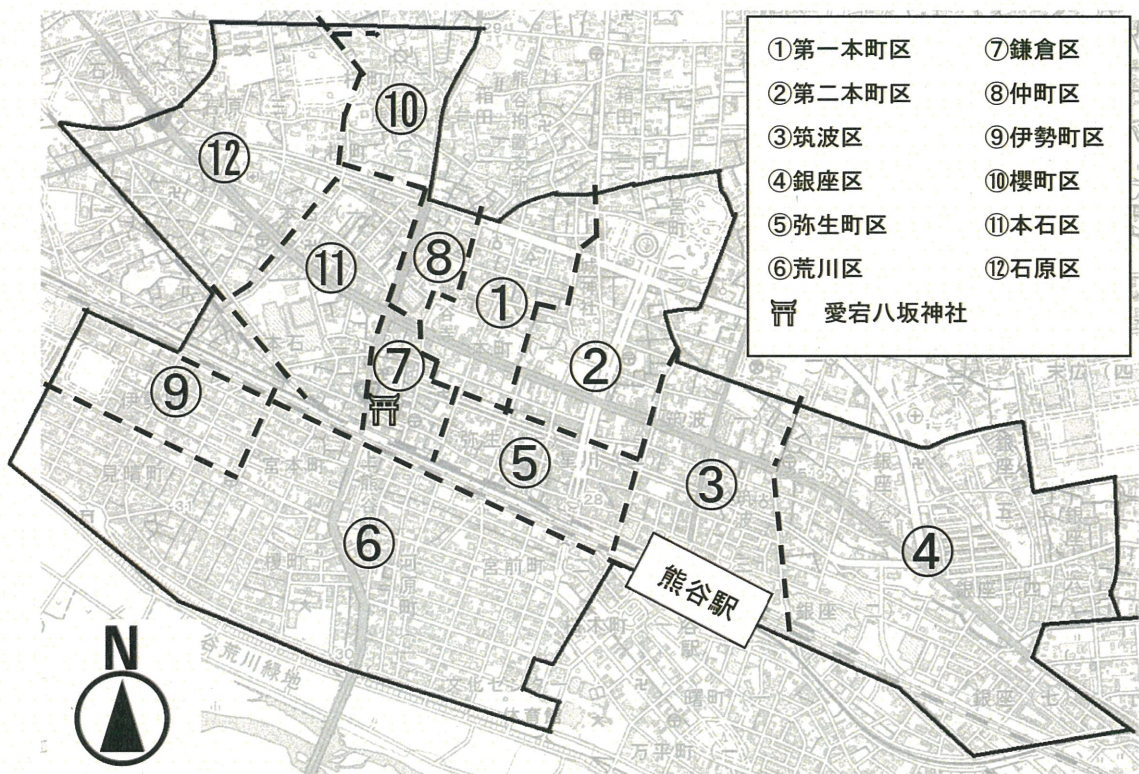
もに祭礼を行うこととなり、石原三丁目を石原区、石原一丁目と二丁目を本石区という名称で参加する。昭和36（1961）年に国道17号線が拡張することになり、それまで札の辻のあった群馬銀行前の交差点脇に行宮と祇園柱が移動する。その後も国道17号線の交通が激しくなったため、昭和44（1969）年から星川の流れるお祭り広場に行宮と祇園柱が移動した。

（4）祭礼の発展と観光化

出張するうちわ祭 昭和42（1967）年、埼玉県が会場となった国民体育大会の前夜祭に、山車4台の曳き出しが行われた。昭和43（1968）年3月に東京12チャンネル（現 テレビ東京）の「町ぐるみワイドショー」に熊谷うちわ祭が出演する。昭和47（1972）年に、NHK「ふるさとの歌まつり」に出演する。昭和45（1970）年8月に大阪で開催された日本万国博覧会の日本のまつりに出場した。以後、他の祭礼に山車が参加するようになる。昭和48（1973）年10月の東京都銀座で開催された大銀座まつり、昭和51（1976）年7月に東京都の神宮外苑で日本の祭りに、熊谷うちわ祭の山車が登場する。日本国内だけではなく、昭和55（1980）年8月にハワイのホノルルで「第一回まつり、イン・ハワイ」の日米交歓まつりパレードに参加する。昭和63（1988）年3月に「さいたま博覧会」の開催式、同年4月の熊谷市の日、平成2（1990）年4月の「国際花と緑の博覧会」に銀座区の山車が参加する。平成6（1994）年7月に京都祇園祭に銀座区の山車が参加する。平成15（2003）年に千代田区、江戸開府400年記念「江戸天下祭」に第二本町区の山車が、神田へ里帰りする。平成16（2004）年10月に熊谷市がメイン会場となった彩の国まごころ国体に9基の山車・屋台が出場する。同年11月、江戸フェスティバル行事として東京丸ビルで行われた山車人形展示に銀座区の山車人形（熊谷直実）を出展する。平成17（2005）年10月に江戸天下祭に銀座区の山車が参加し、埼玉県本庄市仲町、川越市連雀町、鴨川市諏訪講の山車との叩き合いが実施された。平成19（2007）年より、山車・屋台にGPS端末を設置し、立正大学が開発した位置情報検索システムの提供を行う。平成24（2014）年、熊谷八坂神社祭礼行事として、熊谷市指定無形民俗文化財に指定された。



地図1 熊谷市の位置



地図2 熊谷うちわ祭の参加町

表1 熊谷うちわ祭の日程

	日時	行事	場所
19日	午後9時	遷霊祭	愛宕八坂神社
	午前6時半	渡御発輿祭	愛宕八坂神社
20日	午前7時～午前10時	神輿渡御 途上奉幣祭	熊谷市街地
	午後7時	初叩き合い	熊谷駅前
21日	午前中	官司各町会所巡拝	各町会所
	午後1時半	巡行祭	国道17号中心
	午後8時	叩き合い	八木橋デパート前
22日	午前9時	行宮祭	お祭り広場
	午後9時	年番送り	お祭り広場
	午後11時半	還御発輿祭	お祭り広場
23日	午前12時～午前1時	神輿還御	熊谷駅前周辺
	午前1時	還御着輿祭	愛宕八坂神社

表2 各町内の山車・屋台

No.	町名	山車・屋台	人形	牽制順序	祇園会番号	薦組	お囃子会
1	第一本町区	山車	神武天皇	1	1	一番組	神武おはやし会
2	第二本町区	山車	手之男之命	2	2	二番組	本三四おはやし会
3	筑波区	山車	日本武尊	3	無し (筑波区囃子保存会)	三番組	筑波区囃子保存会
4	銀座区	山車	熊谷次郎直実	4	3	六番組	鳳凰お囃子会
5	弥生町区	屋台	無し	5	4	七番組	弥生町お囃子会
6	荒川区	山車	大国主尊	6	5	八番組	荒川区祇園会 (千鳥会)
7	鎌倉区	屋台	無し	7	6	四番組	八千代お囃子会
8	仲町区	山車	素戔嗚尊	8	無し (仲町睦会)	五番組	仲町お囃子会
9	伊勢町区	山車	弁財天	無し	8	八番組	伊勢町区お囃子会
10	櫻町区	屋台	無し	無し	9	九番組	櫻町お囃子会
11	本石区	屋台	無し	無し	7	十一番組	本石唐獅子お囃子会
12	石原区	屋台	無し	無し	無し (石原区若連睦会)	十一番組	石原区若連睦会

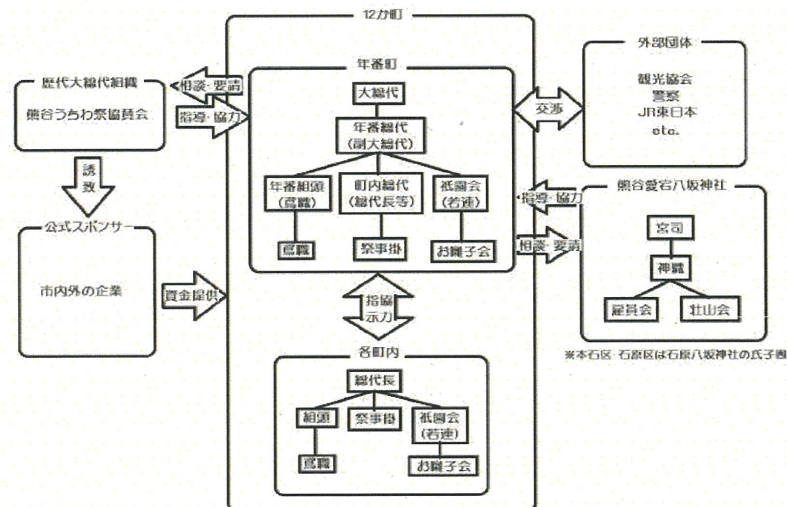


図1 熊谷うちわ祭の組織図



写真1 祇園柱



写真2 石原八坂神社の神事



写真3 渡御発輿祭



写真4 神輿渡御



写真5 途上奉幣祭



写真6 渡御着輿祭



写真7 ヒッカワセタタキアイ (引きあわせ叩き合い)



写真8 会所巡拝



写真9 巡幸祭



写真 10 行宮祭



写真 11 年番送りの大総代の見栄きり



写真 12 還御発輿祭



写真13 祇園会による神輿還御



写真14 還御着輿祭

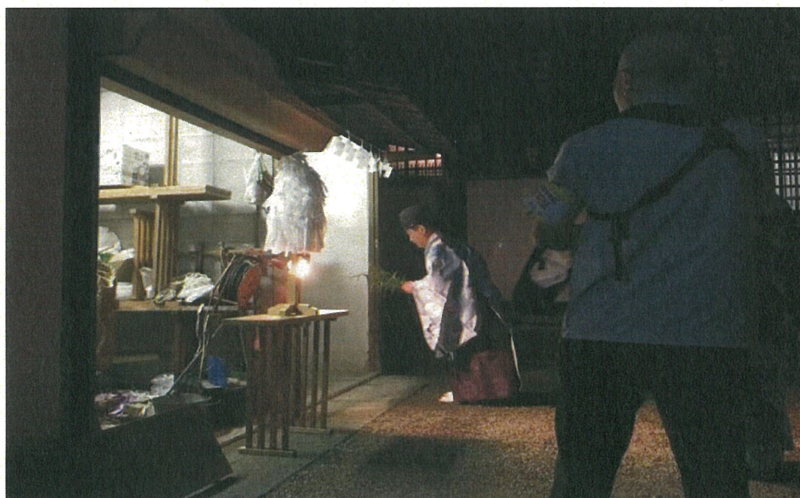


写真15 神輿洗いの儀



写真16 総代



写真17 祭事掛



写真18 鳶



写真19 ハッキリ



写真20 祇園会



写真21 お囃子会

第2章 新聞にみる明治時代の熊谷うちわ祭

はじめに

従来、熊谷うちわ祭の歴史については、空襲や大火などによって多くの資料が焼失した。しかし、新聞記事や写真等の資料は多く現存している。これらの資料は、熊谷うちわ祭の歴史の中であまり注目されていなかった。本章では熊谷うちわ祭に関わる資料とともに熊谷うちわ祭りの歴史を再検討していく。

現在、熊谷うちわ祭の歴史や祭礼の日程などを記した書籍は多数存在する。それらの書籍のほとんどは、実際に古文書等を対象として祭礼の歴史や変遷について十分に論じられていなかった。その理由として、祭礼に関する資料が不足していることと、長年各町内に伝えられている言い伝えがもとになって祭礼の歴史が語られていたことが要因である。『幽章閑話』¹には、熊谷うちわ祭は寛永3（1626）年6月から始まり、祭礼期間中に団扇を頒布したことが明治維新後に始まったもので、商店の屋号などが記載されたものが配られたとされている〔林 1935 156～157〕。

熊谷うちわ祭について言及した書籍では、『新編熊谷風土記稿』²、『熊谷祇園祭稿』³、『関東一の祇園 熊谷うちわ祭』⁴、『平成10年（1998）度 熊谷うちわ祭の記録』⁵などの書籍や文献が刊行されていたが、そのほとんどが『幽章閑話』と『うちわ祭の今昔』⁶を引用したものが中心となる。その後、平成13（2001）年に自身も薦として祭礼に参加している新島章夫氏が『関東一の祇園 熊谷うちわ祭り』⁷を発行する。この書籍では、過去の文献から初めて文献資料をもとに熊谷うちわ祭の歴史を記載し、祭典関係者や各町内の山車・屋台について解説がなされている。同書に記された熊谷うちわ祭の歴史は『幽章閑話』『新編熊谷風土記稿』『うちわ祭の今昔』が引用されているものの、ほとんどが古文書を中心に記されていた。

平成13（2001）年に新島は『関東一の祇園 熊谷うちわ祭り』で、熊谷うちわ祭で頒布されたうちわが伊場仙製であることを絡めて、東京日本橋のうちわ天王⁸との関係に言及をしていた。『関東一の祇園 熊谷うちわ祭り』では、2つ祭礼には関係性があることを示唆しているものの、実際につながりがあるか明確な資料がないため断定はできないと記載されている。

¹林 有章 1935『幽章閑話』 私家出版

²日下部朝一郎 1963『新編熊谷風土記稿』 国書刊行会

³重竹賢一 1992『熊谷祇園祭稿』 私家出版

⁴絵守すみよし 2000『平成10年（1998）度 熊谷うちわ祭の記録』 私家版

⁵絵守すみよし 2000『関東一の祇園 熊谷うちわ祭の記録』 私家版

⁶堀口熊五郎 1970『うちわ祭の今昔』 私家出版

⁷新島章夫 2001『関東一の祇園 熊谷うちわ祭り』 さきたま出版会

⁸山瀬一男の『幻の江戸の祭 神田三天王祭』によると、この天王祭とはかつて江戸で行われていた神田明神の三天王祭と称される3つの天王祭の三の宮の祭礼を指す。三の宮の祭礼は、旧小伝馬町で行われていた祭礼である。この祭礼は、正徳年間（1711～1715）に疫病が大流行したため、日本橋近郊の小舟町が神輿渡御などを行うようになったとされている。祭礼の日程は、当初は6月10日～13日の4日間行われていた。現在、小舟町八雲神社は、神田明神の境内に移され、4年に一度神輿渡御が行われている。江戸時代、この祭礼は神輿渡御の際、お捨りの代わりに団扇が投げられたとされる。

明治時代の熊谷うちわ祭の初期から熊谷町（現 熊谷市）では複数の新聞社があり、民間の新聞社も含め、多くの新聞記事が発行されていたとされる。その新聞記事の中に、微細ではあるが熊谷うちわ祭と祭礼が行われる神社の愛宕八坂神社に関する新聞記事が存在する。私は、明治時代の朝日新聞に記載されている新聞記事を検索した結果、熊谷うちわ祭について記された新聞記事10点、愛宕八坂神社の新聞記事2点、合計12点の祭礼と神社に関する新聞記事を発見した。

これらの新聞記事は、過去の報告書や祭礼に関わる書籍について記述されておらず、熊谷うちわ祭の歴史を語る上で重要な資料であると考えられる。本稿は、この12点の新聞記事をもとに、明治時代の祭礼と神社の歴史について明らかにする。

1 熊谷うちわ祭の新聞記事

熊谷うちわ祭の新聞記事 明治時代の祭礼については、新聞記事などの資料に注目した検討は行われていなかった。そこで、熊谷うちわ祭に関する記事をもとに、明治時代の祭礼の状況を明らかにする。

新聞記事1 明治33（1900）年7月21日 東京版『朝日新聞』

「熊谷町祭典の椿事」

埼玉県大里郡熊谷町にては去る十六日より十八日まで三日間八坂神社⁹の祭典を執行せしが此祭典は一名団扇祭りと呼べ近在より団扇を貰はんが為に集まる人の多く殊に熊谷五ヶ町とも山車を曳出し各町の若者ども互ひに派手を競ひたるより其賑はひ一通りならず十八日最早祭りも仕舞の日なりとて若者連一層花く敷町内を練廻りしが一二町目より曳出せし神武天皇の山車は三四町目の戸隠明神の山車に追付かんとなし□□¹⁰の木遣勇ましく曳行く際如何にしけむ前なる車輪少なく横に捻向きて運転はハタと停まりしかば山車は忽ちメリくと音して前の方へ転覆し地上に落ちて三段に折れ之に載り居たる数多の人を悉く地上に投出されたるにて群集の者は大いに驚ろき泣くもあり叫ぶもあり一時の混雑名状する由なき程なり此椿事中山車の下に□され又は落ちたる者に、重軽傷負ひしもの大工職鳶職囃し方等にて六名あり何れも応急手当をなし目下病院にて治療中なるが此山車は新調後間もなきものにて此損害千円余に上るとなり〔朝日新聞 1900a〕

この記事には、本一二丁目（現 第一本町区）の山車が転覆するという事故について記されている。祭礼の日付は7月16日～18日の3日間と表記されている。山車の記述については「熊谷五ヶ町とも山車曳出し各町の若者ども互ひに派手を競ひたる」とあり、すでに5か町によって祭礼が行われていたことが記されている。この新聞記事には団扇の頒布の記述があり、団扇を貰うために近在の地域から多くの人びとが集まっていたと記されている。

記事によると、最終日の18日まで山車の曳き手たちが、木遣を歌いながら巡行を

⁹熊谷八坂神社の表記は、明治43（1910）年以前は、「八坂神社」となっていた。それ以後の表記は、「八坂神社」となっている、本稿では、新聞記事の通りに表記した。また、団扇の表記は漢字に統一する。熊谷うちわ祭は公式名称の為、このままの表記とした。

¹⁰また、活字がつぶれて解読不能の文字については、「□」と表記する。

行っていたとある。本町一二丁目の神武天皇の山車は、本町三四丁目の戸隠明神の山車に追い付こうとしたところ前輪が横を向いて転倒し、山車が3段に折れて破損したとある。この事故で、山車を運行させていた大工職・鳶職・囃子方ら6名が重軽傷を負う大規模な事故であった。新聞記事には、神武天皇の山車は最近新調されたばかりで、被害総額が千円以上であったことが記されている。

新聞記事2 明治36(1903)年8月12日 東京版『朝日新聞』

「熊谷の団扇祭り」

例年通り昨十一日より十四日まで四日間武州熊谷八坂神社の大祭を執行し各町より鉾花車踊り家台(原文ママ)を数本引出し神輿の渡御と共に各町は競ふて来客及出入の得意へ団扇を進呈する例なれば一人にて数十本を持帰るを例とすれば何れも近郷近在より団扇貰ひと称し出来る老若群衆すれば本年は目下の天候にて米作も大分良き有様なれば何れも非常の賑ひなるべし〔朝日新聞 1903〕

この新聞記事には、祭礼の日程は8月11日～14日の4日間と記載されている。行事の内容に関しては、「各町より鉾花車踊り屋臺を数本引出し神輿の渡御」と記載される。この新聞記事から、神輿渡御の他に「鉾花車踊り屋臺」とあるため、山車の他に踊り屋臺が巡行していることが記されている。新聞記事の記載も、「熊谷の団扇祭り」とあることから、古くから団扇の頒布がおこなわれていたと考えられる。

新聞記事3 明治38(1905)年7月22日 東京版『朝日新聞』

「熊谷の団扇祭」

埼玉県熊谷町にては例年の通り本日より来たる廿五日まで八坂神社祇園会の祭典を執行し各商店も祭典中競ふて顧客に団扇を贈呈する例なれば之れを貰はんとて近郷近在の人々群集し市日に当たる旧曆廿二日の如きは非常に賑ひなるが各町共花車屋台等を引出し神輿の渡御と共に盛んなる祭典を行ふ筈なり〔朝日新聞 1905〕

この新聞には、7月22日～25日まで祭礼が行われたと記されている。同新聞記事中には、祭典期間中に各商店が競って客に団扇を贈呈することになっており、近郷近在から多くの人が集まっていると記されている。旧曆の22日が市日にあたり、非常に賑やかになるといわれている。各町内で花車・屋台の曳きまわし、神輿渡御が行われていたとされる。

新聞記事4 明治39(1906)年8月12日 東京版『朝日新聞』

「熊谷団扇祭の椿事(山車転覆、傷者三名)」

埼玉県熊谷町にては例年の通り去る九日より四日間八坂神社の大祭を執行し神輿の渡御あり各商店にては景物の団扇を数多仕入れて之を近郷近在よりの来集者に贈るの外各町ともに戦捷凱旋の祝意を表して山車踊り屋台等を曳き出し為に近年稀なる賑ひを呈したるが其祭典二日目即ち十日の午後二時頃に凶らずも一椿事は生じたり即ち各町より曳出したる鉾山車、地走り等の中同町墨江町の踊屋台は本町二丁目郵便局前に停留して踊を演じて居る所へ写真師来り屋台全景を撮取せんとし踊り子地方其他の者を順次に整列せしめたるに恰も此時本町一二丁目持の神武天皇の鉾山車は其傍に停留して盛に囃立じかば屋台撮取の間暫時囃子の中止

を頼み囃子方は之を諾して山車の後部に控へ他の人々も囃子方と共に同じ所に集まりしに山車は後部の重量に堪へずやありけむメリくといふ音して動き出すよと見る間に地蔵倒れに後の方踊屋台の前車へ掛けて転覆せしかば乗員は不意の事とて皆車台より転落し見物人は山車の下に敷かれて悲命を揚ぐる大混雑、ソレ怪我さすな助けよと孰れも必死救護に従事し手を擦過きたるもの足を打たれしもの等片端より救ひ出せしが其多くはほんの微傷にて医師を依頼する程のものにあらざりしがたゞ同町墨江町■■■■■¹¹番地仕立屋方雇人■■■■■(十七)なるものは左肩骨脱臼して骨膜を破り又左腕骨を挫き尚右大腿骨及び腰部に打撲傷を負ひ又同町日進館製絲工場會計員■■■■■の父■■(六十八)は腰足等に打撲傷を同人の背負ひたる孫■■(二つ)も亦前頭部へ負傷し出血多かりしにより取敢ず三人を近傍の醫家へ連込み目下治療中なりといへり〔朝日新聞 1906〕

この記事には、8月9日～12日の4日間となっている。この前年は、日本が日露戦争で勝利し、それを祝うために各町が山車・踊り屋台の巡行が行われたことが記されている。団扇の頒布については、「各商店にては景物の団扇を数多仕入れて之を近郷近在よりの来集者に贈る」とある。この新聞記事から、過去の新聞記事同様に、祭典期間中は買い物をすると団扇が貰えたとある。山車・屋台の記述については、興味深いことに「墨江町の踊り屋台」という記載があり、明治39(1906)年には墨江町に踊り屋台が存在していたとある。墨江町は、熊谷市内の町で本町一丁目付近の町である。

墨江町の踊り屋台は、2日目の10日に、記念撮影のために停車していた。そこへ、本町一二丁目の神武天皇の山車の山車が横で囃子の演奏を行っていた。墨江町が写真撮影しているので、本町一二丁目の囃子方は演奏中止を求められる。それで囃子方が後部に控えたところ、山車が墨江町の踊り屋台の方向へ転倒した。この記事には、具体的な被害総額は記されていないが、数名の負傷者が出たと記載されている。

新聞記事5 明治41(1908)年7月15日 東京版『朝日新聞』

「熊谷町の団扇祭」

埼玉県下熊谷町八坂神社は来十八日より四日間執行す神輿の渡御、山車、屋臺等頗る賑かにて各商店にては競うて団扇を顧客に贈るを例とし其数四万本を下らざるべしと〔朝日新聞 1908〕

この新聞記事の記載によると、熊谷うちわ祭は7月18日～7月21日の4日間行われたとある。祭礼期間中の行事は、これまで同様に神輿渡御と山車・屋台巡行がおこなわれていた。これまでと同様に、団扇の頒布の記述がある。この新聞記事によると、4万本以上の団扇が頒布されたことが記されている。

新聞記事6 明治42(1909)年7月31日 東京版『朝日新聞』

「熊谷の団扇祭り」

埼玉県熊谷町にては例の如く大字熊谷、同石原の二字に別れ祇園祭典を執行する由なるが本年は団扇は珍らしからずとて他の物品を贈る家多く約三割方団扇の

¹¹本稿を執筆するにあたり、新聞記事に記載されて町名については、関係者に確認をとって掲載の許可をいただき、そのまま掲載する。また、個人名と個人情報に関しては、「■■」と表記して伏せておく。

数を減じたりと又八坂祭典は八月五日より八日迄にて花車屋台等を曳き出す由
(熊谷通信)〔朝日新聞 1909〕

この年の祭礼は、8月5日～8日の4日間行われていたとある。この新聞記事によると、「本年は団扇は珍らしからずとて他の物品を贈る家多く約三割方団扇の数を減じたり」とあり、以前より団扇の頒布が積極的に行われていなかったとある。

新聞記事7 明治43(1910)年5月22日 東京版『朝日新聞』

「熊谷の八坂神社祭典」

埼玉県大里郡熊谷町の八坂神社例祭日取りに就き協議中の處愈八月一日より四日間とし其内二日を以て大祭日となすに確定せり〔朝日新聞 1910c〕

この新聞記事には、熊谷うちわ祭の日程が決定したという記述がある。この新聞記事から本年は、5月で祭礼の日取りが決められたとある。この記事には、4日間の中で8月2日を「大祭日」としたとある。

新聞記事8 明治43(1910)年7月21日 東京版『朝日新聞』

「熊谷の八坂大祭」

埼玉県熊谷町の八坂神社大神は既記の如く新暦七月廿日より三日間執行すべし廿日は午前五時より各町信徒総代及び祭事掛の加役数十人同神社に集まり野口社掌の守護にて神輿の渡御あり白丁之を担ぎ四神剣を先頭に一周して午後四時同町中央の假屋に安置す各町軒には七五三繩に球燈を吊し本町一二丁目は神武天皇の花車に踊り屋屋台を引出し同三四丁目は戸隠明神の山車、筑波町は日本武命の山車、鎌倉町仲町は通り神楽の屋台、墨江町は地走り踊り、桜町は大神楽等を催し殊に廿一二日は各商店一年中の書入日なれば誰彼の別なく必ず団扇を客に呈し客亦之を貰はんと近郷近在より群集し来る劇場は熊盛座(東京旧派大芝居)同梅盛座(東京新派)緑座(旧派)にて演じ何れも客に一本宛進呈する由又最終日は朝來土地の若者が神輿を舁ぎ揉み廻る例なるが警察署は午後五時迄と制限し白晝の事とて平素付規はれたる家も無事に通過すべし因に大字石原町の八坂大祭は尚旧暦六月十四、五、六の三日間なれば因らずも両字通じて本年丈は同日に祭典を為す事なれり〔朝日新聞 1910d〕

この記事によると祭礼の日付は、「新暦七月廿日より三日間執行すべし」とあり、新聞記事7と異なっている。祭礼の日程も、それまでの4日間から3日間へと省略されている。

この記事には、祭礼の詳細が記載されている。20日は午前5時から信徒総代と祭事の「数十名」が愛宕八坂神社に集まり、野口社掌による神事が行われた。神事後、白丁を着た担ぎ手により神輿は担がれた。御輿渡御の先頭には、「四神剣」があり一時間かけて町内を一周し、午前4時に「假屋」に安置された。各町の軒には、注連縄と提灯を飾られたとある。この記事には、祭典期間中に巡行した山車・屋台の記述がある。記事にある、神武天皇の山車と戸隠明神の山車と日本武命の山車は、現在の第一本町区、第二本町区、筑波区の山車である。また、第一本町区が山車と屋台、鎌倉町と仲町合同で踊り屋台を巡行させたと記されている。記事中には、現在の熊谷うちわ祭りには町として参加していない墨江町は地走り踊りが行われ、桜町が太神楽を行って

いたとある。

この記事では、21日～22日に団扇の頒布があり、近郷近在から多くの人に来ていたとある。祭典期間中は、複数の劇場が演劇を上演して、劇場に来た客にも団扇が贈呈されたとある。祭礼の日時は、石原村の八坂神社例大祭と同一になっている。新聞の記述だと、「大字石原町の八坂大祭は尚旧暦六月十四、五、六の三日間なれば図らずも両字通じて本年丈は同日に祭典を為す事なれり」とあり、石原八坂神社は旧暦に合わせて祭礼を行われていた、本年は同一の日付で行われていた。

新聞記事9 明治43(1910)年7月22日 東京版『朝日新聞』

「熊谷八坂祭」

作紙附報の熊谷八坂神社大祭禮奥の伎屋なり其後部に立てるは有名の祇園柱にして十字形の簪(五丈餘)に白布五反をつけ四方へ下ぐるる例とす此祇園柱は昔より日本三ヶ所の特有にして他に類なく第一は津島明神祭第二は此熊谷八坂祭第三は上州世良田八坂祭の時に之を立つなり〔朝日新聞 1910f〕

この記事の記載によると、祇園柱の十字の部分は約5丈(約1.5メートル)あり、5反の布を下げていたとある。その他に、祇園柱は津島明神祭、熊谷八坂祭、世良田八坂祭の3か所に立っている祭礼であるということが記されている。

新聞記事10 明治43(1910)年7月26日 東京版『朝日新聞』

「熊谷の神輿騒ぎ」

埼玉県熊谷町八坂神社大祭は既記の如くなるが廿三日の最後の日には例年の如く各町より若者出で、神輿を昇ぎ早各町を廻り終り愈還御といふ午後四時頃神輿は同町本町三丁目■■■■■■及同本家■■■■■方前に至るや人図うは十倍し来り頗る手荒く成るよと見えしが忽ち前記■■■方店先に昇ぎ込みたれど押さる、方は一散に逃げ退きし爲め神輿はドウと地響きして転倒し同家の大硝子戸を打破れり此時逃げ遅れた同町栄町穀商■■■■■方庵人■■■■■は其刹那溝へ足を踏込み昇棒に壓せられし爲め右脛をしたたか打撲し骨を粉碎して身動きならぬ重症を負へり本町一丁目鐵物商■■■■■方長男某も祭事掛として附添居て左足甲に負傷し一二の輕傷者ありて大騒ぎなり〔朝日新聞 1910e〕

この記事は、神輿が商店に衝突し、ガラス戸が破損する事故を報じている。記事によると、最終日の御輿渡御は若い衆が行っていたとある。神輿を担いでいた若者、同行していた祭事掛が負傷したとある。

2 愛宕八坂神社の記述

愛宕八坂神社についての新聞記事 これから報告するのは、愛宕八坂神社についての新聞記事である。熊谷うちわ祭についての記述はないが、当時の神社について記載されている。以下、2点の新聞記事を紹介する。

新聞記事11 明治33(1900)年11月28日 東京版『朝日新聞』

「元御嶽教訓導の就縛」

假にも神の道を学んで訓導の職に昇りながら此罪惡を犯すとは神罰の程も恐ろし、埼玉県比企郡中山村大字戸森■■番地平民石川勇蔵(三十八)といふ農家の養

育を受けながら鋤鍬を手にすることを好まず読書三昧に日を送りしが終に神道に志し同県熊谷町の■■神社祠掌福井求を師として勉強し後御嶽教管長鴻某に従つて御嶽山に登り胎金兩部の峯を分けし昔の行者の跡を学んで苦行をなせし甲斐ありて訓導に登り去る廿年三月埼玉県分教會に入り又熊谷町大字大原の稻荷神社祠掌となり神事の奉行に当り居たり然るに翌廿一年六月同町大字鎌倉の八坂神社神職野口膳なるもの皇典講究の為出京し其不在中は福井求と石川勇蔵の兩人神事を執行することとなりしかば勇蔵は之を奇貨として同社へ出入し終に神職家の土蔵を破りて衣類金品二百余円を盗み取りしが抑々悪道に墮落するの始めにてさしもに不敵の勇蔵なれども今更神罰恐ろしく又所の人人に忌嫌はるゝを後影く思ひ逐電して諸所徘徊せしが悪事露頭して其の筋へ引かれ法定の刑に処せられしのみか此事管長の耳に入りて訓導の職をさへ剥れしかば沐猴の冠りを失ひしに等しく博徒と變じて同県比企郡松山町字高坂村■■■■の子分となり綽名を御嶽の勇と呼ばれて近村の悪まれ者となり居て何時しか秩父の名栗村料理店岡部お作方の酌婦森野お熊（三十三）といふ伊豆女と云かはし同村の金満家齋藤茂助の妾となりしを連出して夫婦となり昨年来浅草区吉野町■■■番地吉村幸吉方に同居してお熊をばお千代と名乗らせ其身も平野久太郎と偽名して贅沢な生活をなし内々埼玉地方の豪家を覗ふて夜盗を働らき居りたる所少しく露頭の端緒となり探偵の立廻るに至りしかば去る七月中お熊の名にて本所区中の應竹町■■番地へ転居し己れハ養蠶の教師なりとて当々地方のみ旅行し居りしかと既に神罰を当れる身のいかで法網を免かれ悔べき去る廿四日右の家に帰り居りし所を岡本城島二刑事巡查の為看破せられ直ちに綱を打たれたりといふ因に記す此勇蔵が賊を働きし場所は埼玉縣北足郡大宮町の萬松楼、松友館、熊谷町の布施田某方及び茨城栃木、紀州熱海等にて窃取の金額三千余円に上れる由なり〔朝日新聞 1900b〕

この記事は、元御嶽教訓導であった窃盗犯の石川勇蔵が逮捕されたという記事である。この記事によると、石川勇蔵は後に御嶽教の埼玉県分教會に入り、大原の稻荷神社の祠掌を務めていたとある。明治21（1888）年に、当時愛宕八坂神社を管理していた愛宕八坂神社の神職である野口膳の留守中に神事を任せられた。新聞記事によると、石川勇蔵は野口膳の土蔵に侵入し、衣類金品を200円以上の窃盗を働いたとある。その後も石川勇蔵は各地で窃盗を働き、犯行が発覚して逮捕され、御嶽教の訓導の職を剥奪されている。この新聞記事には、僅かではあるが当時の愛宕八坂神社が神職の野口膳が管理している記述がなされている。

新聞記事 12 明治43（1910）年2月21日 東京版『朝日新聞』

「奴稻荷の競争」

埼玉県熊谷町仲町に鎮座まします奴稻荷は熊谷直實に縁故ありとて元は熊谷寺境内に在りしが明治二年三月神仏混淆の取調べの際奴稻荷の偶像を取出して之は焼き棄て、神霊のみを別所に祀るべしとの厳達下りしより同年九月熊谷寺門前百姓即ち今の仲町商人は神霊を同町地先鎌倉町愛宕神社境内に祀り偶像は焼棄つると称して内々時の住職に秘蔵せしたり然るに十二年出火ありて仲町全部焼失せしかば町民は大に驚き是れ全く奴稻荷の神罰なりとて再び元の地（現在の熊谷寺鐘

楼下の明地)に祀り同所村社として野口膳を社掌とせしが由来同氏は迷信を退くる人なれば稲荷は格別繁昌せざるを見て取り現代の熊谷寺院代■■■■は此稲荷の向側の寺領内に旧権現堂を挽き来り之に前記の焼棄てたりといふ偶像を据えて拝み上げ兒育講などを作りて瓦斯燈の寄附やら何やらと盛に繁昌策を講じ即ち稲荷の死骸を崇め奉りて御名をも奴陀枳尼天と稱しければ無智の信仰者は是が本當の奴稲荷様だと云ひ囃し参詣者日に多きを加へ肝腎の尊躰は向ふに淋しく此方が却て死骸の如くなり玉ひしより門前の仲町商人は今や背負ふた子を抱いた子との中に挟まり進退谷まり居れり、されば心ある人は奴稲荷の魂に対し死骸を擁して仏となし斯の如き競争で始めた寺僧の所為を苦々しき事と眉をぞ顰めける〔朝日新聞 1910a〕

この新聞記事は、奴稲荷と愛宕八坂神社について記されている。明治2(1869)年に神仏混淆の取調べがあり、その際に熊谷寺の境内社である奴稲荷で祀られていた神像を焼き棄てて、稲荷の神霊を別所に移して祀るように指示が出されたとある。その後、同年九月に熊谷寺の付近に住んでいた門前百姓と商人が、稲荷の神霊を愛宕八坂神社の境内に移し、神像は焼き棄てたことにして熊谷寺の住職が秘蔵した。明治12(1879)年の大火で仲町が全焼し、町民は奴稲荷の神罰であるとして熊谷寺鐘楼下の空地に村社として再び祀られた。その後、野口膳がそこの祠掌となる。新聞記事の記載によると、野口膳は「迷信を退くる人」とあり、当時の熊谷寺の院代が奴稲荷の神像を寺の中で祀り多くの参拝者が来ることを「苦々しい事」と批判している。

おわりに

以上、明治時代の新聞記事について分析を行った。新聞記事に記されている祭礼の日程を見てみると、年度によって日程が定まっていないことが明らかである。新聞記事では、明治33(1900)年以降からの祭礼の状況はわかるが、それ以前の祭礼がどのような日程で行われていたか不明である。明治33(1900)年以前の祭礼については、幸田露伴の紀行文「知々夫紀行」に明治31(1898)年8月6日に熊谷うちわ祭に関する記載がある。この文中には、祭礼の日について言及されており、以下のように記載されている。

明日は、牛頭天王の祭りとして、大通りには山車小屋をしつらひ、御神輿の御假屋もしつらひたり。同じく祭りのための設けとは知られながら、いと長き竿を鉾立に立て、其を心にして四辺に棒を取り回し杵の如くにしたるを、白布もて総て包めるものありて、何と悟り得ず。打見たるところ誓へば絲を絡ふ用にすなるといふものいと大なるを、竿にきて立てたるが如し。何ぞと問ふに、四方幕といふものぞといふ。心得がたきなり。〔幸田 1987〔1898〕 349～350〕

「知々夫紀行」に「明日は、牛頭天王の祭りとして」と記載されていることから、8月7日～7月10日までに祭礼が行われた可能性がある。これらの記載から、祭礼の開催日は特に指定がなく、その年によって祭典期間が変動していたと思われる。新聞記事は、年代ごとにばらつきがあるが、そのほとんどの祭礼の日程が7月中旬か8月

初旬である。祭典期間も現在は3日間であるが、新聞記事によると祭礼は4日間行われ、最終日まで山車・踊り屋台等の巡行があったことが記されている。

この明治43(1910)年は、熊谷うちわ祭以外でも初市の日程も変化していた。明治43(1910)年1月8日の『東京朝日新聞』「熊谷の改正初市」によると、以下の記載がある。

熊谷町にては例年行ひし旧曆正月七日の初市を今年より新曆一月七日に改正せし由は既記の如くなるが此七日は即ち新曆として相当する市日なれば同町本町一丁目二丁目の中央に市神の祠を結び一般商店は揃ひの建看板を出し各自景品を進呈する次第なるも茲に名物なる張子の達磨を売り露店商人の入り込む者殆ど皆無の姿にて景氣引立たず例時ならば各地の露店商人は前日より附込み旅店も相応に賑ふ筈なるに此有様なるより達磨露店のみは矢張り旧曆正月ならでは出で来らざるものかとて同町長始め心ある者は少し弱り居れり〔朝日新聞 1910 a〕

この新聞記事によると、明治43(1910)年以前は旧曆の1月7日に初市として達磨市が行われていたが、本年は新曆1月7日に初市を行うようになったと記されている。新聞記事中には、「同町長始め心ある者は少し弱り居れり」などと記されていることから、初市の改正について微細ではあるが新曆への改正を批判する意図が汲み取れる。熊谷うちわ祭と達磨市以外の行事の新曆への対応については、現在調査中ではあるが、この明治43(1910)年より旧熊谷町の年中行事が新曆に対応するようになった可能性がある。この祭典期間の新曆への対応に関しては、新聞記事を見る限り急遽、日程の変更を行った可能性がある。それは、新聞記事8と新聞記事9に記載されている祭典期間の相違である。新聞記事8には、「八月一日より四日間とし其内二日を以て大祭日となす」とあり、明治43(1910)年の5月に熊谷うちわ祭の祭典期間が、8月1日～3日に行われると記されている。その後、同年7月22日に発行された新聞記事9の記述によると「新曆七月廿日より三日間執行すべし」とあり、新聞記事8に記載されている日程と異なっている。これらの新聞記事より、明治43(1910)年は、5月に祭礼の日程が8月1日～3日の4日間行うはずが、急遽日程が変更され7月20日～22日が祭典期間になったと推測できる。この日程の変更については、熊谷町町役場が祭典期間の変更に関わったと考えられる。この熊谷町町役場については、明治初期から熊谷新報社から刊行されていた熊谷新報の『熊谷百話』に詳しい記載がある。

熊谷の年中行事を皮肉に書いて見やう▼五六年前迄は何時も陰曆本位の昔氣質で親爺の成した事に間違ひがなく誠に極りがよかつた▼近頃は何を感違ひしたのかヤレ新がよいの合の子に改正しろのと御役所が干渉して振れを出すと云ふあんばい(略)▼六月天王所謂八坂の団扇祭が合の子の七月二十日と改正されて還御は毎年士氣旺盛である(略)▼一体新曆がよいのか合の子がよいのか年中行事も此麼有様では軍配の上げ様が無い〔酒井 1912 72〕

この記述によると、役所から年中行事について指導があったことが記載されている。6月に行われていた「天王所謂八坂の団扇祭」が7月20日になったと記されている。明治43(1910)年に役所から7月20日へ移すように指導があり、祭礼の日に

ちが7月20日～22日の3日間に固定化したと考えられる。

踊り屋台から山車の祭礼へ 従来、熊谷町で5か町制が成立するのが明治39（1906）年とされている。これは、第一本町区、第二本町区、筑波区、鎌倉区、仲町区が山車・屋台を持つようになってから、この5か町制が成立したと考えられていたからである。同時代の新聞記事を見てみると、新聞記事3の「熊谷五ヶ町」の記述がある。この記事は明治36（1903）年であり、新聞記事中の「五ヶ町」については具体的な町名が無いため断言はできないが、熊谷うちわ祭に山車が登場する以前から5か町制が成立していた可能性がある。この祭礼に関わっていた5か町は、先述の通り、第一本町区、第二本町区、筑波区、鎌倉区、仲町区の5か町とされている。実際に新聞記事を見る限り、この5町内が祭礼に早くから関わっていることは明らかであるが、それ以外の町内も積極的に祭礼に参加していた可能性がある。

それは新聞記事4・8に記載されている、墨江町の屋台と櫻町の神楽奉納、第一本町区の屋台の記述であった。従来の祭礼の歴史の中には、熊谷うちわ祭では墨江町が祭礼に関わっていたという記述は存在せず、それに関する町内に伝わる言い伝え等も残っていない。櫻町も同様に、櫻町が祭礼に関わるのは昭和55（1980）年に仲町区から独立して屋台を持ったのが始まりであり、それ以前は櫻町として祭礼に関わって出し物をやっていた記録は存在しない。第一本町区も過去に屋台が存在したことを示した文献などは存在しない。この新聞記事4・8から、明治時代より墨江町と櫻町が祭礼に関与していたことが明らかになった。入手した新聞記事からは、この2つの町がいつから祭礼に関わり、その後関与しなくなった経緯は明らかにすることはできない。明治時代の祭礼の様相と、現在の熊谷うちわ祭とは大きく異なっていた可能性が指摘できる。

過去の熊谷うちわ祭の記録では、明治時代に江戸から山車が伝わってから山車・屋台の祭礼になったとされる。この新聞記事から、明治24（1891）年に山車が伝わる以前から踊り屋台の巡行が中心の祭礼が行われていたと考えられる。踊り屋台・屋台の記録は過去の熊谷うちわ祭の研究史の中に記載がない。江戸時代の祭礼について書かれた「祇園祭礼之覚」と「汚隆亀鑑」には、宿内で踊り屋台の曳きまわしの記述がある。この墨江町と仲町・鎌倉の踊り屋台、第一本町区の屋台の巡行を行っていたことから、熊谷うちわ祭に山車が登場する前までは踊り屋台の巡行が中心に行われていたと考えられる。鎌倉区が初代の山車を購入するのは明治27（1894）年であるが、明治43（1910）年の記事では仲町と合同で踊り屋台を曳いている。従来だと、この時期に鎌倉町が山車を購入したとされる。鎌倉町の山車の記載がないことは、何らかの影響で山車を巡行させることができなかつたのか、もしくは鎌倉町は山車を持つのがそれよりも後の時代であった可能性がある。

現在、第一本町区が山車と屋台、鎌倉町と仲町が合同に屋台を巡行していたことについての言い伝えは残ってはいない。同様に第一本町区や墨江町などの町には、屋台を保管していたとされる屋台庫などの言い伝えも存在しない。新聞記事に登場していた屋台に関しては、毎年新たに作り直していたか他地域から借りてきて祭礼の際に巡行していたと考えられる。

熊谷愛宕八坂神社の始まりは、本山派修験者である大善院行源法印が愛宕権現を勧請したのが始まりとされる。その後も、熊谷愛宕八坂神社の管理を行っていたのは、代々の野口家の人々であった。収集した新聞記事には、大善院の記載がなく、野口膳が愛宕八坂神社を管理していたという記載がある。歴代神社を管理していた野口家の歴史が書かれた『野口家のルーツ考』¹²によると、野口家十六代秀延の墓石に「為王政維新廢修験道嗣子類次郎改名大膳神祇官補之於神主職」とある。新聞記事11、12に記載されていた野口膳は野口家十六代目秀延であったと考えられる。熊谷愛宕八坂神社は江戸時代の地図等には「牛頭天王社」「天王社」と記載されていた。その後、明治時代以後に作成された文献や碑文等には、「八坂神社」と表記されるようになる。これは、神仏分離令の影響で、牛頭天王や愛宕権現などの記載が使えなくなったと考えられる。

新聞記事12には、明治2（1888）年頃に神仏混淆の取り調べが行われたと記載されている。新聞記事11によると、熊谷寺で行われた取り調べの際に、奴稻荷の陀枳尼天の神像を破棄するように求められたあり、住職はこれに従わずに神像を焼き捨てたことにして秘蔵していたとある。その後、どのような経緯でそうなったのか不明であるが、愛宕八坂神社に奴稻荷の神霊が祀られるようになる。仲町の大火事の後、当時の住職が再び神像を取りだしてそれを旧権現堂に安置し、兒育講という講を設立したりするなど、積極的な行動を起こすようになる。その行動に足して、野口主膳は冷ややかな視線を送っている。愛宕八坂神社には奴稻荷は祀られておらず、熊谷寺に奴稻荷神社があることから、その後に再び熊谷寺に戻された可能性がある。現在、八坂神社の神職が奴稻荷を管理していることはなく、野口主膳が奴稻荷を手放したということも考えられる。

愛宕八坂神社に関する新聞記事からは、この2つの神社の関係性を探るのは限界があるが、当時の熊谷町で行われた神仏分離令の影響を具体的に見ることができる。新聞記事を見る限り、明治2年には熊谷町で神仏分離令の取り調べが行われ、神仏混合が色濃い神像等の廃棄が求められていたことが明らかになった。このことを受けて、熊谷寺の住職は神像を秘蔵し、その10年後に再び神像を公開している。この新聞記事の記載から、神仏分離令の取り調べは一回限りで神像等の破棄の命令は出されるものの、それらは強制されるのではなく所有者が自発的に行うようにしていたことが読み取れる。その他に、寺院の境内にある神社は近隣の神社に強制的に移されていたのではないかと推測できる。

¹²野口宏 2010 『野口家のルーツ考』 私家出版

第3章 熊谷うちわ祭に関わる民俗事象

はじめに

本章では、熊谷うちわ祭に関連する民俗事象を通して、熊谷うちわ祭の民俗学的な考察を行う。前章では、新たに発見した民俗資料をもとに、明治時代の熊谷うちわ祭を中心に考察を行った。また、熊谷うちわ祭に関する民俗事象は熊谷の市町村史などに記述されている一方で、これまで深く追及されていることはなかった。

熊谷うちわ祭の民俗事象に関しては、堀口熊五郎の自身の経験と図書館の文献資料を参考にして執筆したの『うちわ祭の今昔』がある。この『うちわ祭の今昔』では、祭礼の全体的な歴史から、祭礼組織の成り立ち、過去の鳶職の大山講について記載されている。『うちわ祭の今昔』では、かつて泉屋横町にあった泉州という料亭が団扇を配布したことが始まりであったとされている。明治時代の祭礼は5か町によって担われており、明治24(1891)年に本町三、四丁目が江戸から山車を購入したことが契機になって、熊谷うちわ祭りが山車祭りに変わったという記載がなされている〔堀口 1970 3~4〕。その他にも、大総代を経験した重竹氏『熊谷祇園祭稿』〔重竹 1992 5〕に祇園柱や大山代参の行事について記載が存在する。その後、平成26(2014)年では、『熊谷市史 別編1 民俗』¹で初めて祭礼の総合的な報告が挙げられた。『熊谷市史 別編1 民俗』には、祭礼に関する記述は多く書かれているものの、それに付随する行事については報告やあまり考察が行われていない。

本章で考察する民俗事象は、祇園柱、団扇の頒布、大山代参の3点である。祇園柱は、祭典期間中に行宮(御仮屋)に設置される約14メートルの巨大な木製の柱である。この祇園柱に関しては、僅かではあるが熊谷うちわ祭りに関係する古文書や江戸時代の随筆の中にその記述を見ることができる。団扇の頒布は、祭典期間中に各商店などで買い物をする時頒布される団扇を貰うことができることである。大山代参とは、祭礼終了後に8月28日~29日まで大山代参と称して、年番町の総代と鳶を中心に大山阿夫利神社への参拝するものである。これらの民俗事象は、それまで報告はされているものの具体的な分析や考察は行われていなかった。

1 熊谷うちわ祭の祇園柱

(1) 現在の祇園柱

祇園柱の設置と片付け 現在、行宮の組み立ては、年番町の鳶が行っている。年番町の鳶の仕事で本格的に行われるのは、7月の第1土、日曜日が中心である。祭礼終了後、各町の鳶職は自町内の会所を中心に片付けを行う(写真1)。年番町では、行宮の解体、安全看板等の撤去が行われる。行宮の部品は、昨年同様に熊谷市民プール付近の倉庫に収納される。片付けの後、行宮の部品はトラックに詰め込み、昨年同様にしまわれているところに戻す。行宮と祇園柱の片付けは、半日ほどで終了する。また、祇園柱にまかされていたサラシは、熊谷生白や成田白と呼ばれている。このサラシは、オムツや下着などに使われていた。その他に、安産祈願の腹帯としても使われている。

¹ 熊谷市 2014 『熊谷市史 別編1 民俗』 熊谷市

この祇園柱の由来については、熊谷うちわ祭のもと祭典関係者の堀口熊五郎の『うちわ祭りの今昔』に詳細に記されている。

熊谷の夏祭の起源は徳川初期、今から三百年位前に始まり、日本で三大天王様といわれ、愛知県海部郡津島町の天王、群馬県佐波郡世良田（原文ママ）の天王と、当所の天王様であります。又、祭りとしては関東で三大祭といわれています。（中略）そこで日本で三大天王といわれる町神輿は皆様方も御存知の通り、町方役人六人衆のいた事、天下御免の祇園柱に依りその格式のあることが立証できるのであります。然らばこの祇園柱は如何なるものかという、この格式ある神輿がその祭典に仮営に出御安置されたことを目印に建るもので、従ってこの祇園柱をみたときは百万石の大名といえ共、籠なら降り、乗馬なら下馬して参詣しなければならないという格式のある天王様であります。なかにはずい大名となると深谷から土手越しに吹上へ、又吹上の方から深谷へと廻り道して仲仙道を下降した大名もあったと聞き及んで居ります。そこで余談になりますが、もとこの熊谷の本町通りが一丁目から三丁目まで道巾の広がったことを皆さんは御存知でしょう。丁度本町二丁目の因坂田宅前にお仮屋が出来るのでこうした大名の参詣のとき行列が休息できるように特に道巾を広くしておいたのだそうです。そこでこの祇園柱は檜か杉の丸太で、長さ八間のものに巾四寸、厚さ一寸で長さ二間おヌキを十字に通して、之を熊谷生白五反で巻き四すみにたらしめたものであります。昔は熊谷生白といって、上之から中条方面で盛んに生産されて正三丈物であったそうですが、兎に角祇園柱は八間の丸太に二間のヌキを十字に通して五反の熊谷生白で巻くのが正式の規定であります。〔堀口 1970 3〕

『うちわ祭りの今昔』によると、祇園柱とは「その祭典に仮営に出御安置されたことを目印に建るもの」とある。ここには、現在語られている依り代としての祇園柱の機能については言及されておらず、単なる目印として説明されている。

（2）古文書に見る祇園柱

①江戸時代の記述

祇園柱最古の記録 現在、祇園柱は行宮の一部で祭神の依り代や目印として認識されてきた。祇園柱について記述のある資料は、寛政元（1789）年の「寛政元年六月 熊谷宿祇園祭礼神輿渡御由来覚書」である。この資料は、熊谷宿の祭礼神輿渡御の由来について書かれた覚書である。この古文書には、祇園柱の記述は一部ではあるが当時の祭礼について詳細に書かれている。

「寛政元年六月 熊谷宿祇園祭礼神輿渡御由来覚書」

寛政元年己酉六月十五日

秀航より竹井右平殿二差出したる

熊谷祭礼神輿渡御由来覚

秀一郎調

祇園祭礼之覚

一、往古熊谷郷町割等相済、二季物前之市興行並其後六斎市申立様ニ相成候由来は、別当大善院方江御尋被下候ハ、逐一相分可申候、煩敷爰二不申上候

一、牛頭天王神輿渡御被遊候事ハ、大凡正徳年中によりと承伝候は、御旅所近所之氏子原口源左衛門曾祖父など世話仕、其節ハ神輿無之、熊谷寺いなりの神輿借受、四人持之輕き神輿ニ而年々御渡被成候事、拙僧住職仕従十五才二十二才迄、右之通御座候、拙僧^(宝曆三カ)二十才之時熊谷寺開山蓮生法師開帳ニ付江戸表江被出候節、稻荷神輿入用之由ニ而相戻候、其節致かた無之四月上旬より町方へも相談仕、自建立ニ打立、漸々六月廿日之夕方神輿間ニ合せ相渡申候、右神輿渡御之節ハ従已前何年とも不相知、神輿昇人足ハ為恒例

石川兵左衛門殿 ^{家類}	竹井新右衛門殿 ^{家類}
笠原四郎兵衛殿同	石川平右衛門殿同
高柳金左衛門殿同	高柳平左衛門殿同
池田伊左衛門殿同	鯨井久右衛門殿同

右之八軒より年々人足被出、家来衆行水等前日より精進ニ而、尤あたらしき^(掛物)ひとえ^(原文ママ)もの之着用、神輿昇相勤くれられ候而、町方御渡りも随分行^(別)等静ニ仕、先払之太鼓、次に警固之御迎之氏子両側に被立並、子供ニ鈴を振せ候而神輿之渡御と申候事しらせ旅所迄、夜中など参詣仕兼候、足弱之老人等は、神輿渡御御渡り被成を家の内ニ待受、門先ニ而皆々致拝申候、此新神輿特殊外大形ニ而八人持余ニ御座候ニ付、町々より見兼而人足思ひ〜に信心之者出候而持候、然所近年おどり狂言通り祭等御願申上、祭礼賑候、以来凡二拾年あまりニも可相相哉、いつとなく右とをり祭町内之はつひ着候人足等、神輿昇申度よし申合候哉、右人足江相交り候而神妙ニ御渡シ申候所、近頃江戸風とやら申候而、わい〜わい〜と申しはやし言を申候而何となく物騒敷、殊ニ神輿も到るゝハかりニ動かし、其上走り候故ニ子供など追付申事相成兼、怪我等も恐入候へとも、祭礼時分人氣何とやら勇ミ立候哉、兎角物さハかしく候、万一神輿昇等之人足之内ニ、怪我ニ而も有之候ハ、いか様成喧嘩等にも及申間敷ものにも無御座候、何卒此儀ハ已前正徳より享保・元文・宝暦頃迄之通ニ神妙ニ御渡候様ニ仕、右之檀中八軒を始めとして、信心之者思寄次第相頼、御渡申候様ニ仕度候、神慮ニも不相叶え候哉、兎角近年祭礼ニ付内々騒々敷事も出来候間、以前之通行烈を致し、御迎之氏子上下警護并羽織袴警固ニ而御先を仕、神輿かゝり之人足は右檀家より被出、神輿渡御は鈴ニ而相知せ、町々通祭狂言屋台等ニ附候はつひ人足助合ニ不及様ニ仕度候、郷例ハ郷例ニ相隨候か宜様存られ候、江戸風相真似候事神慮恐入候、神ハ人之敬ニ依而増威、人ハ神之徳ニ依て運を添と申ハ御成敗式目之御発端ニ御座候、又候先辰年類焼債権立仕候あら造之神輿も余程大形、重く御座候故、万一走候節先手之人足等転候ハ、極而怪我人可有之候と奉存候、至而不安気儀ニ候得は別当不心懸ニも相成可申候、何卒御威光を以享保^(掛)年中より仕来り之例ニ任せ候様ニ仕度候、館林ハ御隣所之御城下之儀ニも候へハ、神事振合御聞合被遊、何分神妙ニ神輿渡御有之候様ニ仕度候、御上之御下ニ候ハ、人々相慎可申事と奉存候、万々御隣察之上御下知奉願上度御事ニ御座候、正徳より以前ハ祇園柱并天王御仮屋にて御幣相備、墓目之祈願等のみと承伝候、今以五拾才余之者は存候事ニ御座候間^(執筆引線)、被遊御尋被下置候ハ、逐一分明ニ可相訳と奉存候 [埼玉県 1991 392~394]

「寛政元年六月 熊谷宿祇園祭礼神輿渡御由来覚書」によると、正徳(1711~171

6) 年間より御輿渡御が行われており、町役人から熊谷宿の町人に変化したことが記されている。最後の部分には、正徳(1711~1716)年間以前は祇園柱と天王御仮屋にて御幣が供えられ、弓を引く墓目祈禱を行っていたと伝わっており、当時約50代の人びとそれを知っているとある。この記述により、祇園柱は正徳年間以前より存在していたと考えられる。また、祇園柱がどのような形状であるかは記されていないので不明ではある。古文書には、「祇園柱并天王御仮屋」とあるため祇園柱と御仮屋が複合、もしくは並行して設置されていたと考えられる。

祇園柱の形状と大神楽師 文化年間(1804~1817)に熊谷宿の三浦無窮という医師の記した随筆である『汚隆亀鑑』には、さらに詳細に祇園柱の事が記されている。

〇二

当宿牛頭天王の祭礼ハ久しきことなるへし、御制札の西の方に祇園柱といふ物ハ今に年々立るなり、今の人ハ何の用ある事をしらぬ者多し。是ハ軽ハザの柱なり、我五六歳の時見たり、身を白布にてつゝみ狐の面をかぶり尾も白布にて作り、柱にのぼり色々にはたらき、四方にさけたる布を足にかけ倒にさがり、などして其わざを尽したり、鉢形村より来りたる太神楽師なるよしなり、遠方の人集り見て、不思議の上手なりと誉たり、今の人心ならハ誰壺人見る人もあるまし、然らハ彼柱ハ無用の物に似たれとも、我等おもふにハ古の風儀のこりて告朔の餼羊なりとおもふ、其後我八九歳の頃、宿内統一にて屋台狂言を興行す、屋台ハ深谷宿より借用て、子供おとりハ上代染の絹小袖なり、宿内出金もわつか二十五寮にたらさるを、おひたゝしき事とて日をかさねて取集たりといふ
〔埼玉県 1991 88〕

〇十三

六月廿一日二日祭礼の時ハ上下引分かれ、子供狂言引屋台も費をいとハす、争て江戸より芸者を呼て、たかひに百数重量の物入れなり、年わかき輩ハうハ気になりて後悔したる事度々なり、上代の祇園柱の事をしらぬ故也〔埼玉県 1991 874〕

『汚隆亀鑑』によると、文化年間では既に祇園柱が何のために設置されているのか分からない人が多いとある。この祇園柱は「軽ハザ(軽業)の柱」で、三浦無窮が5、6歳の際に白装束で狐の姿をした者が柱に登り、いろいろな動きをしながら四方に垂れ下がっている布に足をかけてぶら下がるなどの芸能を行っていたと記されている。その他、柱に上っていたのは鉢形村から来た太神楽師であったとある。祇園柱が残っていることについては、「古の風儀のこりて告朔の餼羊なり」とあり、かつての祭祀の名残であると記されている。三浦無窮は、当時の祭礼で流行していた子供の狂言引屋台に関心を持っている人びとを、「上代の祇園柱の事をしらぬ故也」と冷やかな目線で眺めている。江戸時代の古文書や随筆により、祇園柱は正徳(1711~1716)年間以前から行われていることが記されている。また、文化年間の祇園柱の形状については現在と同様に、正方形の枠がついており四方に垂れ幕が下がっていると記載される。また、祇園柱に上って大神楽師が曲芸を行っていると行っていたことが記されている。

②明治時代の祇園柱

幸田露伴の見た祇園柱 江戸時代の古文書により、それらの役割は文化年間の時には既に忘れられて、単なる柱だけが立てられているものとなった。明治時代になると祭礼に山車が

導入され、山車・屋台巡行が祭典の中心になっていく。一方で、祇園柱は未だに立てられていた。明治時代に小説家である幸田露伴が熊谷を訪れた際、祇園柱を見たという記録が残されている。

上野に着きて少時待つほどに二時となりて汽車は走り出でぬ。熱しく人も云ひ我も啣つ。鴻巣上尾あたりは、暑氣に倦めるあまりの夢心地に過ぎて、熊谷といふ駅夫の声に驚き下りぬ。こゝは荒川近き賑わへる町なり。明日は、牛頭天王の祭りとして、大通りには山車小屋をしつらひ、御神輿の御仮屋もしつらひたり。同じく祭りのための設けとは知られながら、いと長き竿を鉾立に立て、其を心にして四辺に棒を取り回し杵の如くにしたるを、白布もて総て包めるものありて、何と悟り得ず。打見たところ誓へば糸を絡ふ用にすなるいひ籠子といふものいと大なるを、竿にかまきて立てたるが如し。何ぞと問ふに、四方幕といふものぞといふ。心得がたきなり。〔幸田 1987〔1898〕 349～350〕

この記述によると、幸田露伴が東京都上野から熊谷に来た際に、「牛頭天王の祭り」が行われていた。祭礼では、山車小屋や御輿の安置所である行宮などがあつた。その中に、「いと長き竿を鉾立に立て、其を心にして四辺に棒を取り回し杵の如くにしたるを、白布もて総て包めるものあり」と祇園柱があることを幸田露伴が記している。それを人に聞いたところ、あれは四方幕と答えられ幸田露伴の納得がいかつたことも記されている。

祭礼の新聞記事 また、明治時代の新聞で熊谷うちわ祭について記されてものの中に、祇園柱について詳しく記載したものが存在する。

作紙附報の熊谷八坂神社大祭禮輿の伎屋なり其後部に立てるは有名な祇園柱にして十字形の簀（五丈餘）に白布五反をつけ四方へ下ぐるる例とす此祇園柱は昔より日本三ヶ所の特有にして他に類なく第一は津島明神祭第二は此熊谷八坂祭第三は上州世良田八坂祭の時に之を立つなり〔朝日新聞 1910 f〕

この記事の記載によると、祇園柱の十字の部分は約5丈（約1.5メートル）あり、5反の布を下げていたとある。その他に、祇園柱は津島明神祭、熊谷八坂祭、世良田八坂祭の三か所に立っている祭礼であるということが記されている。

（3）資料に見る祇園柱

江戸の祭礼と祇園柱 本稿では、僅かではあるが熊谷うちわ祭に関係する古文書や江戸時代の随筆の中にその記述をもとに祇園柱について考察を行った。祇園柱は、江戸時代の正徳（1711—1716）年間には存在していた。寛政元（1789）年の「寛政元年六月 熊谷宿祇園祭礼神輿渡御由来覚書」によると、正徳年間以前の祭礼では、「祇園柱并天王御仮屋にて御幣相備、臺目之祈願等のみと承伝候」とあり、当初の祭礼から存在していたことが記されている。また、当初の祭礼では御幣を供えることや臺目祈祷だけが行われていたとされている。そのため、この祇園柱は祭礼において重要な装置であつたと考えることができる。その後、『汚隆龜鑑』では、祇園柱において狐に仮装した太神楽師が登つたとする記述がある。文中では、四方に垂れ下がっている布に足をかけてぶら下がっていたと記述があり、この当初から四方にサラシが垂れ下がっていた構造であつたと想像できる。「寛政元年六月 熊谷宿祇園祭礼神輿渡御由来覚書」には、この軽業師の記述が確認できないため、本当に太神楽師

が祇園柱に登っていたことについては疑問が残る。その後、文化年間の祭礼では御輿や狂言屋台が祭礼の中心となっていき、祇園柱の存在意義が忘れ去られていったと考えられる。

明治時代の祇園柱 江戸時代には既に、祇園柱の存在意義についてほとんど忘れ去られている状態であったということが指摘できる。また、祇園柱は行宮の一部であるということが記載されている。江戸時代以前の文献では、祇園柱の形状について詳しく記されていないため、どのような姿であったかは不明である。その後、明治時代になるとこの祇園柱の存在意義が大きく異なっていくことが指摘できる。幸田露伴の「知々夫紀行」には、「白布もて総て包めるものありて」とあり、明治時代の祇園柱全体に既に白いサラシがまかれていたと考えられる。文中では、幸田露伴が祇園柱について聞いたところ、「四方幕」と答えられている。このため、既に明治時代では祇園柱は行宮の装飾品となっている。また、東京版『朝日新聞』の祇園柱の高さは祇園柱の十字の部分は約5丈（約1.5メートル）あることが記されている。さらに新聞記事には、祇園柱が「津島明神祭、熊谷八坂祭、世良田八坂祭」の3か所に祭礼に存在するとされている。この津島明神祭と世良田八坂祭は、愛知県津島市の津島神社の尾張津島天王祭と群馬県新田郡尾島町世良田の八坂神社の天王祭である。この二つの祭礼には、祇園柱と同様な柱が存在した記録はない。この3か所の祭礼に関する情報の原典は明らかではないため、どこからこの解釈が出てきたのか明らかではない。

文化年間以前に行われていた太神楽師の芸能については、これに類似すると思しき行事が利根川流域に存在するツク舞と類似の行事であったと考えられる。ツク舞とは、蜘蛛舞の一種で高い柱を立て地面へ綱を張り、さまざまな動物に扮した演じ手が柱や綱の上で軽業を演じる芸能である。奈良時代に中国から伝来した散楽の流れを汲むとされ、室町時代から近世初頭に流行した蜘蛛舞という曲芸に近似しているともいわれる。主に利根川下流域に多く伝えられて伝承されている。熊谷も同様に利根川流域の近くに存在するため、両者には関係があると考えられる。

2 団扇の頒布と祭礼

(1) 現在頒布される団扇

本節では、埼玉県熊谷市で開催される熊谷うちわ祭の団扇の頒布について報告する。団扇をはじめとする扇類は、かつて権威を示す道具であったため古くから頒布品として贈られていた。その他にも、扇類は神の宿る依り代や厄災を払う呪具とされている。

現在でも、夏に町を歩くと宣伝の描かれた団扇や店名の描かれた団扇を貰えるなど頒布品としての団扇は身の回りに多数存在する。熊谷うちわ祭が「うちわ祭」と呼称されるようになった経緯については、明治時代より祭典期間中に商家で団扇が頒布されていたことが要因と考えられていた。

平成27（2015）年、江南文化財センターと熊谷愛宕八坂神社祭礼行事保存会の共同調査によって、『熊谷うちわ祭の歴史』が刊行された。この報告書は、かつて刊行された熊谷うちわ祭の書籍を参考に書かれたものであり、文献資料が少ない明治時代の祭礼については、他の書籍を引用して説明されている。このように熊谷うちわ祭の歴史では、古文書などの文献が残されている部分の歴史は資料を基に記載されているが、それ以外の部分は他の書籍から引用されてきた。『熊谷うちわ祭の歴史』によると、神輿から山車が中心の祭礼に変化する

間の明治36（1903）年、各商店からのうちわ配布が始まめられたとされる。団扇の頒布される以前は、天保年間（1830～1844）から各商店では、赤飯を炊いて買い物客に贈呈することが行われていたとされる。その後に各商店は赤飯から、団扇を頒布したところ好評となり、祭礼の名称も「うちわ祭」になったとされる。その団扇を最初に配布するようになったのが、料亭の泉州楼とされている。泉州楼は、東京日本橋にある老舗の団扇問屋の伊場仙（いばせん）から大量の団扇を買い込み、祭礼期間中に客に頒布したとされる。平成27（2015）年7月3日の『埼玉新聞』に「<熊谷うちわ祭>うちわ配布、明治35年頃 山車・屋台導入と同時期と判明」という記事が掲載された〔埼玉新聞 2015〕。この新聞記事によると、泉州楼の初代店主である萩原半次郎が日本橋の料亭八百善へ修行に行った際、現地で行われていた「天王祭」を目撃し感銘を受けてうちわ配布を思いついたことがうちわ配布の契機と記されている。

しかし、その一方で、この団扇についても具体的な文献資料を基にした検討が行われていない。そのため、本節では熊谷うちわ祭の団扇の存在について考察していく。

熊谷うちわ祭の祭典期間中には、団扇を持った人びとで溢れている。現在、熊谷うちわ祭で配布される団扇は主に2種類ある。1つが、熊谷うちわ祭と記された青地にプラスチック性の骨を使用した団扇である（写真2）。裏には、各商店や町内などの名前が表記されている。もう1つが、神社が配布している大きな団扇で「愛宕八坂神社神璽」と印刷されているものである（写真3）。この愛宕八坂神社で販売されている御札が付いた団扇は、近年神社側でつくられたものである。

昭和初期以前は、各商店が独自で団扇を仕入れて頒布を行ってきた。現在でも、わずかではあるが独自に団扇を仕入れて配布する商店もある。現在の主な団扇の配布場所は、ほとんどが町内の祭典事務所となるカイショ（会所）、神輿が安置される行宮である。会所では、賽銭箱にいくらかの小銭を納めると団扇が貰える。中には、団扇以外に八坂神社の御札や手拭いを一緒に贈呈する町内も存在する。行宮では、御守りや御札を買くと1本贈呈される。その他にも、祭典地域内で企業や商品が印刷された団扇も多く配られる。熊谷うちわ祭の団扇については、商店や団体の名称が記載されている一種の広告塔として配られている。また、熊谷うちわ祭の団扇は神事とは関係なく配布が行われている。

現在、熊谷うちわ祭については多数の研究や報告がある。その中で、祭礼の名称となっている団扇の存在については、あまり文献資料等をもとにした分析が行われていなかったことが指摘できる。ここでは、熊谷うちわ祭の団扇頒布に注目し、祭礼と団扇の頒布の関係について考察する。

（2）資料にみる熊谷うちわ祭の団扇

写真に見る熊谷うちわ祭 文献資料の分析から熊谷うちわ祭では、明治時代から祭礼で団扇の頒布が行われていたことが確認できる。その他にも、明治時代の熊谷うちわ祭の写真には、僅かではあるが確認することができる²。この写真は、熊谷うちわ祭の神輿渡御のものと考えられる（写真4、5）。写真には、神輿を担ぐ白装束を着用した人びとが手に様々な団扇が握られている。写真4では、福助の描かれた丸団扇が存在する。この写真で注目すべきは、カンカン帽を着用している祭典関係者はほとんどが扇子を所持している事である。写真3に

²明治時代の写真は、熊谷市中村写真館よりご提供いただいた。

は、丸団扇を帯に挿している祭典関係者がいるが他の祭典関係者は、写真で確認する限り扇子を持っている。

同様に、明治時代に撮影された写真5にも、神輿の担ぎ手が団扇を持っていることが確認できる。この写真には、他の祭典関係者らしき姿は見られないが、神輿の担ぎ手が団扇を所持して神輿渡御が行われている。2枚の写真から、神輿の担ぎ手全員が団扇を所持していることはないと考えられる。

その他にも、僅かではあるが山車・屋台の際に大団扇と思しきものも確認できる(写真6)。この写真では、山車・屋台が列をなしている際に後部の屋台の先頭に、大団扇と思しきものが写っている。他に写真がないため、この大団扇がどのような存在であるのかは断定できないが、山車・屋台の曳き手を煽ぐものか町名が表記された目印ではないかと考えられる。その他にも、熊谷うちわ祭の神事の写真も多数現存するが、団扇が写っている写真は確認できなかった。現存する写真が少ないため厳密な分析はできないが、団扇に関わる写真などが確認できないため神事の中で団扇が登場していた可能性は低い。また、写真から、既に明治時代には神輿を昇く人びとに団扇が贈られていたことが窺える。

新聞記事と団扇賞ひ その他に、明治時代の新聞記事に熊谷うちわ祭に関する新聞記事が10件以上存在した。この新聞記事の記載には、当時のうちわ祭に関して詳しい記載がなされているため、当時の祭礼の様子を知る事ができる。また、それらの新聞記事の記載の中にも団扇に言及する記載がある。以下、熊谷うちわ祭の新聞記事を引用する。

新聞記事① 明治33(1900)年7月21日 東京版『朝日新聞』「熊谷町祭典の椿事」

埼玉県大里郡熊谷町にては去る十六日より十八日まで三日間八阪神社の祭典を執行せしが此祭典は一名団扇祭りと呼べ近在より団扇を貰はんが為に集まる人の多く殊に熊谷五ヶ町とも山車を曳出し各町の若者ども互ひに派手を競ひたるより其賑はひ一通りならず(以下省略) [朝日新聞 1900a]

新聞記事② 明治36(1903)年8月12日 東京版『朝日新聞』「熊谷の団扇祭り」

例年通り昨十一日より十四日まで四日間武州熊谷八阪神社の大祭を執行し(中略)各町は競ふて来客及出入の得意へ団扇を進呈する例なれば一人にて数十本を持帰るを例とすれば何れも近郷近在より団扇貰ひと称し出来る老若群衆すれば本年は目下の天候にて米作も大分良き有様なれば何れも非常の賑ひなるべし [朝日新聞 1903]

新聞記事③ 明治38(1905)年7月22日 東京版『朝日新聞』「熊谷の団扇祭」

埼玉県熊谷町にては例年の通り本日より来たる廿五日まで八阪神社祇園会の祭典を執行し各商店も祭典中競ふて顧客に団扇を贈呈する例なれば之れを貰はんとて近郷近在の人々群集し市日に当たる旧暦廿二日の如きは非常に賑ひなる [朝日新聞 1905]

新聞記事④ 明治39(1906)年8月12日 東京版『朝日新聞』「熊谷団扇祭の椿事(山車転覆、傷者三名)」

埼玉県熊谷町にては例年の通り去る九日より四日間八坂神社の大祭を執行し神輿の渡御あり各商店にては景物の団扇を数多仕入れて之を近郷近在よりの来集者に贈るの外各町ともに戦捷凱旋の祝意を表して山車踊り屋台等を曳き出し為に近年稀なる賑ひを呈したる〔朝日新聞 1906〕

新聞記事⑤ 明治41（1908）年7月15日 東京版『朝日新聞』「熊谷町の団扇祭」

埼玉縣下熊谷町八坂神社は来十八日より四日間執行す神輿の渡御、山車、屋臺等頗る賑かにて各商店にては競うて団扇を顧客に贈るを例とし其数四万本を下らざるべしと〔朝日新聞 1908〕

新聞記事⑥ 明治42（1909）年7月31日東京版『朝日新聞』「熊谷の団扇祭り」

埼玉縣熊谷町にては例の如く大字熊谷、同石原の二字に別れ祇園祭典を執行する由なるが本年は団扇は珍らしからずとて他の物品を贈る家多く約三割方団扇の数を減じたりと又八坂祭典は八月五日より八日迄にて花車屋台等を曳き出す由（熊谷通信）〔朝日新聞 1909〕

新聞記事⑦ 明治43（1910）年7月21日東京版『朝日新聞』「熊谷の八坂大祭」

殊に廿一二日は各商店一年中の書入日なれば誰彼の別なく必ず団扇を客に呈し客亦之を貰はんと近郷近在より群集し来る劇場は熊盛座（東京旧派大芝居）同梅盛座（東京新派）緑座（旧派）にて演じ何れも客に一本宛進呈する由〔朝日新聞 1910d〕

①～③の文中にある団扇の事項を見てみると、ほとんどが商店と顧客との間で行われている。新聞には、祭典期間中に各商店が競って客に団扇を贈呈することになっており、近郷近在から多くの人が集まっていると記されている。

事例④では団扇の頒布については、「各商店にては景物の団扇を数多仕入れて之を近郷近在よりの来集者に贈る」とある。この新聞記事から、過去の新聞記事同様に、祭典期間中は買い物をすると団扇が貰えたとある。熊谷うちわ祭における団扇の頒布は、明治35（1902）年以前から行われていた。また、団扇の頒布に関しては商店が競って行っていたということが記されていた。⑤～⑦の新聞記事では、商家が競って団扇を頒布してあると記されている。⑤の新聞記事には、団扇が4万本以上仕入れられていたことが記されている。

このように、団扇の贈呈に関する新聞記事を読み解いていくと、団扇を求める人びとは、近郷近在の人びとが中心であり、団扇を求めるために数多くの人を訪れていたということが記されている。興味深いのは、明治42（1909）年7月31日の東京版『朝日新聞』には、「埼玉県熊谷町にては例の如く大字熊谷、同石原の二字に別れ祇園祭典を執行する由なるが本年は団扇は珍らしからずとて他の物品を贈る家多く約三割方団扇の数を減じたり」とあり、必ず団扇が頒布されることはない。

（3）頒布品としての団扇

熊谷うちわ祭の団扇に注目し、明治時代の写真や新聞記事を中心に団扇頒布について考察した。祭礼において団扇が配布された年代については、明治時代から行われていたと考えら

れる。この団扇の頒布は、祭典地域内の商店と顧客と祭典関係者との間で行われていた。それらの様子は、明治時代の写真と新聞記事にも記されている。また、配布される団扇も当初は無地の渋団扇から印刷技術の発達により、徐々に華美な団扇が頒布されるようになっていった過程があったと推測できる。

この団扇が頒布されるようになった時期に関しては、平成27（2015）年に発表された熊谷八坂神社祭礼行事保存会と市江南文化財センターの共同調査においては明治35（1902）年頃より開始されたと結論付けている。しかし、明治時代の朝日新聞の記事を分析する限り、明治33（1900）年には「団扇祭」の記述がある。そのため、萩原半次郎が東京都日本橋から帰ってくる以前から団扇が頒布されていたと指摘できる。また、同新聞記事には「此祭典は一名団扇祭りと呼べ近在より団扇を貰はんが為に集まる人の多く」とあり、明治33（1900）年では既に団扇の頒布が定着していたと窺える。そのため、明治33（1900）年以前より、団扇の頒布が行われていた可能性がある。堀口をはじめとする泉州楼の萩原半次郎が団扇の頒布の起源となった説については、萩原半次郎が祭礼期間中に団扇を持ってきたのではなく、東京都日本橋から団扇を仕入れて祭典期間中に贈呈するようになったのが最初であったのではないかと推測される。つまり、萩原半次郎が団扇を東京都日本橋より仕入れたため、より熊谷では団扇の頒布が盛んになっていき、彼が団扇を最初に頒布したと考えられる。

3 鳶と総代の大山代参

(1) 熊谷うちわ祭の大山代参

熊谷の大山信仰 熊谷市内の大山信仰については、『熊谷市史 別編1 民俗編』³と『関東の民間信仰』⁴に報告がある。『関東地方の民間信仰』によると、熊谷市内の今井、大塚、葉草地区には石尊大権現を祀る灯籠があるほか、初参りと称して男子が大山を参拝し遊郭で一泊したという報告がある。これらは比較的、農村部における大山信仰である。北村敏は、熊谷うちわ祭の祭典地域内の大山講について報告を行った⁵。北村の報告の中では、鳶と祭事関係者が行うものであり、祭典関係者が大山から帰ってくると神酒杵を担いで町内をまわる行事を報告している。この行事については、神酒杵の存在する熊谷うちわ祭祭典地域内の第一本町区、第二本町区の事例が中心であった。熊谷うちわ祭の大山代参の行事は、第一本町区と第二本町区が中心に報告が行われているが、それ以外の町内や大山での行事の方は行われていなかった。今まで、熊谷うちわ祭と大山講の関連について研究が行われてこなかった理由は、大山講を熊谷うちわ祭と切り離して研究が行われてきたことと、大山に赴いて調査することが行われていなかったためであろう。

平成27（2015）～30（2018）年の大山代参に実際に同行して見学した記録をもとに、現在行われている大山代参について報告する。

³熊谷市教育委員会 2014 『熊谷市史 別編1 民俗編』 熊谷市

⁴日向野徳久 宮田登 藤田稔 和田正洲 直田昇 村崎勇 井上善治郎 1973 『関東の民間信仰』 明玄書房

⁵北村敏 1992 「大山詣りの「神酒杵」について」『多摩のあゆみ』69号 たましん地域文化財団

(2) 熊谷の大山信仰

熊谷の大山講 大山は、神奈川県伊勢原市・秦野市・厚木市境にある標高1,252メートルの山である。別名雨降山ともいわれ、古来より雨乞いの霊山として信仰されている。江戸時代には授福防災の神である石尊権現として信仰を集めていた。関東一円に大山の信仰は流布していて、各地で大山講を結成して大山への参詣が盛んになり、同時に代参者などの往来で大山道が繁盛した。

熊谷市内における大山講は、弥藤吾、原井、本町、筑波などにある。これらの講は、神奈川県秦野市の大山阿夫利神社への代参講である。弥藤吾・太田地区では、現在代参することはないが、7月27日を灯籠立といい、この日から20日間、朝夕灯明を地域の人びとが交代であげて、五穀豊穡を祈る。昔は代参で、御師の家に泊り祈願してきた。本町では家内安全・雨乞祈願のため大山講は現在も続いている。祭事掛が講の当番になり、毎年代表者10人で代参する。昔は奉納するお神酒の樽を天秤棒でかついで行ったという。お神酒とお札を受けてきて講員に配るといふ報告がある。

現在、大山代参は全町の反省会の前に行なわれる⁶。会議の日程の変動はあるものの、7月28日～29日の大山代参の日程は変わらずに固定されている。

熊谷大山講の神酒杵 熊谷うちわ祭には、現在3基の神酒杵が存在する。神酒杵とは、大山代参の際に、大山阿夫利神社から神酒を持ち運ぶ為に用いられるものである。この神酒杵は2基1対で、内部に神酒を入れる容器を納め、天秤棒の両端に通して運べるよう、上部に四角い穴が開いている。

第一本町区の神酒杵は、安政3(1856)年、大工飯田和泉守、彫物師飯田岩次郎が製作した唐破風切妻造りのものである(写真7)。第一本町区の神酒杵の中には、銀製壺が入っている。第一本町区の神酒杵の内部には、「大工棟梁和泉守藤原兼糊年二十一才時造之也 彫物師飯田岩次郎藤原義宗兩人同家」と「大工棟梁同郡川原明戸村 飯田和泉守 藤原兼糊」とある。

第二本町区の神酒杵は、安政5(1858)年の作で棟梁小林某が製作したとされている(写真8)。特徴は、唐破風、火灯窓などがあり、八棟造となっている。第二本町区の神酒杵の中に錫製壺がある⁷。第二本町区の神酒杵には、20年以上中断していた大山への参拝が中止さ

⁶ その後、翌年2月の大総代就任奉告祭、3月の大総代の就任挨拶まわり、熊谷祇園会・筑波区囃子保存会・仲睦会・石原区若連睦会懇談会、組頭懇談会などの大総代と年番町の挨拶が行われる。その後、4月の総代長会議、5月の交通規制打合会、踏切通過に関する打合会、6月の予算審議会、公式スポンサー会議、初集会、最終打合会などの会議が4月～6月まで行われる。7月に入ると、祭礼の最終打ち合わせなどが行われる。7月19日～23日まで祭礼が行われている。

⁷ 墨書には、以下のように記されている。

本神酒杵ノ大山阿夫利神社ニ登リシハ既
二十有餘年前ニシテ以来絶テ之ノ挙アリシコトナシ然ル
以テ本杵大ニ破レ又舊時ノ観ナカリシ信徒大ニ之レ
ヲ愁ヘ之レカ修繕ヲナスノ議ヲ興シ遂ニ日掛金ヲ
成シ明治廿四年六月東京市日本橋区小伝馬街
太田甚蔵ニ囑シ破損ノ箇所ヲ修補シ又新ノ
外函ヲ製造セシメ六月落成シタリ依テ信徒四十
有餘人之レヲ護シテ全年八月上旬舊式ニ依テ登
山セリ且ツ本杵ハ八ツ棟ナルヲ以テ世之レヲ八棟講
ト僞セリ

れたが、明治24（1891）年に神酒杵が修繕され、八棟講として再び大山へ参拝するようになったことが記されている。

筑波区にも同様の神酒杵が存在する。筑波区の神酒杵は、平成元（1989）年につくられたものである。神酒杵自体は新しいものである（写真9）。この神酒杵の中に入っている容器は江戸時代のものとされている。筑波区の神酒を入れる樽は、深緑色で表に「大山石尊大権現」と書かれており、裏には「熊谷新宿 講中」と表記がある（写真10）。

現在、この神酒杵は大山代参の際に持ち運ぶことはなく、中身の容器だけを大山に持っていくこととなっている。この神酒を入れる容器を運ぶのは、組頭の役割である。熊谷うちわ祭の全町直来の後、例年7月28～29日までに年番総代が中心となって神奈川県伊勢原市の大山阿夫利神社に、参拝に行く大山代参という行事が行われる。この大山代参には、大総代を中心とする年番総代、各町の総代長と鳶、前年度大総代、うちわ祭協賛会長などの祭典関係者が参加する。

熊谷の大山代参には、神酒杵は存在するものの、大山講で多くみられる太刀の奉納は一切行われていない。また、過去に大山講の太刀が存在したのかは不明である。

熊谷から大山へ 大山代参の企画と宿の手配などは、その年の年番総代が担当している。熊谷うちわ祭の4日後、祭典関係者たちは団体バスに乗車し、神奈川県の大山へ向かう。大山に向かうバスの中では、ビール、日本酒、ウィスキーなどが持ち込まれ、年番総代たちが鳶たちを接待する。

大山に到着すると、宿坊の目黒へ行き荷物を置いて、各町のコウバンテン（講半纏）を着用する⁸。この宿坊の部屋は、各町内で分かれている。この際、下は白い地下足袋、白い半ダコ、白いダボシャツを着用している（写真11）。また、リンと呼ばれる五鈴鈴を帯に結わう人もいる。この衣装は、総代も鳶も同様である。講半纏の着替えが終わると、目黒の一階の大広間で昼食が出される。昼食の後、各個人で大山阿夫利神社までのロープウェイへ向かう。この際、かつての源長坊⁹に立ち寄る組頭もいる。中には、ロープウェイを使わずに大山を登山する鳶もいる。

その後、ロープウェイで大山阿夫利神社の下社まで向かう。ロープウェイを降りた後、2つの流れに分けられる。1つが大総代と組頭は神事に参加するため、待合所で待機する。それ以外の鳶と総代は、下社から頂上まで登山を行う。中には、約20分で頂上までたどり着く鳶や総代もいる¹⁰。組頭と総代たちは、大山の頂上へは行かず下社で阿夫利神社の神事に参加する（写真12）。神事では、巫女舞と大総代の講元の証書が受理される。神事を受けた後、組頭と総代たちは下社の下の飲食店で、山頂にいた鳶たちが全員降りてくるまで待

松本清七 鴨田半三郎
発起人 深野時次郎 中村藤吉
中村平七
外信徒中

鳶 田中長次郎

⁸ この講半纏の紋は、各町内で異なっている。講半纏は、各町内で管理をしている。

⁹ 源長坊は、現在宿坊としての営業を停止している。現在は目黒という宿坊が中心に熊谷大山講となっている。

¹⁰ 頂上に着くと、奥ノ院への参詣や記念品の駒や団扇を購入したり、記念写真を撮影したりする。その際に、特別な儀礼などではなく、各々が集合時間に間に合うように下山していく。

つ。この際、総代の支払いで飲食が行われる。その後、大山から続々と若い鳶や総代たちが下山する。最後の一人が降りてきたことを確認して、下社から下山する。

阿夫利神社から宿坊へ 各町の組頭たちはロープウェイで下山する。中には、徒歩で下山する。中には、途中、大山寺に立ち寄る人もいる。大山寺では不動明王の開帳が行われているが、ほとんどの鳶や総代が立ち寄ることはない。その後、大山の独楽街道にある各町内行き付けの飲食店に入り、酒盛りをする。飲食店の壁には、町内の手拭や熊谷うちわ祭のカレンダーなどが飾られている。独楽街道での酒盛りの後、一同は宿坊である目黒へ帰り、入浴と休憩をする。その後、13時から目黒の宴会場で宴会が行われる。宴会では、大総代、熊谷うちわ祭り協賛会会長、来年度大総代予定者の席が上座に座り、次いで各町の総代たちが席に着く。その後、各町の鳶たちが席に着くになっている。宴会の最中には、各町鳶や年番総代によるカラオケ大会が行われる。このカラオケ大会では、鳶や総代関係なく誰もがステージに立って歌を歌う。その後、19時まで宴会が行われ、最後に鳶たちによる木遣り締が行われる。この木遣り締めは、大総代の挨拶の後に行われる。その後、鳶と総代は宿坊に一泊する。

翌日、団体バスに乗り込み、一同は熊谷へ帰省する。その際に、寒川神社と昼食のために飲食店による。この昼食は、毎年大総代持ちになっていることが恒例である。その後、16時頃に熊谷に到着する。

(3) 大山代参と町内の行事

第一本町区の神酒杵巡行 17時頃から、各町内では様々な催しが行われる。第一本町区では、神酒杵を鳶が担ぎ、町内を一周する神酒杵巡行が行われる(写真13)。神酒杵巡行が始まる前、総代や祭事などの関係者は、浴衣に足袋に雪駄という格好で、りそな銀行前に集合する。その後、町内の総代長を中心とする人びとの挨拶の後、錫杖を持った2人の祇園会会員の先導のもと、鳶装束を着用した鳶、町内の祭事関係者たちが町内を巡行する。巡行の後、鳶による木遣りの奉納が行われ、第一本町区の神酒杵巡行は終了となる。その後、第一本町区内の飲食店で宴会が行われる。宴会では、各町内の祭事関係者たちが一堂に集まり、大山阿夫利神社から頂いた神酒と御札の配布が行われる。その後、町内直会は、祭典関係者三名の挨拶の後、鳶による木遣り締めによって宴会は終了となる。また、第一本町区の山車庫入口付近に石尊大権現の木製の灯籠が設置される。この灯籠は、8月中旬まで設置される。

第二本町区の神酒杵式 第二本町区では、神酒杵式という式典が行われる(写真14)。大山から帰宅後、町内の祭事関係者は、第一本町区と同様に町内浴衣と足袋に雪駄という服装で祭礼に参加する。鳶は、鳶装束をまとい参加する。第二本町区の神酒杵巡行の際は、「大山帰り」という木遣りが歌われ、町内の一部を巡行する¹¹。例年では、神酒杵の前で簡単な式典を行い、終了となる。その後、町内の直会が行われる。町内の直会では、第一本町区同様に大山阿夫利神社の神酒と御札が配布される。その後、町内直会は、祭典関係者三名の挨拶の後、鳶による木遣り締めによって宴会は終了となる。

筑波区の神酒杵巡行と直会 筑波区でも同様に、神酒杵に関する行事が行われる(写真15)。筑波区の神酒を入れる樽は、江戸時代につくられたものと推測できる。その後、神酒

¹¹第二本町区では、総代長が神酒杵に向かって二礼二拍手を行うことだけが行われていたが、平成28(2016)年からテレビの取材を意識して巡行を行うようになった。

杵がつくられ、現在神酒杵の行事が行われている。筑波区の直会は、キングアンバサダーホテルで行われる。キングアンバサダーホテルの大宴会場が使用され、結婚式さながらの光景であった。直会では、祭典関係者たちの挨拶の後会場が消灯され、その暗闇の中を鳶が木遣りを歌いながら、提燈、神酒杵、の順に会場内を進む。その後、手前にあるステージまで巡行するという行事が行われる。最後に、ステージ上で木遣りを奏上して神酒の巡行は終了となる。その後、直会が行われる。

銀座区の下山祝い 銀座区では、神酒杵やそれに付随する行事は存在しないが、下山祝いと称する行事が行われる。地区の公民館の前で町会の人びとが総代と鳶などの人たちを迎える。

(4) かつての大山代参

代参講の変容 現在、熊谷うちわ祭の大山代参は、祭礼後の鳶の慰労を目的として、年番総代を中心に鳶をもてなすということが行われている。この大山代参はもともと、鳶だけで行われていたものであった。大山代参について詳しい『熊谷祇園祭稿』によると、大山代参の起源については、以下のように記載がある。

熊谷では祭の慰労に町内の総代や祭事掛の旦那衆が、鳶頭連中に旅費小遣いを与えて、「ゆっくり行っておいで」と送り出し、それに応えて鳶頭は神社で祈願したお札を受けて来て旦那方に「参詣してまいりました」と報告挨拶にうかがったというのが真相らしい。ですから「大山代参」という呼名がいつ頃からつけられたかはわかりません。

昔、五ヶ町の頃の大山代参は源長坊が指定宿でしたが町内も増えて、今では源長坊と目黒坊とに分かれて宿泊しておりますが、源長坊の前庭にある門柱と手水鉢に、安政六年巳（一八五九）熊谷宿仲町の鳶頭谷川他三名寄進と年号、名前が彫刻してあります。これが安政年代の頃から熊谷の鳶頭連中が大山参りをしていたことを立派に証明しております。

彫刻してある鳶頭名は、谷川卯之兵、小林文次郎、小林利八、小谷野栄吉。[重竹 1992 5]

このように、大山代参についてももとは、鳶だけで行われていたと記載されている。また、「大山代参は源長坊が指定宿でしたが町内も増えて、今では源長坊と目黒坊とに分かれて宿泊して」とあり、後々に大山代参に参加する町内が増えていったことが記されている。大山の源長坊に奉納された手水鉢には、鳶の名称だけが刻まれているため、江戸時代は鳶による代参講が行われていたと考えられる。当時の大山への代参については、詳しい記録がないため、どのように行われていたのか明らかになっていなかった。明治23（1890）年8月21日の東京版朝日新聞の「江ノ島の蚊軍」によると、熊谷から大山へ参拝に行った人々の記載があるので、一部引用する。

東京界限よりは程近く手頃否足頃の遊場所は江ノ島なり恵比寿屋、岩本楼、金甕楼等の旅舎ありて宿泊にも差支へなき事は世の人の熟知する所なるが此旅舎は藤澤の稲毛屋、平塚の内川、子易の海老屋と気脈を通じ旅客に対して指宿をなす慣ひなれば先頃埼玉県熊谷より同者に扮装にて大山に参詣せし三十餘名の内井上元次郎沢田何某外二名も参拝後江島へ廻らんものと宿屋宿屋の紹介の印を持つて右の恵比寿屋へ投宿し（以下省略）[朝日新聞社 1890]

この新聞記事には、埼玉県熊谷から「三十餘名」が大山に参拝に行っているという記録が記されている。小田急線が開通し、大山に鉄道が整備されるのは昭和4(1929)年である。明治32(1899)年は、まだ鉄道が開通していないが、熊谷から大山に多くの人を訪れていたことが明らかである。また、熊谷から大山に参拝した30名程の内、江の島に向かったのは4人であり、ほとんどの人がそのまま熊谷へ帰っていったと考えられる。

現在は代参という名称であるが、総代もついていくかたちになっている。また、大山代参では熊谷大山講という名称で、各町内の総代と鳶が参加している。この大山代参に総代もついてくるようになった年代については現在調査中ではあるが、昭和30年代生まれの組頭の幼少期には既に大山講に総代が同行しているという証言があった。この組頭の証言では、かつては鉄道を利用して大山に向かっていたとしている。

総代が大山代参に参加するようになった年代については、具体的には明らかになっていない。これはあくまでも推測ではあるが、熊谷の大山代参に総代が参加するようになったのは、小田急線開通以降の交通の便が変化して誰でも行きやすくなったことが原因ではないかと考えられる。

鳶による代参から熊谷大山講へ 現在、大山代参は熊谷大山代参という名称で、宿坊の手配などが行われている。この熊谷大山講となったのは、戦後のことであった。かつては、各町内の鳶組で、講は組織されずに鳶だけが代参を行っていたと考えられる。第二本町区では、大山講の名称は「八棟講」という名称で講が行われている。この八棟講という名称に関しては、神酒枠の形から呼称されている。現在も熊谷大山講では、八棟講が内在した形で大山代参が行われている。同様に、筑波区の神酒枠は近年につくられたものである。中の神酒を入れる樽だけは、江戸時代ごろにつくられたものであると考えられる。樽には、「熊谷新宿 講中」と文字が記されている。現在筑波区で正式な講の名前は存在していない。具体的な資料がないが、神酒枠のない町内でも大山への代参行われていたことが考えられる。そのため、かつて各町内に点在していた講が一つにまとめられて、大山講へと変化していったのではないかと考えられる。

祭礼の慰安としての大山講 熊谷うちわ祭の大山の代参は、安政6(1859)年には既に行なわれていたと考えられる。現在の大山代参では、各町内で行われていた大山の参拝が統一されて、熊谷大山講として参拝が行われている。さらに、各町内の総代も同行している。このように、かつて鳶だけで行われていた大山代参が大きく変化していった。熊谷うちわ祭の中で大山代参は、祭礼期間中に活動した鳶の慰労を目的にして行われるものである。大山代参では、年番総代が中心となって鳶に酒を注いだり、祭礼活動中のお礼の挨拶をしたりしている。複数の祭事関係者に聞き取りを行ってみたところ、ほとんどの人が熊谷大山講以前のことに関しては把握していなかった。そのため、どの時代から現在の大山代参の形になったのか不明である。この総代と鳶の関係は大山では逆転し、総代が鳶を労うことが行われている。さらに、町内に帰ると神酒枠を持っている町内では、神酒枠を担いで巡行する行事を行う町内もある。この大山代参については、かつては鳶だけで行われていたものであった。総代が大山講に同行するようになった契機については、具体的な資料がないため明確ではないが、大山に鉄道が入った昭和4(1929)年以降であると考えられる。明治時代の新聞には熊谷から30人程が大山へ参拝に行ったという記録があり、鉄道開通の前から大規模な

参拝が行われていた。現在の大山代参では、年番総代が中心となって大山の代参が企画されて行われている。そのため、祭礼での関係がそのまま大山に移されることになったと考えられる。

おわりに

熊谷うちわ祭に関しては、関連する民俗事象が多く存在する。その一方で、これまでの祭礼の研究ではこれらの事象について検討されることはほとんどなかった。そのため、これらの民俗事象を検討することにより熊谷うちわ祭の文献史料では明らかに出来ない祭礼の一面を表象させることが可能ではないかと考えた。実際に、民俗事象を見ていくと、文献だけではわからなかった事実が明らかになった。

1つは、祇園柱の存在である。熊谷うちわ祭では、当初は祇園柱を中心とした祭礼がおこなわれていた。その後、祇園柱の役割はただの飾りとなり、本来の役目を忘れられていった。また、この祇園柱は熊谷うちわ祭、世良田祇園祭、津島天王祭の3か所に存在する柱であるとする伝承が新聞記事に記されていた。いずれも、世良田祇園祭と津島天王祭には同様な柱は存在しない。この伝承については、祭神の由来を示すものではないかと考えられる。世良田祇園祭の祭神は、津島神社から勧請された牛頭天王である。祇園柱の由来は、祭礼に同様の柱が存在するという事ではなく、熊谷うちわ祭の祭神である牛頭天王が津島と世良田を経て勧請されたことを表しているのではないかと考えられる。

2つは、商家と祭礼の関係である。熊谷うちわ祭では、祭礼で最初に団扇を頒布したのは萩原半次郎とされている。しかし、実際の新聞記事を見てみると東京都日本橋から帰ってくる以前から「団扇貰ひ」が行われていたのである。また、新聞記事に通称団扇祭と表記があることから、明治33年以前から団扇を祭礼で頒布することが恒例になっていたと考えられる。この団扇の頒布については、明治時代から商店と顧客の間で行われていることもうかがえる。また、現在の祭礼は、「うちわ祭」という名称であるが、祭典地域内に古くから住む人びとは「オテンノウサマ（お天王様）」「テンノウサイ（天王祭）」など呼称していた。「うちわ祭」という名称は、団扇を貰いに来ていた近郷近在の人びとの間で呼称されていた名称であったと考えられる。愛宕八坂神社側としては「愛宕八坂神社例大祭」であり、祭典地域内では「天王祭、お天王様」、祭典地域外の近郷近在の人びとからは「うちわ祭」という名称で呼称されていたと思われる。なぜ、近郷近在の人びとが団扇を求めて熊谷を訪れたのかは正確には分からないが、バケツ型の七輪の普及や日常生活で使う団扇の用途が大きくなったことが要因と考えられる。また、各地の祇園祭などにも団扇が登場する祭礼があり、信仰的な意味合いもあったのではないかと考えられる。

3つ目は、大山講と鳶の関係性である。熊谷うちわ祭の総代と鳶の関係は大山では逆転し、総代が鳶を労うことが行われている。さらに、町内に帰ると神酒杵を持っている町内では、神酒杵を担いで巡行する行事を行う町内もある。この大山代参については、かつては鳶だけで行われていたものであった。それが、大山に鉄道が入った昭和4（1929）年以降に変化したと考えられる。このように、資料からうちわ祭を照らし合わせてみると先行研究の歴史で提示されたものと大きく異なっている。また、大山にある熊谷宿の鳶が奉納した手水鉢など現存している。これは、古くから熊谷宿に鳶が存在していることを示している。

また、現在でも熊谷うちわ祭の中でも鳶が祭礼の直接の担い手として存在する。ある組頭の話では、「昔の夏場は、火器の使用が少ないから火事も少なくて火消もやっていた鳶の仕事が減少する。それで、旦那が盛大な祭りを企画して、鳶がそれを行い夏場の収入としていた」と語っていた。大山代参も、熊谷うちわ祭で活動した鳶の慰安を目的に行われていた。一方で、関東圏の祇園系の祭礼が存在する地域では、大山講が付随するところも多く存在する。これらの地域でも、熊谷うちわ祭と同様に祭礼に参加した組頭が大山に行くことになっている。今後、関東圏の祭礼を研究する上で、この大山講と祇園系の祭礼つながりについて検討する必要がある。

以上が、熊谷うちわ祭に関連する民俗事象について検討を行った。これらの民俗事象については、熊谷うちわ祭に付随する行事を見ていくと、祭礼が一番変化していったのが明治時代であることが指摘できる。明治時代は、山車が熊谷に流入される時期であるほか、団扇の頒布の開始時期とも重なる。祭礼が明治時代に变化した一番の理由が、鉄道の開通が原因ではないかと考えられる。鉄道の開通により、遠方から祭礼を見に来る見物客や買い物客が増加していったことが伺える。これらの影響については、本章で見てきた民俗行事からも指摘できる。一方で、大山にある手水鉢からも明らかではあるが、江戸時代の熊谷宿には鳶が存在している。彼らは、現在でも熊谷で活動を行っている。



写真1 撤去される祇園柱

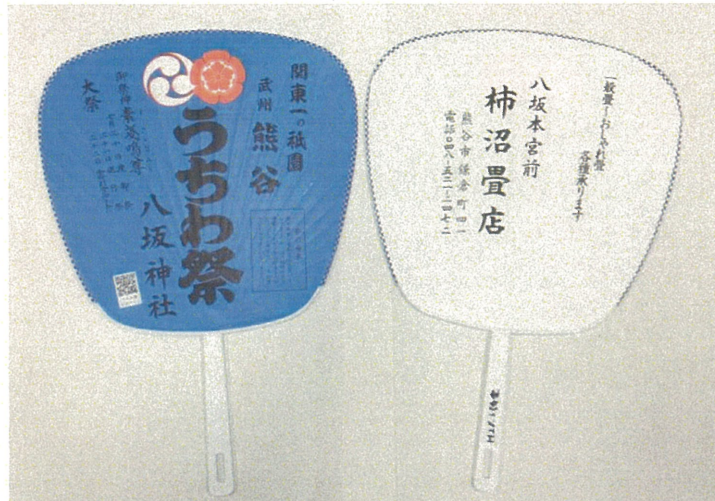


写真2 熊谷うちわ祭で頒布される団扇



写真3 行宮で販売されている団扇



写真4 明治時代の祭礼の団扇



写真5 明治時代の祭礼の団扇②

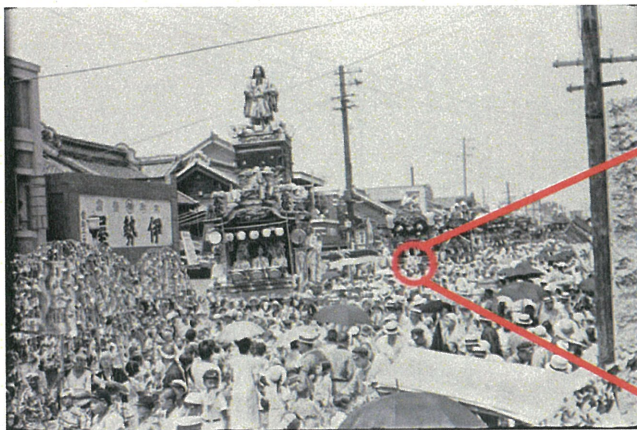


写真6 明治時代の祭礼の団扇③



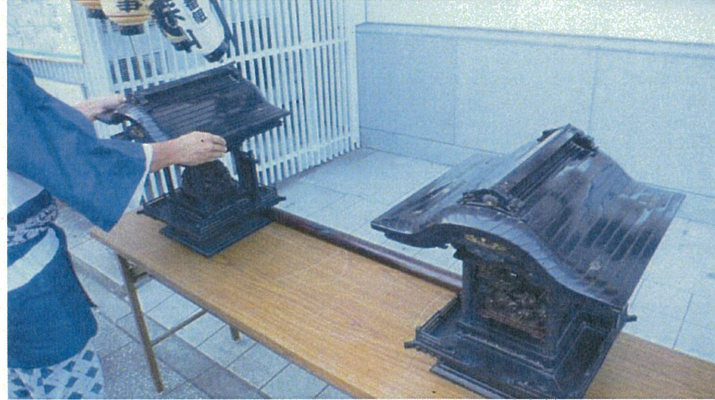


写真7 第一本町区の神酒杓



写真8 第二本町区の神酒杓



写真9 筑波区の神酒杓



写真10 筑波区の神酒樽



写真11 大山代参の服装



写真12 阿夫利神社下社での神事



写真 1 3 第一本町区の神酒舂巡行



写真 1 4 神酒舂式



写真 1 5 筑波区の神酒舂式

第Ⅱ部 旦那衆・鳶・若連の攻防

第4章 祭礼における熊谷鳶の変容

はじめに

第Ⅱ部では、熊谷うちわ祭における旦那衆、鳶、若連の祭礼の役割と変容について報告する。現在、熊谷うちわ祭で活動する鳶は建築会社を経営したり、それ以外の業種で生計を立てたりして、熊谷うちわ祭のときだけに鳶という立場になる人もいる。このように、過去の町鳶として活動をしていた鳶と、現在の鳶には大きな変化がある。

一方で、現在でも熊谷うちわ祭の中では、現在も旦那である総代と鳶の関係は存続している。これまでの鳶をめぐる研究では、町火消しとの歴史的な関係や高所作業員や建築現場で業務を行う職業としての鳶職の研究が中心に行われていた。また、関東圏の祭礼において鳶が活動していることについて報告が複数上がっているものの、あまり注目されず分析が行われていなかった。

本章では、現在の祭礼で活動する鳶に注目し、過去の町鳶との間にどのような変遷があったのか考察する。そこから、現代の熊谷うちわ祭における鳶の実態について明らかにしていく。

1 鳶をめぐる研究

(1) 職業としての鳶

鳶をめぐる研究は、鳶自身によるモノグラム・市町村史誌¹の報告から、建築学と社会学と民俗学による研究がある。建築学における研究では、建築に関する鳶の技能やその雇用形態に対する研究が中心である。これらの研究では、職業的な鳶を対象としたものである。社会学の鳶の研究では、渡辺拓也の労働者としての鳶研究²や丸山穂波の鳶の丸太仮設の技術についての研究³などがある。これらの研究では、一般的な建設業において高所作業を専門とする職人としての鳶が対象とされる。

民俗学による鳶の研究では、過去の町火消との連続性からめて、研究が行われていた。鳶による防火・消化活動について池上彰彦は、「江戸火消制度の成立と展開」のなかで、江戸時代の火消制度は鳶による破壊的消防が中心で、彼らを各商店などが雇い消防活動が行われていたとした⁴。この仕組みは火事などに備え、日常的に町内の

¹尾股惣司氏らが、自身による鳶職のモノグラフ、ライフヒストリーの刊行をした〔尾股 1972、1974〕。栃木県佐野市の『佐野市史』民俗編〔佐野市 1983〕、茨城県古河市の『古河市史』民俗編〔古河市 1975〕などに、鳶の報告が記載されている。

²渡辺 拓也 2014 「飯場の社会学——下層労働者の排除の構造とメカニズム——」 2014年度大阪市立大学博士論文

³丸山穂波 2000 「鳶職の丸太架設の技術—町神輿の御仮屋の例から—」『学術講演梗概集 F-2 建築歴史・意匠』 日本建築学会、2001 a 「鳶職の丸太仮設の技術—山車小屋の例から—」『日本建築学会技術報告集』13号 日本建築学会、2001 b 「鳶職の丸太仮設の技術—御神楽殿と御囃子舞台の例から—」『学術講演梗概集 F-2、建築歴史・意匠』 日本建築学会、2002 「鳶職の丸太仮設の技術—上屋（素屋根）の例から—」『日本建築学会技術報告集』15号 日本建築学会

⁴池上彰彦 1978 「江戸火消制度の成立と展開」『江戸町人の研究』5巻 吉川弘文館

雑務などを鳶に与えて資金等の援助を行っていたものである。明治27(1894)年、勅令で消防組規則を制定し、消防組は知事の警察権に入り、鳶から防火・消火活動の役割が薄れていった。防火・消火の役割が鳶から消えた中で、町内や旦那との関係については存続されていったとされている。岩本通弥は、都市社会が消防を紐帯原理としてまとまっているため、鳶の行事介入が残存するとした⁵。地方史誌などで、鳶の役割についての記載が頻繁にみられるようになる。その後も、飯塚好⁶や福澤昭司⁷らが地域社会における鳶の役割について調査を行った。地域社会における鳶の役割は、①消防活動への関与、②地域の祭礼・人生儀礼への関与、③町内・旦那からの雑務等の3点であるとされた。

内山大介は、鳶の行事介入は防火だけではなく、旦那の見栄文化を指摘した⁸。内山が指摘する見栄文化とは、商家が自身の経済力や豊かさを示すために、冠婚葬祭などに鳶を雇うとことを指す。内山は、かつて鳶と町内の関係性は濃密であったが、近年そのつながりは消失・希薄化していると述べている。従来の鳶の研究では、かつての鳶と町内の関係性が中心で、現在の祭礼における役割について研究はなされていなかった。このように、従来の鳶の研究は、①建築業者としての鳶職、②町火消としての鳶職、③町鳶としての鳶の3つの視点から研究が行われてきた。

(2) 祭礼の中の鳶

祭礼において、鳶の役割などは多少報告されている。祭礼における鳶の役割について最初に指摘したのは中村孚美であった⁹。中村は、祭礼研究の初期から川越祭と秩父祭で多くの鳶が活動を行っているとは指摘し、川越祭りは鳶が祭礼の執行を行い、その様子を旦那衆は見て楽しむという構造を指摘している。中村を含む数多くの鳶と祭礼に関する研究では、祭礼における鳶の役割の変遷について言及した研究はほとんど行われていない。同様に、地域社会の中で鳶との関係と祭礼での鳶の関係について比較検討した研究は行われていない。佐々木真理は、浅草周辺の観光化の事例として、浅草三社祭における鳶について触れている¹⁰。佐々木は、鳶が祭礼の中で目立つ存在である「花」になった理由として、現在の鳶に受け継がれている町火消像が残存しているとした。この町火消像とは、命をかけて消火活動を行う伝統的な町火消の姿である。

⁵岩本通弥 1980 「城下町の社会と民俗—茨城県古河の常民生活誌から—」『日本民俗学』192号 日本民俗学会、1981 「鳶の社会史—城下町古河の社会と民俗—」『日本民俗学』134号

⁶飯塚好 1986 「町場における鳶職の役割—川越の鳶職を例として—」『埼玉県立民俗文化センター研究紀要』第3号 埼玉県立民俗文化センター

⁷福澤昭司 1998a 「鳶のいたマチ」『松本市史研究』第8号 松本市、1998b 『民俗と地域社会』 岩田書院

⁸内山大介 2007 「ダンナとカシラ—栃木県小山市における商家と町鳶の民俗—」『民具マンスリー』40巻9号 神奈川大学常民文化研究所、2016 「町鳶をめぐる政策と民俗—東京・千住の鳶頭と地域社会の近現代—」『日本民俗学』286号 日本民俗学会

⁹中村孚美 1972 a 「秩父祭り—都市の祭りの社会人類学—」『季刊人類学』第3巻4号 1972 b 「都市と祭り—川越祭りをめぐって—」『現代諸民族の宗教と文化—社会人類学的研究—』 社会思想社

¹⁰佐々木真理 2011 「観光地・浅草の「三社の絵」—浅草における地域維持の仕組み—」 2010年度 早稲田大学 大学院人文科学研究科 地域・地球環境科学研究領域 修士論文

このように従来の鳶による研究では、過去の町火消の延長線上の鳶として研究が行われてきた。

藤井英貴は、観光客の増加によって祭りの担い手が観客を意識して祭礼が大きく変化したと指摘している〔藤井 2005 36〕。この藤井の指摘は、祭礼が変化する要因を外部の観客に求めるものである。その後、熊谷うちわ祭では、祭礼組織の内部について注目される研究が行われてこなかった。藤澤好一と遠藤和義は、地域型住宅の研究の中で詳細に熊谷市内の鳶職の役割などについて研究を行った〔藤澤 遠藤 1983 376〕。藤澤と遠藤の研究では、昭和57年(1982)に、①鳶職が地域に果たしてきた機能、②鳶職の祭礼を通しての地域へのかかわり方、③鳶職の業務・技能の実態を明らかにするために調査を行った。それらを明らかにするために、藤澤と遠藤は調査方法として、文献とアンケートとヒヤリング(聞き取り)調査を行った。この調査から藤澤らは熊谷の鳶職の特徴は、小規模な事業形態で地域に密着した町場の鳶が多く、物質的な家や町づくりだけでなくコミュニティの形成に大きな役割を果たし、地域社会に貢献していく仕組みを保持しているとした。藤澤と遠藤の研究は、鳶職の技能・技術や雇用形態が中心で、実際に鳶職が祭礼で活躍している姿や、具体的な祭礼の準備については対象とされていなかった。

2 熊谷鳶の実像

(1) 熊谷うちわ祭の鳶

鳶をめぐる組合 熊谷うちわ祭で活動する鳶は、祭礼に参加している町内に在住している人が中心である。各町区の町鳶たちは、その町の鳶組によってまとめられている。完全に鳶だけで組織されるのではなく、一部に他の建築系の作業員や他の業種の人びとも所属している。熊谷鳶組合では、一番組から一四番組までが組織されている。熊谷うちわ祭に参加している鳶は、全員がこの組合に所属している。熊谷鳶組合は、専門の鳶以外の他の業種の人びとも所属している。現在は、熊谷鳶組合は一番組から一四番組までが所属する。この内、熊谷うちわ祭に関わるのは、一番組から一一組の10組¹¹である。熊谷うちわ祭に関わる鳶は、七月会と呼ばれる会に所属している。この七月会は、熊谷うちわ祭に関わる鳶だけが入会する組織である。七月会は、熊谷うちわ祭の施行を円滑に行う目的と若手の鳶の育成を目的に結成された組織である。

熊谷木遣保存会は、熊谷市指定民俗無形文化財の熊谷木遣りの保存会もある。熊谷木遣保存会に所属しているのは、各町の組頭である。彼らは、定期的に木遣りの練習を行っている。木遣保存会以外にも、若鳶陸会という20代～60代までの若い鳶が加入する組織がある。若鳶陸会は、毎年1月6日の出初め式の梯子乗りを専門に行う。

祭礼の準備 熊谷の町鳶の仕事は、鳶は会議や打ち合わせ会場の設営や、食事を伴う会合の総代の下足番、荷物持ちを行う。懇談会の最中、鳶はビール等の配膳を中心に、あまり食事に手を付けることはしない。懇親会が終了する際は、熊谷締め¹²と

¹¹十番組は、祭典地域外のため、鳶組での祭礼に関与してない。

¹²熊谷締めとは、懇談会の来賓や主催者を含む三人ほどの人物が一人ずつ、挨拶の後に「ヨーッ」という掛け声で、手を3、3、3のペースで叩き、「ありがとうございました」の挨拶で終わりにする。

呼ばれる特殊な手締めが行われる。熊谷締めが終わった後、各町内の鳶が参加する懇談会や食事会では、鳶による木遣り締めが行われる。この木遣り締めとは、懇談会に呼ばれた鳶の頭の中での有力者が口上を切り、それに合わせて各町の鳶が木遣りを歌うことになっている。その後、鳶と年番総代は来賓を送り出す。その際に、荷物やお土産を渡すのは鳶である。来客が帰った後に鳶は食事をする¹³。この会議や食事会の鳶の動きは、年番町区以外の各町区でも見られる。

(2) 祭礼での活動

祭礼の準備 年番町の鳶の仕事が本格的に行われるのは、7月第一土、日曜日である。年番町の鳶は、ハッキリ（張り切り）と呼ばれる斎竹と安全看板と旗の設置、行宮の設営である。行宮などの設営の際は、翌年に年番を迎える町内である、通称迎え年番も手伝いに来る。年番町とそうでない町の共通の祭礼の準備として、自町内の会所の設営や自町内の山車・屋台の準備がある。

神輿渡御と山車・屋台巡行 各町の鳶は、20日の早朝3時頃から、愛宕八坂神社に集合して神輿の綱付けを行う。午前6時頃から、神輿を発信させる神事後、年番組頭の合図により神輿渡御が開始される。神輿渡御では、榊と振れ太鼓を乗せたりヤカー、各町区組頭、神輿の順番で巡行する。神輿を昇くのは、白装束の鳶である。御輿渡御を行うのは、ほとんどが各町の若い鳶である。御輿渡御は、行宮に到着する午前10時頃まで行われる。行宮の前に来ると、白装束を着た鳶が神輿を上下に激しく昇く。その後、行宮に神輿は安置されて、御輿渡御は終了となる。御輿渡御以外にも、鳶には山車・屋台巡行についても大きな役割がある。各町の山車・屋台を行う人びとは、鳶、祭事掛、祇園会等の若連、お囃子会の子どもたちである。このうち、鳶の役割は山車・屋台の綱元で綱を曳くことと、山車・屋台の上部に乗って電線などの障害物を除けるヤネカタ（屋根方）という役割がある。組頭は、山車・屋台の前輪後部の座るスペースに座り、両足で前輪を操作する。この組頭が前輪を操作する仕組みは操作するのが難しく、操作を誤ってしまうと山車・屋台を標識や家屋に衝突したり、足が前輪に巻き込まれて骨折したりする危険がある。

お祓いの獅子 祭礼期間中、中日と最終日の朝に第一本町区、第二本町区、筑波区、弥生町区の町内ではお祓いの獅子が行われる（写真1）。お祓いの獅子とは、各町区内の家や商店などを3、4人の鳶が一軒一軒まわって門付けするものである。第一本町区と第二本町区の場合、雄・雌の獅子頭ごとに分かれて、3、4人の鳶が町内をまわる。お祓いの獅子舞で各家をまわる際、鳶たちは獅子頭、盆、大幣を1人ずつ持つてまわる。

鳶がやってきた家では、あらかじめ祝儀袋等に入れて渡す家と、裸のまま金銭を渡す家もある。鳶は訪れた家に行くと、御幣を持った鳶が「家内安全、商売繁盛！」と叫び、御幣を振る。大幣を振った後、獅子頭を担いでいた鳶が、獅子頭の口を3、4回叩く。最後に、鳶は全員頭を下げて「ありがとうございました」と言って終了する。

¹³平成28（2016）年4月13日の鳶の会合の際、会合に参加した。各町の鳶は、来客の大総代、次年度大総代、熊谷うちわ祭協賛会、各町総代長を送り出した後、再び席について食事を食べていた。その際に、「俺たちはお客さんがいないと飯が食えないんだ」とある町内の組頭のSさんに教わった。

その後、隣家に向かう。中には、お祓いの獅子を断る家もあるため、事前に飾り花を飾る家をまわる。この飾り花は、鳶が販売したものである。比較的、祭礼に協力的な家は玄関先に飾っている。この獅子まわりは、銀町内にある飲食店や銀行などの金融機関でも行われる。この獅子まわりは、過去は鳶の昼食代の徴収を目的にして行われたものである。現在でも、獅子まわりの寄付金は鳶が徴収することとなっており、総代などは寄付金については把握していない。

纏行進・最終日纏振り 鳶の役割は、人前に出て纏振りや木遣りの奏上を行うこともある。纏行進は、初日の7月20日17時頃と最終日の年番送り前にその各町区の山車・屋台の前とステージ上で行われる。初日の纏振りは、各町の山車・屋台が駅前に巡行する際に、各町の鳶が自分の所属する鳶組の纏を振って行われる、鳶が各町内の山車・屋台が熊谷駅に向けて巡行する際に先頭で纏を振る。最終日の纏振りでは、年番送りが始まる前の山車・屋台前で纏振りが行われる。また、最終日の熊谷木遣保存会の纏振りが終わった後、熊谷木遣保存会に加入している組頭がステージに上がる。その後、神輿に向かって木遣が奉納される(写真2)。この後に、年番町の交代式である年番送りが行われる。

祭礼の片付けと全町直会 祭礼終了後、各町の鳶は自町内の会所を中心に片付けを行う。年番町では、行宮の解体、安全看板等の撤去が行われる。それ以外の鳶では、自町内の開所の片付けや、山車・屋台の片付けが行われる。会所は、自町内の総代や祭典関係者の商店が使われて、その持ち主の総代・祭事が手伝うこともあるが、ほとんど鳶が行う。片付けを終えて、1週間以内で全町統一の直会が行われ、各町の総代、組頭、祇園会幹部が招待される。その後、直会の最後に鳶による木遣り締めが行われる。祭礼終了後、各町の鳶は年番総代の案内のもと大山代参へ行く。翌日、鳶と総代は熊谷に帰ると、一部町内で神酒杵巡行・神酒杵式などの行事が行われる。

(3) その他の活動

消防とその他の役割 現在、熊谷の鳶は熊谷うちわ祭以外にもわずかであるが、消防や祭典関係者の葬儀などで役割がある。現在、鳶が消防団に加入している。それは、町鳶だから消防団に加入する事ではなく、個人的に消防団に加入している。鳶組合でも、毎年11月に熊谷支部消防特別点検に参加するなどの消防の関わりがある。

鳶の活動は、祭典関係者の葬儀にも見られる。熊谷うちわ祭の祭典関係者が無くなった場合、棺の搬入や葬儀場での受付などを行う。その他にも、ブク木遣と呼ばれる木遣りを奏上する。現在は、祭典関係者の遺族から連絡を受けて活動をしている。現在は、葬祭業者が中心となって葬儀を行っていたが、かつては鳶が中心に鳶を取り行っていた。鳶を呼んだ家で冠婚葬祭のしきたりでわからないことがあった場合、鳶に聞いて教わっていた。ある鳶の話では、「昔は、人が亡くなった場合、呼ばれていないけど家に行って手伝いに行っていた」と語っていた。以前は、各町の商店の店主が総代を務めることが多く、祭礼以外にも日常的な関わりがあった。現在、人手不足のため総代はサラリーマンや町外在住者が就任するようになる。そのため、鳶と総代との関係が希薄になっている。

その他にも、一部の鳶では熊谷うちわ祭以外にも高城神社の胎内くぐり(茅の輪く

ぐり)、愛宕八坂神社の愛宕祭にも鳶が関与する。この活動は、全町の鳶が手伝いに行く義務はなく、各町内の鳶の有志で行われている。熊谷うちわ祭と同神社の祭礼である恵比寿講、だるま市の行事の際も鳶が、お仮屋の設置を行う。鳶たちは熊谷鳶組合から手伝いということで祭礼の準備や片付けを行う。

3 かつての熊谷の町鳶たち

(1) 防災と鳶

鳶と消防・防水 現在、熊谷に鳶がいつから存在しているのかを示す資料は確認されていない。しかし、神奈川県伊勢原市の大山にある宿坊の源長坊にある手水鉢には、熊谷宿の鳶が安政6(1859)年にこれを奉納したことが刻まれている。そのため、江戸時代後期には既に熊谷宿に鳶が存在していたと考えられる。江戸時代から明治時代にかけて、熊谷宿の鳶は消防・防水の役割が一番重要であった。現在でも、鳶個人で消防団に加入、鳶組合で毎年11月の熊谷支部の消防特別点検に参加するなど、消防に関わった名残が見られる。熊谷市における消防活動は、天保年間(1830~1843)に各町11人が1組で町をまわって、火の番を実施していたのがもととなったとされる。その後、文久年間から明治初期まで各町とも若衆頭5~6人を選び、世話番また世話役と呼び、毎年10月より翌年3月まで鳶は、町内の火の番にあたった〔新島 2013 9〕。

明治時代の熊谷市周辺の地域を詳細にまとめた大正6(1917)年に発行された『熊谷大観』によると、熊谷市の鳶について消防活動が以下のような記載がある。

消防上の施設 熊谷町に於ける消防上の設備の組織は、近来まで甚だ非組織的であった、即ち町としては是に対して何等の関係もせず、従って一銭の予算さえも計上して居なかったのである、第一本町区、第二本町区、筑波区、仲町区、鎌倉区、柳原区、上石区、下石区等に各区に一組宛の消防隊があつて、各区が各自に費用を負担して設備を為して居るに過ぎなかった、大正五年度より即ち是れを変更して、各区独立したる消防隊を統一して、熊谷消防組と石原消防組との二組と爲し、是れに各一名づつの組頭を置いて統轄せしめ、此の二組を更らに十部に分けて、各部に一名の部長を置いて部を統率せしめて居る、そして部長の下に二名の小頭を置いて、部長を輔佐せしむるの制度を採る事となつたのである、石原消防組の方は新島竹次郎氏が組頭であるが、熊谷消防組の方は組頭に缺員になって居る、石原消防組の奉は四部、熊谷消防組に属するものが六部である、各部に一基づつのポンプを配置して各部を通じて三百三十七人の消防夫がある。

水防 熊谷町の西南を流る、荒川は、多く水枯れて水運の用を為さぬであるが、一度び降雨打續く時は、忽ち増水して水勢奔騰汎濫し、古来其被害の程度も甚だ尠なくないのである、是れ即ち熊谷町に水防の設備を要する所以である、現在のところ消防組を以て水防を兼ねしめて居る。〔下田 1917 188~190〕

『熊谷大観』によると、明治時代以前の鳶による消防活動は、「非組織的」で予算の計上がされていなかったことが記されている。明治22(1889)年に、熊谷町と合併した石原村を含め、6か町に各詰め所を置き、約50人の鳶が交代で町内の巡視

を行いた。明治27(1894)年2月10日に『消防組規則』が制定公布され、熊谷町に第一本町区、第二本町区、筑波区、仲町区、鎌倉区、柳原区を含む6部、石原村には上石区と下石区を含む4部区域が設置され、各町区から予算が算出される。大正5(1916)年に各町の消防隊を統一して、熊谷消防組と石原消防組を結成する。水防も同様に、消防組の役割となる。大正10(1921)年に手挽きガソリンポンプが購入され、熊谷町に一部、二部と石原村に一部(下石区)へ設置された。筑波区、鎌倉町、仲町、石原(上石植木、坪井)は腕用ポンプが消火活動に使われていたとされる。昭和16(1941)年12月1日、熊谷警防団常備消防部が設立され官営で消防活動が行われるようになる。その後、鳶から消防の役割が消失する。

大正2(1913)年、現在の熊谷鳶組合前身である鳶組合が設立される。鳶組合が創設された経緯については、熊谷市圓照寺にあった「鳶組合之碑」に記されている¹⁴。

鳶の業たる全般の工作に涉り消防防水の任より冠婚喪(原文ママ)祭の役に従う其行動の謹直を要する言をまたす然れども気節の弊流れて客気となる近くは飛鉤揮擧の争擾なきも往々古習を脱せざる憾ありき大正元年熊谷石原同業者和協して業務の改善を企図し翌二年一月鳶営業組合を創設し各種の規約を定め一致和合を旨とし雇傭従弟を撫育し各自素行を修めて喧騒疎暴の行為を慎み顧主の用務は懇切熱心に従事し警鐘一響跳起之れに赴き以て消防手たるの本領を発揚し十有五年の間能く協約を遵守し各其業を励み遂に弊習を除去し面目を一新す此事に盡瘁して功労ある者亦少なからず茲に碑を建て以て紀念せんとし記を予に請ふ因て其梗槩を述ぶること此の如し

昭和二年一月 從六位林幽章撰並書〔熊谷郷土会 1937 10〕

この碑文によると「大正元年熊谷石原同業者和協して業務の改善を企図し翌二年一月鳶営業組合を創設し各種の規約を定め一致和合を旨とし」とあり、大正元(1912)年に石原地区の鳶と共同で業務改善のために設立されたとされている。同年に職工連合会が設立し、鳶部門が設立さる。熊谷鳶組合は、商工連合会の活動として昭和21(1946)年まで、小学校などの建設を行っている。

鳶による公演 『熊谷鳶組合 創立百周年記念誌』の鳶組年表によると、熊谷鳶組合は創立の大正2(1913)年から昭和初期にかけては、役場や小学校などの建設が中心であった。これらの建築事業は、当時の建築業を中心とした熊谷職工連合会に鳶組合が加入するかたちで、建築事業が行われた。その後、昭和22(1947)年以降は、熊谷職工連合会等の工事の記述が無くなる。昭和36(1961)年以降からは、梯子乗りや纏振りなどの鳶の間で伝承されていた芸能の公演が頻繁に行われるようになる。昭和43(1968)年には、旧東京12チャンネル「街ぐるみワイドショー」に熊谷鳶組合が出演する。それを契機に、熊谷鳶組合が熊谷市内外のイベント等で頻繁に公演を行うようになる。それは日本国内にとどまらず、フランス、ドイツ、中国、メキシコ、アメリカに親善使節団として渡航している。現在、組合での工事などはあまり行われず、梯子乗りや纏振りや木遣りの芸能による公演が中心になっ

¹⁴ この石碑は、空襲により焼失している。しかし、『熊谷郷土会誌』2号に消失前の石碑の記載があったため、その文面を引用する。

ている。熊谷鳶組合は、鳶の業務改善のために設立された組織であるが、現状は梯子乗りや纏振りなどの鳶が伝承している芸能を行う組織となっている。この組合の変化は、かつて鳶が担っていた左官や庭師などの仕事が分業化していき、鳶から独立していったことが原因と考えられる。鳶から様々な業種が分業化していき、鳶としての大きな役割は梯子乗りや纏振りなどの芸能が主な役割になったと考えられる。

(2) 日常での雑務

鳶の雑務 熊谷の鳶は明治以前、消防・防火と防水の役割を担っていた。火災などは、日常的に起こるものではないため、日常的に町内等の雑用を任せられていた。明治時代の鳶について記載がある酒井天外の『熊谷百物語 上巻』の鳶の記述には、以下のよう記されている。

今度は勇肌を兄イを紹介して見よう▼是が俗にいう頭だ標題の鳶というやつである▼此の鳶という由来は何歴ものであるか御当人一向御存しが無い説明御預りとして内幕を書いて見ようならば此社会程職務に忠実で熱誠で勇気があって無邪で変化極まり無きものはあるまい感ずべきは水火を辞せずと来て居るコー褒めて置いたら苦情は出まいネ▼鳶即ち頭は御祝儀の御供にも成れば御寺の穴掘りとも御坊焼と化ける大工の真似もやれば左官とも成警鐘乱打消防の道具持は彼等の縄張で水防は又唯一仕事である正月のメ飾から祭礼の行事塀が倒れてても(原文ママ)ヤレ頭壁が落ちてヤレ頭火の番もすれば井戸換も庭師もやる赤飯の配りから悔み返しの饅頭(原文ママ)まで皆此の頭の厄介に成るのである▼上棟式の木遣節は確かに彼等の誇りとする所で又非常に愉快とする所である之に引換へ穴掘と便所いちりはあまり感心し無所をみれば凡てが楽天主義であるとするに彼等は一定の縄張即ち御出入という御得意が御用を受ける▼目下熊谷の鳶は其數百三十人に上り一日平均百人は活動して居るそうである▼各町に鳶の親分が十六人あって此の部下に附従して居る▼熊谷鳶の御大将は筑波町の鳶小森谷伴七(五九)で綽名が関白という位で又鳶同盟組合の大主計様だ▼彼等社会の誇りとし且つ榮譽とするものは印半天(原文ママ)で此の看板の多い程榮譽として居る▼日当は手弁当で一人金六十銭▼仕事の都合で海拔千尺の煙突にも上れば地下一丈の洞穴にも潜る所は人間仕事とは思はれない確に一大怪物様だ〔酒井惣七 1912 51~52〕

『熊谷百物語 上巻』によると、熊谷の鳶は墓穴掘り、火葬、建築、左官、警鐘の鐘打ち、消防の道具持ち、水防、正月メ飾の製作販売、祭礼行事、火の番、井戸換え、庭師、赤飯の配り、饅頭配りまで行っていたと記されている。同文中には、「迄皆此の頭の厄介に成るのである」とあることから、町内のほとんどの家が鳶を頼んでいたことが考えられる。当時、熊谷では鳶の親玉(頭か)は16人おり、鳶として130人以上が活動していたと記されている。また、その中で、筑波区の鳶の小森谷氏が鳶のまとめ役とされている。また日当は、手弁当で一人60銭であったとされている。当時の熊谷宿にはかなりの数の鳶が日夜活動していたことがうかがえる。その鳶の役割は、非常に多種多様であった。現在、町内の行事等で鳶を呼ぶ関係は希薄になっており、祭典関係者の葬儀など祭礼に関しての関わり以外は存在しない。現在の鳶と町内

の関係は、ほとんどが祭礼のために行っている。

明治33(1903)年の東京版『朝日新聞』の記事には、「熊谷八坂神社祭礼の椿事」に当時、熊谷町で起きた山車転覆事故の記事に鳶の記述がある¹⁵。

埼玉県大里郡熊谷町にては去る十六日より十八日まで三日間八坂神社の祭典を執行せしが此祭典は一名団扇祭りと呼べ近在より団扇を貰わんが為に集まる人の多く殊に熊谷五ヶ町とも山車曳出し各町の若者ども互いに派手を競いたるより其賑わい一通りならず十八日最早祭りも仕舞の日なりとて若者連一層花く敷町内を練廻りしが一二町目より曳出せし神武天皇の山車は三四町目の戸隠明神の山車に追付かんとなし警護の木遣勇ましく曳行く際如何にしけん前なる車輪少なく横向きに捻向きて運転ははたと停まりしかば山車は忽ちメリ〜と音して前の方へ転覆し地上に落ちて三段に折れ之に載り居たる数多の人を悉く地上へ投出されたるにて群集の者は大いに驚ろき泣くもあり叫ぶもあり一時の混雑名状する由なき程なり此椿事中山車の下に捺され又は落ちたる者に、重軽傷負いしもの大工職鳶職囃し方等にて六名あり何れも応急手当をなし目下病院にて治療中なるが此山車は新調後間もなきものにて此損害千円余に上るとなり〔朝日新聞 1900 a〕

この新聞記事には、「山車の下に捺され又は落ちたる者に、重軽傷負いしもの大工職鳶職囃し方等にて六名あり何れも応急手当をなし目下病院にて治療中」とあり、大工職と鳶職と囃子方の六名が重軽傷を負い、病院で治療を受けたと記されている。この新聞記事では、どのように大工と鳶がかかわっているということが記されていないため正確なことは不明である。既に、明治時代には、鳶が山車の運行をやっていたと考えられる。現在山車・屋台巡行にはかかわっていない大工職の記述もあり、当時は大工職も祭礼に関与していた可能性がある。新聞記事中には、「神武天皇の山車は三四町目の戸隠明神の山車に追付かんとなし警護の木遣勇ましく曳行く際」とあり、木遣りが歌われながら山車の巡行が行われていた。このように町鳶が、熊谷うちわ祭で重要な位置を占めるのは、火消し役として旦那衆とのかかわりが深かったころの名残とされている〔藤沢 遠藤 1983 373〕。

4 熊谷うちわ祭の鳶たち

(1) 仕事師から象徴的な鳶へ

町鳶の役割変化 熊谷鳶組合の仕事は、創立当初の大正2(1913)年から昭和初期にかけては、公共施設などの建設が中心であった。その後、昭和36(1961)年以降、熊谷市内の老人ホームなどで慰問を目的に纏振りや木遣りの公演を行う。昭和43(1968)年、旧東京12チャンネル「街ぐるみワイドショー」に熊谷鳶組

¹⁵記事によると、最終日の18日まで若者たちが木遣りを歌いながら、山車の巡行を行っていたとある。本町一二丁目の神武天皇の山車は、本町三四丁目の戸隠明神の山車に追い付こうと、方向転換したところ転倒し、山車が3段に折れて破損したとある。この事故は、山車を運行させていた大工職・鳶職・囃方ら6名が重軽傷を負う大規模な事故であった。明治33(1903)年の東京版『朝日新聞』には、神武天皇の山車は最近新調されたばかりで、被害総額が1,000円以上であったことが記されている。

合が出演する。それを契機に、熊谷鳶組合が熊谷市内外のイベントなどに頻繁に公演する。公演は、日本国内にとどまらず、海外でも行われた。熊谷木遣りは平成9（1997）年に、熊谷市指定無形民俗文化財に指定された。現在、熊谷鳶組合に加入している組頭で結成されている熊谷木遣保存会によって継承されている。熊谷木遣りは、江戸時代に江戸在住の木遣師が旧本町四丁目の組頭宅に宿泊した際、伝授された江戸木遣りがもとと伝えている。現在も60数種類の木遣りが伝承されている。熊谷木遣りが文化財に指定される以前は、祭典関係者の中で行われていた木遣りが、観客の前で歌われるものに改変され、纏振りが同時に行われるようになる。鳶が仕切っていた冠婚葬祭が、現在は葬儀社が行うようになった。年々、熊谷市では鳶が出入りしていた大店が減少していった。祭礼の鳶の役割も、作業が機械化されていく中で、鳶がいなくても祭礼が行われるようになる。この結果、祭礼に鳶の必要性は次第に縮小されていった。

現在の熊谷うちわ祭では、鳶が人前に出てくる機会が非常に多くなってきている。かつての祭礼では、山車・屋台巡行などの役割が中心であった。現在では、木遣奉納や纏振りなどを観客の前で多く行っていること。これは、祭礼の観客が増加したことにより、新たな役割として、観客に対してパフォーマンスを行うようになったことが指摘できる。また、過去の熊谷うちわ祭では、各町区の鳶は他町区の鳶たちに自分自身の技能を見せる場であった。現在、観客が増加していく中で、警察などから安全な祭礼を行うように指導が行われている。この警察の安全指導によって、鳶同士の技能の見せ場が消失した。それにより、鳶の役割で観客に向けて祭礼を盛り上げる演出を行う行為が新たに付加された。

（2）祭礼の役割としての鳶

祭礼の中の鳶 かつての熊谷うちわ祭で活動していた鳶は、町鳶として町内で雑務等をこなしながら生計を立てていた。現在の熊谷うちわ祭で活動する鳶の場合、町内との関係より祭典関係者の間だけで葬式の手伝いをしたり、出入りをしたりする関係になっている傾向にある。このように、現在の鳶は熊谷うちわ祭やその祭典関係者の中だけで、町鳶としての活動や旦那との関係が行われている。現在熊谷うちわ祭で活動する鳶は、生業として町鳶で生計を立てている専門的な鳶ではなく、祭礼の中の役割として存在する鳶に変化している。熊谷において地域での鳶の活動が減少した理由として、葬祭業者や行政サービスの進展などが原因である。熊谷市内では、かつて町鳶が町内に関する葬儀屋や家屋の修理などを行っていた。その後、昭和45（1970）年頃から、葬祭業者の式のものと同様に葬儀が行われるようになる。また、鳶が受け持っていた仕事が徐々に行政による事業に取って代わられて、鳶の活動の場が減少していった。このことにより、地域における鳶の役目が大きく減少していった。

熊谷うちわ祭の中でかつての旦那と鳶の関係のもとで祭礼が行われているため、徐々に鳶としての役割が祭典関係者の中だけで行われるようになったと考えられる。現代では町鳶という職業はほとんど消失したといってもよい。従来の鳶に関する研究では、鳶は職業ととらえる研究の視点が多く行われた。これは、先行研究が発表された時代では、職業としての町鳶で生計を立てていた人びとがまだいたため、必然的に町

鳶＝職業という認識があったと考えられる。

本章で取り上げた熊谷うちわ祭の鳶は、祭礼の施行にあたり手間賃はもらっているが、それを職業として生計を立てている鳶は存在しない。また、過去に行われていた冠婚葬祭での鳶の関わり方が祭典関係者の中で行われるようになった。現在の熊谷うちわ祭での鳶は職業的な存在ではなく、祭礼の中の役割の1つであるものであることが指摘できる。それ以外にも、鳶の習慣だけではなく木遣や纏振りの公演を行うなど、一種の芸能の保存会や芸能集団に変化している。

おわりに

本稿は、埼玉県熊谷市で開催される熊谷うちわ祭で活動する鳶の事例から、地域で町鳶として活動する人について考察を行った。

先行研究では、職業として鳶職についている人びとが対象とされて、研究が行われていた。一方で、熊谷うちわ祭で活動する鳶の人びとを分析していくと、必ずしも鳶などの高所作業を専門とする人びとではなく、その他の建築業者や建築業とは全く関係のない職種についている人も鳶として祭礼で活動していることが明白である。

かつての熊谷うちわ祭で活動していた鳶は、町鳶として町内で雑務等をこなしながら生計を立てていた。現在の熊谷うちわ祭で活動する鳶は、町内との関係より祭典関係者の間だけである。このため、彼らは生業として町鳶で生計を立てている専門的な鳶ではなく、祭礼の中の役割として存在する鳶に変化している。熊谷において地域の鳶の活動が減少した理由として、葬祭業者や行政サービスの進展などが原因である。熊谷市内では、かつて町鳶が町内に関する葬儀屋や家屋の修理などを行っていた。その後、昭和45年頃から、葬祭業者を中心に葬儀が行われるようになる。また、鳶が受け持っていた仕事が徐々に行政による事業に取って代わられて、鳶の活動の場が減少していった。

その一方で、熊谷うちわ祭の中でかつての旦那と鳶の関係のもとで祭礼が行われているため、徐々に鳶としての役割が祭典関係者の中だけで行われるようになった。また、祭礼の時だけ鳶職の手伝いをする建築系の業種、もしくは全く違う業種の人びとも存在する。熊谷の鳶が大きく変容したのは、時代の流れと共に、彼らを雇用していた旦那方と称される人びとが地域から消失、もしくは移転していったことが大きな要因であると考えられる。それ以外に、町鳶が地域の関わり方が変化していったことも要因である。現在でも、祭典関係者の中には、冠婚葬祭で鳶を呼んで手伝いをさせることが行われている。それ以外にも、鳶の習慣だけではなく木遣や纏振りの公演を行うなど、一種の芸能の保存会や芸能集団に変化している。

これらの芸能と公演は、かつての旦那に雇用されている伝統的な鳶とは異なっている。一方で、鳶が祭礼に関わることによって、自身がかつての伝統を受け継いだ鳶であるということを再認識していることも事実である。そして、熊谷うちわ祭に参加することにより、地域の人びとから「カシラ」として再認識される場でもある。また、祭礼に参加することより、はじめて頭の存在を認識する人も多く、その祭礼のつながりで新たに鳶を出入りさせるということもあった。

この鳶が祭礼で活動することに関しては、かつては鳶を養わせることが一つの目的であったと考えられる。その仕組みが、祭礼の中で維持されていき、その結果が熊谷に非常に多くの鳶がいる地域として成立したのであろう。この鳶を雇用する制度が存続した理由に関しては、先行研究でもあった町内間で起こっている対抗意識が大きな要因であると考えられる。



写真1 お祓いの獅子



写真2 木遣り奉納

第5章 旦那衆の権威の創造

はじめに

本章は、熊谷うちわ祭において総代と鳶の関係について注目し、現在の祭礼における旦那の実態について報告する。そこから、鳶との相互交渉の中で旦那衆の権威が創造について考察する。

熊谷うちわ祭は、現在も資金提供や祭礼の指揮を行う旦那としての総代と実行役の鳶との関係が、現在でも比較的維持されている祭礼である。同祭礼は、熊谷市市役所や同市の観光協会が直接にはほとんど関わらず、現在でも当番制で回される年番町が祭礼の一切を統括している。従来の祭礼研究では、町内の旦那である人びとの権力と経済力などにより、町内の祭典組織がまとめられて祭礼の運営が行われていると考えられてきた。

松平誠は、祭礼において旦那衆は「カネとクチを出すチカラはださなかった」として、祭礼の金銭を負担し祭礼での指揮を行う役割であるとした〔松平 1983 197〕。林慶澤は、千葉県佐原市（現 香取市）の商家の研究で、旦那衆は祭礼において、財政の大部分を負担し、付祭りでは責任役や指揮役・監査役にとどまっているとした。また、実際に山車を引く鳶や若連らは、旦那方にいい思いをさせる見せ場を作りながら、曳きまわしを行っていたとした〔林 1998 84〕。このように、祭礼における旦那衆の役割は資金を提供したり、監査役をしたりするなどの祭礼を支える役割として考えられていた。塚原伸治は『老舗の伝統と〈近代〉一家業経営のエスノグラフィー』の中で、千葉県香取市佐原と福岡県柳川市柳川の祭礼に関わる旦那衆について、戦前は祭礼以外に町内の政治に絶大な力を持っていたと言及している。また、佐原の大祭における山車行事は出入りの職人たちによって山車の運行が行われていたことを指摘している。その後、戦後の経済変動により、老舗の衰退や解体で旦那衆が力を失った。そして、年齢階梯制の青年組織の若連が山車の運行を担うようになったと論じた〔塚原 2015 65〕。

本章では、熊谷うちわ祭の大総代を筆頭とする総代組織を事例に、現在の祭礼における総代の役割を分析した。そのうち、①総代に就任する人びとの変化、②祭礼資金における総代の役割の変化、③総代としての意識の変化、④総代を取り巻く鳶や祇園会などの青年組織の意識の4点に注目した。そこから、祭礼における旦那衆の役割の変遷、それを取り巻く町鳶や町内で意識される旦那像について考察する。

1 大総代と総代の役割と活動

(1) 大総代と総代の位置づけ

大総代の役割と誕生の背景 熊谷うちわ祭で大総代の役割については昭和50（1975）年に制定された熊谷うちわ祭の遵守事項に次のように記載されている。

大総代

年番町は、敬神の念篤く、人格円満、氏子崇敬者の信頼を集めるものを大総代として選出する。大総代は、祭礼の運営の最高責任者であり、会議を招集し、議

長となり、予算、決算、行事などを決し、その執行に責任を持つ。大総代は、その責務の重大さを認識し、大祭の無事執行と発展を祈念し、祈願詞奏上等神事に参画する。又神社官司に協力する。大総代の任期は、次年度年番長への事務引継を以て終わる。〔全日本郷土芸能協会 1976 49〕

年番町の大総代の選出には、「敬神の念篤く、人格円満、氏子崇敬者の信頼を集めるもの」が相応しいとされている。現在、大総代の選出方法は、各町内で異なるがほとんどは祭典費用を負担する経済力のほかに町内の祭典関係者から厚く信頼されている人物が大総代に推薦される。大総代の主な役割として、総代会の開催とその議長を務める。また、祭礼の予算を確認するのも大総代の役割である。昭和50（1975）年の熊谷うちわ祭の規則によると、「大祭の経費は、氏子崇敬者よりの寄付金及び各種団体よりの助成金を以てこれにあてる。大総代は、経費の適正なる執行に留意し、決算報告にあたっては厳正なる監査を受ける。監査は送り年番町と迎へ年番町があたる。」とある。この予算審議や決算報告は現在でも行われている。大総代は、ほとんどが一度経験すると二度となれない大役である。

しかし、この大総代という役割が誕生したのは、昭和32（1957）年である。それ以前は、年番町の総代長が神事や付祭りについての一切を統括していた。この頃の熊谷うちわ祭は、昭和23（1948）年に石原地区と本石区が新たに祭礼に参加するなど、祭典の規模が次第に大きくなっていった。その後、熊谷うちわ祭の規模が大きくなって、年番町の総代長だけでは対応できなくなった。そこで、年番町では年番総代と町内総代の2つの総代が分けられるようになった。

昭和36（1961）年に国道17号線が拡張することになり、熊谷市内の交通量が増加した。交通量が増える前の祭礼では、鳶が自由に山車・屋台の巡行を行っていた。その後、山車・屋台を巡行するにあたり、警察に許可を取るようになった。そこで、大総代を中心とする年番総代が警察に道路使用許可書を取るようになった。1975年、2001年、2017年の年番町の日程を比較すると、うちわ祭りに関する会議や懇談会などが増加した傾向にある（表1参照）。

年番総代と町内総代 熊谷うちわ祭の総代は、各町内に10名ほどおり、祭典の寄付集めや祭礼行事の企画や祭事係や鳶や祇園会などへの指示を行っている。昭和50（1975）年の熊谷うちわ祭の会則によると各町内の総代と総代長の役割は以下の通りである。

各町総代及び総代長

各町に総代を置き、合議の上総代長を選出する。

総代長は町内祭事関係の最高責任者であり、町内の予算決算等を決する他、組頭の委嘱、負担金納入、大総代通達の徹底を図る。又、町内総代、祭事係を掌握し大総代の指揮を受ける。〔全日本郷土芸能協会 1976 49〕

総代の役割は、各町内の寄付金を集める一方で、組頭への委嘱や負担金納入、大総代の通達を町内に伝えることが上げられる。現在でも、熊谷うちわ祭の総代の役割はほとんど変化していない。また、祭礼の参加町内に、自分の会社があつたりするなど、職場の縁で総代を務めるケースも多い。なかには、先祖が参加町内で商売をしていた

などの旧地縁で総代を務める人もいる。寄付金は、総代自らが参加町内の家々や商店を回って集金したり、商店や個人の名前の書かれた献灯提灯などで集めたりする。

熊谷うちわ祭の祭礼組織は、町で回される年番町が中心となって行われる。年番町は、祭礼の一切を仕切る町内で、祭礼の執行の有無や熊谷市役所や警察署などへの伝達を担う。年番町では、祭礼の最高責任者の大総代を選出する。各町の祭礼組織は、大総代を中心に各町区の総代長がまとめられ、各町区ではその地域の総代長を中心に、祭事掛、鳶職、祇園会・若連、お囃子会がまとめられる。

祭礼内の鳶の位置づけ 熊谷うちわ祭で神輿渡御や山車・屋台巡行において実働的に活躍するのが鳶である。鳶は、年番町の鳶である年番組頭によってまとめられている。各町内の鳶は、その町内の組頭によってまとめられている。昭和50(1975)年の会則の「年番町及び八ヶ町組頭の任務について」によると、組頭は総代長の意向を体し、町内鳶を掌握し、責任を持って山車・屋台の保全に努め、大祭運営の万全を期す。特に、年番町組頭は八ヶ町組頭を掌握し、大祭の円滑なる運営を期するものとする。〔全日本郷土芸能協会 1976 49〕とある。このように、熊谷うちわ祭りでは、大総代を筆頭とする年番町、総代長を筆頭とする各町内が中心となって、祭礼が運営されている。熊谷うちわ祭の祭典関係者たちから、これらの鳶の活動は仕事と認識されている¹。また、鳶が活動するには必ず総代が旦那として彼らを雇用するような形がとられている。

(2) 大総代の活動

準備における活動 祭典期間において、総代は主に2つに分けられる。1つは、大総代を筆頭とする年番総代である。年番総代は、大総代の補助を行う祭礼を統括する責務がある総代である。もう1つは、町内総代である。町内総代は、総代長を中心とする町内の総代組織で活動する総代である。彼らは、文字通り町内を中心に活動を行う総代である。

大総代は、祭典期間中は「熊谷市長よりも偉くなる」などと称されるほど、うちわ祭において最も重要な役柄である。現在、大総代は熊谷うちわ祭の最高責任者として、うちわ祭に関する会議の議長を務めたり、新聞やテレビの取材を受けたりしている。これ以外にも、大総代は熊谷うちわ祭の初集会などの宴会で、自腹で扇子や手ぬぐいなどの記念品を振る舞うことが通例となっている。この記念品は、他町内の総代を意識して行われ、他町内よりも優れたものを振る舞う傾向にある。

祭典期間中の役割 祭典期間中、大総代はほぼすべての神事に参加する。神事では、玉串奉奠や直会のあいさつをするほかに、最終日の行宮祭においては白装束姿で神事に参加し、祈願紙を奏上する。それ以外に、全町の山車・屋台が集まる際は観客に向けてあいさつをしたり、来賓の埼玉県知事や警察署長らと行事を離れて、会食したりする。そのため、大総代は自町内の山車・屋台の巡行に同行することがほとんどない。

大総代は、神事や来客の接待以外にも、観客の前に出て年番札を受け渡す年番送り

¹平成27(2015)年の際、あるテレビ番組の取材班数名が組頭から食事をごちそうになった。そのことに関して、取材班は町内の祭典責任者から「鳶は仕事で祭りをやっているのだから、鳶にお金を使わせるような事をするな」と怒られたことがあった。この他にも、鳶は仕事で祭礼をやっているという意識が未だに根強いことが窺える。

を行う。この年番送りは、特設会場のステージ上で年番町の象徴である年番札を次の町内に引き継ぐ儀式であり、熊谷うちわ祭のクライマックスを飾るものである。次年度の大総代予定者は、本年度の年番札を受け取るとステージを一周し、最後に年番札をもって歌舞伎風の見栄をきる。次年度の大総代予定者が見栄を切った瞬間、会場は歓声と拍手で沸き返る。

年番札を渡した大総代は1年間、前年度大総代となって祭礼に関わり、次年度の大総代を支える立場となる。

前年度大総代と熊谷大山講の講元 本年度の年番町の役割が終了しても、なお大総代の役割がある。年番町が次年度の町内に移った後、前年の大総代は前年度大総代という役割になって熊谷うちわ祭の会議や会合に参加する。前年度大総代の役割は本年の大総代の相談相手や指導を行うことである。ある大総代経験者は、「自町内の大総代経験者よりも、前年度大総代のほうがいろいろと祭礼についての確認や相談することができる」と言っていた。前年度大総代は、本年度の大総代の相談役以外にも、人前に出てパフォーマンスを行うことがある。それは、熊谷うちわ祭の最終日の年番送りの際に、口上を行うほかに年番送りの立会人として、ステージ上に上がることである。

熊谷うちわ祭の全町内の総代と組頭を中心に行われる全町直会の後、例年7月28日～29日まで年番総代が中心となって神奈川県伊勢原市の大山阿夫利神社に、参拝に行く大山代参という行事が行われる。この大山代参には、大総代を中心とする年番総代、各町の総代長と鳶、前年度大総代、うちわ祭協賛会長などの祭典関係者が参加する。大山阿夫利神社での神事後、大総代は熊谷大山講の講元である証の証書を神職からもらう。7月29日の昼食は、例年だと大総代が自腹を切ることになっている。

2 総代と旦那衆の変遷

(1) お祭り旦那の葛藤

過去の祭事関係者たち 現在の熊谷うちわ祭で祭典に関係する多くの人びとは、祭事係としての誇りを持っている。この誇りについては、過去の祭典関係者が旧家や名家の人びとで構成されていたことによる。重竹賢一の『熊谷祇園祭稿』によると「御仮殿に揚げられる町人に記されている家の名は、熊谷の祭りを始めた宿役人の家で、熊谷の草分け六人衆と呼ばれた石川兵左衛門（南石川）、石川藤四郎（北石川）、布施田太郎兵衛、布施田六左衛門、竹井新右衛門、鯨井久右衛門の功績に感謝するために毎年掲げるわけであります。祭事掛りは町役人と同じ権力を持ち御用事とも称して中々の名誉で旧家でないと祭事掛りになれなかったといわれております。」〔重竹 1992 36〕とある。この草分け六人衆の提灯は現在でも御仮屋に飾られている。『熊谷祇園祭稿』では、江戸時代の祭事掛りは町役人と同等の権力を持っていたと記されている。

この祭典関係者に関する特権意識は、現在の祭礼でも色濃く残り、町内によって多少異なるが年番町の当番制に入っている8か町が特に強いということが指摘できる。年番町に属さない伊勢町区、櫻町区、本石区、石原区の4か町ではほとんどが自治会の関係者は総代や祭事掛などに就任していることが多い。そのため、8か町と4か町

での祭礼や総代の立場に関する意識は大きく異なっている²。

この祭事関係者が過去の熊谷宿の町役人と同等であるということについては、歴史的な裏付けは現在確認されていない。熊谷うちわ祭では総代は地域での名家や名士が務めるものという意識は色濃く残っている。

理想の旦那像とその現状 かつての熊谷うちわ祭においては、旦那方の経済力などによって町内の祭礼組織がまとめられていた。現在の熊谷うちわ祭の総代とは地域における存在などが大きく異なっている。現在の熊谷うちわ祭の総代が理想とする旦那像は、①地域の人びとから慕われている存在、②祭礼を支える資金力（経済力）、③資金（寄付）をすぐに集めることができることの3点である。この内、①と②の要素は、過去の旦那像とのつながりがあると言える。③に関しては、現在の総代を象徴する要素であると言える。

鳶や祇園会などの祭典関係者は、現在の総代に対して不満を持っている人も多い。ある町内の組頭は「今の総代は、お金は出さないけど、やたらと口を出すから尊敬できない」と語っていた。また、参加町内に在住していない総代と地域住民が衝突することもしばしばある。

祭礼を支えた旦那衆 昭和30年代の総代は、各町内に3名ほどで祭りを支えていた。彼らは、旧家や大店の年長者（隠居者）の男性で、町内においても特別な立場にいる人びとであった。この総代は、熊谷うちわ祭では資金を提供したり、町内の祭礼の統括をしたりする役割があった。祭礼以外でも、彼らは日常的に旦那衆として鳶に仕事を与えて、手間賃などを提供する人びとであった。現在、熊谷市内では熊谷駅周辺地域を中心とする旧5か町の人口流出が起こり、町内の人口減少や大店の衰退が起こっている（表2参照）。その中で、かつて祭りを支えていた総代の人びとは、他地域に移転するなど、地域から徐々に消失していった。現在、親子で代々総代を引き継いでいる人もいるが、近年は参加町外に住む総代や若年の会社員の総代も増えている。そのため、過去の旦那衆と完全に断絶している町内も存在する。

（2）資金源による祭礼の変化

祭礼の資金の変遷 熊谷うちわ祭の祭典費用は、昭和50（1975）年の熊谷八坂神社大祭要項及び遵守事項には、「大祭の経費は、氏子崇敬者よりの寄付金及び各種団体よりの助成金を以てこれにあてる。」とある。昭和50年度の熊谷うちわ祭の総支出によると、主な出費は神社に関する費用や鳶に充てる費用である。平成29年度の熊谷うちわ祭費の決算費用は24,85万8,700円であり、昭和50年度と比較すると新たなにつくられた費用などが増大していることが指摘できる（表3参照）。平成29（2017）年の熊谷うちわ祭では、140万円が公式スポンサーの収入によって費用を賄っている。

現在の熊谷うちわ祭では、町内の寄付金や公式スポンサーの資金によって、祭礼が

²平成27（2017）年3月1日～3月2日の大総代就任のあいさつ回りに同行した際、4か町のうちのある町の総代長の家で大総代が挨拶に訪れた。そのとき、総代長は留守であったため、代わりに家族が贈答品を受け取っていた。その後、次の挨拶先へ向かう車の中である年番総代は、「8か町ではないところは、大総代をあんまり重要に見ていない。8か町だったら、お茶を出したりするのに」と愚痴をこぼす場面があった。

運営されている。熊谷うちわ祭の中で、スポンサー制度が採用されたのは、平成19（2007）年からであった。それ以前は、祭礼の資金は各町内の総代のポケットマネーや寄付金によって祭礼が運営されていた。熊谷うちわ祭の公式スポンサーは、現在29社であり年々倍増していることが指摘できる。平成19（2007）年に始まった熊谷うちわ祭の事業として、企業名の書かれた献灯提灯や山車・屋台が巡行路の脇にテントを設置してそこに老人ホームの入居者を招待して祭りを楽しんでもらうウェルフェアなどがある。

ある祭典関係者の話では、「昔の大総代は、「熊谷一の大旦那」にさせていただいているから、金は出すからその他（山車・屋台巡行などの祭典行事）は任せた」と言って、多く宴席を開いて振る舞いをやってくれた。最近では、そんな人は少ない」と語っていた。現在、熊谷うちわ祭での費用は、町内の寄付金以外に熊谷市からの補助金や公式スポンサーからの費用で行われている。熊谷うちわ祭は、2000年代までは町内からの寄付金で行われていたが、年々祭礼の規模が大きくなることによって、徐々に町内だけの寄付金では祭礼が運営できないため、スポンサー資金であったり公式スポンサーの資金であったりを使用されるなどの変化が起きた。その中で、総代の役割は資金の出資者から寄付金を集める人に変化していった。

熊谷うちわ祭の旦那衆の数が減ってきた原因として、熊谷市内の人口流出とともに、熊谷駅周辺をはじめとする大店の減少が指摘できる。現在でも、熊谷うちわ祭では総代を旦那として立てて、それに鳶が関わるというかたちで祭礼が行われている。しかし、現在の熊谷における旦那と鳶の関係は祭礼の際に顔を合わせるだけの関係である。これは、かつての旦那衆と鳶とのつながりと異なっている。

総代の人数と役割の変遷 寄付金以外でも、総代の人数的変化によってその役割や存在意義が大きく異なっていることが明白である（表4参照）。現在、熊谷うちわ祭で総代として活動している人々は、各町内でおよそ10人存在する。彼らには、様々な役割が設けられている。年番町では年番総代も創設しなければならないため、総代が20人以上必要になる。年番総代の役割は多様化しており様々な役割が存在する。そのほかにも、町内総代の場合でも役割は山車・屋台巡行での補助であったり、町内の寄付金の集計をしたりするなど、その役割が多様化している。平成21年（2009）度の年番町の筑波区の場合は、年番総代が10名と町内総代が16名となっている³。このように、年番町では年番総代と町内総代を創設しなければならないため、大幅な人員が必要となる。町内によっては人員がないために、町内外の人を総代にしたり、新たな役割を創設したりすることによって人員を補うところもある。

ある祭典関係者は、「私（60代）が小学生のころは、各町の総代は6人ほどで町内の祭典費用が間に合っていた」と語っていた。総代は、ほとんどが名家や大店の年長者などで構成される旦那衆が歴任していたが、今は町内によっては町内に住んでいなくても町内にかかわりのある人が就任できるようになっている。また、現在の総代も

³熊谷うちわ祭では、番制で回される年番町が祭礼の運営を行っているため、祭礼に関する書類のほとんど保管がなされていない。今回、協力者から提供いただいた平成21（2009）年度の祭典関係者名簿を参考とする。

40代～60代の人びとが中心であり、かつての総代よりも若年化が進んでいる。この総代たちは、熊谷市内の青年会議所やロータリークラブに入っており、そのつながりで熊谷うちわ祭についての連絡や町内の寄付金の徴収などが行われている。このように、総代のつながりとしては、青年会議所やロータリークラブなどが大きく影響していることが指摘できる。もともと町内に住む総代は年々減少傾向にあり、所属する町内と住所が一致しない総代が増加している⁴。こうして、総代の権威は年々弱体化していき、地域に関わりのある人物なら誰でも就任できる役割へと変化している。

3 伝統的な旦那から比喩的な旦那へ

(1) 人口の過疎化と総代の変遷

熊谷うちわ祭は、2000年代の公式スポンサー制度が導入された。それまでの祭礼の祭礼資金は、総代のポケットマネーと寄付金などによって支えられていた。そのため、熊谷うちわ祭は実質、各町内の旦那衆たちによって支えられていたようなものである。

かつての総代は、比較的名家や大店の年長者などのいわゆる旦那衆といわれる人びとが歴任してきた。その後、町内の人口減少と大店の衰退により、総代に所属する人びとも大きな変化が起きた。それは、寄付金を多く集められる人物が総代に就任するなど、以前に比べて総代の経済力や家柄を問わずに就任できるようになったことである。

かつては、ほぼ世襲的に総代を歴任してきた。しかし現在は、所属町内に属している総代が減少しており、町内全体の許可さえあれば誰でも経済力があれば就任できる立場となっている。またかつては、名家ではないということで、祭事掛のまま総代に上がれずに祭礼に参加している人びともいたが、現在では祇園会や祭事掛から総代に昇進していく人びとが多くあり、以前よりも年齢階梯的な組織になった。

また、総代になる人びとは、ほとんどが先祖の商売をしていた町内などの旧地縁をもとにした関係で総代をやっている。これらの総代は、祭典関係以外には地域とのつながりがない人が多く、地域の住民が総代と認識していない人びともいることが明らかになった。また、祭礼などで活躍する鳶とのつながりも熊谷うちわ祭の中だけになっている。そのために、熊谷うちわ祭があるから旦那として存在できるともいえるだろう。現在、鳶や町内などでこういった総代を「お祭り旦那」と呼称している。現在熊谷うちわ祭の総代で、特に8か町の総代は過去の旦那衆が歴任していた総代像を美德として受け継いでいる。祭礼での総代のつながりが青年会議所やロータリークラブのつながりである。そのため、現在の地域の住民と祭典関係者との間に大きな溝がある。また、一部町内では現在の熊谷うちわ祭の総代たちは、祭礼の中では旦那という立場にいるが、実際の地域住民や鳶からの認識が一致しない事態が起きている。自分たちが旦那であるということを示すために、鳶に総身着物を送ったりするなど、鳶を

⁴そのため、町内の住民が総代を把握していないところもあり、町内から離反している。このことを、「熊谷内輪祭」や「JCやロータリークラブの文化祭」と皮肉を言う人までいる。現在、熊谷うちわ祭ではこの流れを受けて、山車・屋台巡行に祭関係者以外も参加できるように工夫しており、住民と祭礼の溝を埋めよう努力が行われている。

一種の権威を示すための象徴として使用していることが垣間見える。

（２）祭礼の拡大と大総代誕生

現在の熊谷うちわ祭では、大総代が祭礼全体の統括を行い、各町の総代長が自町内を管轄する仕組みがとられている。この仕組みが誕生したのは、昭和32（1957）年以降のことであった。

かつての山車・屋台の巡行の経路や順番は鳶の組頭が祭典当日に自分の権限で決めるものであり、総代が直接指示を出すことはしなかった。その後、警察の安全指導が徹底化され、事前に山車・屋台の巡行図が求められるようになった。現在は、年番町が山車・屋台の巡行図を各町内から集めて、警察に提出するようになった。その結果、以前は山車・屋台巡行の権限を握っていたのは鳶だったが、それが総代に移ったことが指摘できる。万が一、途中で事故などが起きた場合には、すべての責任を総代がとるという形に変化した。こうして、かつては実務がほとんどなく資金提供が主な役割であった総代が、祭礼の実質的な事務作業を務めるようになり、役割が重層化した。そのため、年番町の総代長だけでは祭礼を統括できなくなり、年番町の総代長とは別に大総代という役割が創設された。熊谷うちわ祭で、大総代が誕生した契機は、昭和30年代頃から始まった祭礼の観光化による観客の増加にあると考えられる。観光客が増えるにつれ、観客を意識して祭礼の規模が徐々に大きくなっていった。また、モータリゼーションなどの影響により、道路で山車・屋台を巡行するのに道路使用許可を取らなければならなくなった。それらの影響により、年番町の総代長では対応できなくなり、新たに大総代という役割が創られた。観客が増え祭の規模が拡大するにつれ、大総代自体も観客の前に出る機会も増え、年番送りも担当するようになった。

これらの総代の役割は、前章で指摘したようなかつての総代像とは大きく異なり、祭礼の事務方としての役割が増大していったことが指摘できる。そのため、たびたび山車・屋台巡行に対して、総代が時間を優先させて急遽山車・屋台の通過が困難な道路を進むように指示して、組頭と衝突することがあった。

（３）他町内への意識

現在、日本全国の祭礼では、熊谷うちわ祭で行われているような年番町制度から、徐々に祭礼の保存会のような別組織を設けて祭礼を運営している地域が増加している。熊谷うちわ祭が、今も年番町制度や総代と鳶の関係に依存している理由として、他町内への見栄があると考えられる。また、総代と鳶による立場上の補完関係の存在も指摘できる。

前章でも述べたように、熊谷うちわ祭において過去の総代は町内の名家や名士が就任する役割であった。現在、参加町内に在住していなかったり、サラリーマンなどであったりする総代が増加している。現在も、他町内の人びとや総代に対する対抗意識が非常に強く、他町内を意識して新たな行事を付加させたり山車幕などを新調したりすることが行われている。また、過去の旦那衆が鳶に手間賃を提供して祭礼を実行させていたように、町内の予算や寄付などから鳶に手間賃を提供している。また、出入りなどの鳶と関係を持つ総代は、減少している傾向にある。

現在の熊谷うちわ祭で活動する総代や鳶は、前時代の旦那衆や仕事師と名称は同じ

ものの、その実態は大きく異なっている。総代は、かつての総代像を美德として受け継いでおり、総代が旦那であるためには鳶を雇用する必要がある。また、鳶も雇用する旦那がいなければ、祭礼では鳶として賃金を貰う活動できない。このように、現在の旦那と鳶の関係は、両者がいなければ、旦那と鳶ではなくなってしまうのである。鳶も、旦那に利用されるだけでなく、総代に対して旦那としての振る舞い方を教えたりすることもあり、鳶も旦那としての総代を創出している。

従来の旦那と鳶を取り巻く研究では、祭礼の資金を提供する旦那と、それによって祭礼を施行する鳶という関係として考えられてきた。ところが、現在の熊谷うちわ祭の大総代の果たす役割をつぶさに見ていくと祭礼の統括をする役割以外に、観客の前に出てあいさつをしたり、年番送りで見栄をきったり、関係各所への交渉役としての役割が加わっているのである。

熊谷うちわ祭の総代が変容した原因として、観客の増加、祭礼の規模の拡大、モータリゼーションの影響などがあると考えられる。かつての町の対抗意識はいまだに強くあり、そこで参加町内の見栄のために鳶が利用されていた。これは、内山大介が提唱した商家における見栄文化で利用される鳶と重なっている。この見栄文化における鳶の利用が、祭礼に参加する町でも同様にみられることがわかった。

現在の総代は、伝統的な旦那衆だけではなく、祭礼において要職を務める人も含めて、総代と呼称されている。現在は、町内に在住しているハレにもケにも權威を及ぼす旦那が減少し、町外在住者やサラリーマンの総代が増加している。このサラリーマンの総代が増加している町は、比較的人口が少ない町内や新たに祭礼に参加した町内が多い。また、古くから祭礼に参加している町内は、旦那衆が町外に在住していても、祭礼期間中に呼び戻すことが可能である。

おわりに

熊谷うちわ祭では、過去に鳶と旦那である総代との濃厚な雇用関係が存在した。現在、かつての旦那衆と呼ばれた人びとは、在住していた町内を離れたたり、廃業したりして大きく減少している。また、かつて名誉職とされた祭典関係者もその敷居が非常に低くなった。その中で、鳶の役割だけは根強く存続している。その一つの要因として、熊谷うちわ祭の存在が大きいと考えられる。熊谷うちわ祭では鳶の活動に対して手間賃が支払われる仕組みがある。そして、祭礼に関する重要な神事や山車・屋台巡行は、鳶の存在が欠かせないものとなっている。しかし、鳶が活動するためには、手間賃が必要なため彼らを雇用する旦那が必要となる。

総代の方も、祭事関係者という名誉や他町内に対する意識の中で、かつて熊谷に存在した商家の大旦那を演じる、もしくは成ろうとする意識が窺える。彼らは、日常的に鳶との関わりが無くても、祭礼の中で鳶を雇用し、自分が商家の旦那であるという事をアピールしていることが指摘できる。つまり、旦那が旦那として祭礼で存在するためには鳶の存在が欠かせないものとなっている。同様に、鳶も祭礼の中で鳶として存在するためには、自分たちを雇用してくれる旦那がいなければ鳶として存在できない。その中で、総代と鳶の両者の思惑が重なり合い、祭礼内での旦那と鳶の関係を構築し

ているのである。

その後も、総代の役割が重層化、祭典の中心地である熊谷駅前周辺の人口減少していき、従来の関係が維持することが困難になっていった。平成十年代になり、公式スポンサー制度によって現在の旦那と総代になったと推測できる。

熊谷うちわ祭では、過去に鳶と旦那である総代との濃厚な雇用関係が存在した。現在、かつての旦那衆と呼ばれた人びとは、在住していた町内を離れたたり、廃業したりして大きく減少していることが指摘できる。また、かつて名誉職とされた祭典関係者もその敷居が非常に低くなったことも指摘できる。その一方で、鳶の役割だけは根強く存続している。その一つの要因として、熊谷うちわ祭の存在が大きいと考えられる。熊谷うちわ祭では、鳶の活動に対して手間賃が支払われる。そして、祭礼に関する重要な神事や山車・屋台巡行は、鳶の存在が欠かせないものとなっている。しかし、鳶が活動するためには、手間賃が必要なため彼らを雇用する旦那が必要となる。

総代の方も、祭事関係者という名誉や他町内に対する意識の中で、かつて熊谷に存在した大旦那を演じる、もしくは成ろうとする意識が窺える。そして、彼らが旦那である証明が鳶の存在である。彼らは、日常的に鳶との関わりが無くても、祭礼の中で鳶を雇用し、自分が商家の旦那であるという事をアピールしていることが指摘できる。つまり、旦那が旦那として祭礼で存在するためには鳶の存在が欠かせないものとなっている。同様に、鳶も祭礼の中で鳶として存在するためには、自分たちを雇用してくれる旦那がいなければ鳶として存在できない。その中で、総代と鳶の両者の思惑が重なり合い、祭礼内での旦那と鳶の関係を構築しているのである。

表1 年番町のスケジュールの変化

1975年度		年番町のスケジュールの変化		2017年度	
日程	行事名	日程	行事名	日程	行事名
7月22日	年番送り	7月22日	年番送り	7月22日	年番送り
8月下旬	年番引継会議	2月上旬	年番引継会議	10月29日	年番引き継ぎ会
4月上旬	大総代挨拶	3月吉日	就任挨拶まわり	2月18日	大総代就任報告祭
	大総代就任報告祭	3月中旬	大総代就任報告祭	2月22日	総代長懇談会
5月上旬	うちわ祭り研究会開催	4月上旬	組織打合せ	3月1日	就任挨拶まわり
	大総代挨拶まわり	4月中旬	総代長会議	3月2日	
5月中旬	役員決定	5月中旬	交通規制打合せ	3月17日	熊谷祇園会・筑波区囃子保存会 ・仲睦会・石原直毛連睦会懇談会
6月上旬	大祭予算審議会	5月下旬	うちわ研究会	4月8日	組織懇談会
6月中旬	交通打ち合わせ会	6月上旬	予算審議会	4月12日	総代長会議
	初祭会	6月下旬	初祭会	5月10日	交通規制打合せ
6月下旬	交通規制協力方への挨拶まわり	7月上旬	最終打合せ		踏切通過に関する打合せ
7月10日	最終打合せ	7月19日	遷置祭	5月24日	うちわ研究会
7月19日	遷置祭	7月20日			露天商打合せ会
7月20日		7月21日	祭典期間	6月7日	予算審議会
7月21日	祭典期間	7月22日			公式スポンサー会議
7月22日		7月25日	全町直会	6月13日	京都八坂神社公式参拝
7月26日	全町直会	7月28日	大山代参(1泊2日)	6月17日	初 集 会
7月28日	大山代参(1泊2日)	7月29日			最終打合せ
7月29日				6月28日	うちわ祭安全大会
					G I Sシステム説明会
				7月7日	うちわ祭大学
				7月18日	遷置祭
				7月20日	
				7月21日	祭典期間
				7月22日	
				7月26日	全町直会
				7月28日	大山代参(1泊2日)
				7月29日	

表2 旧5か町の人口推移

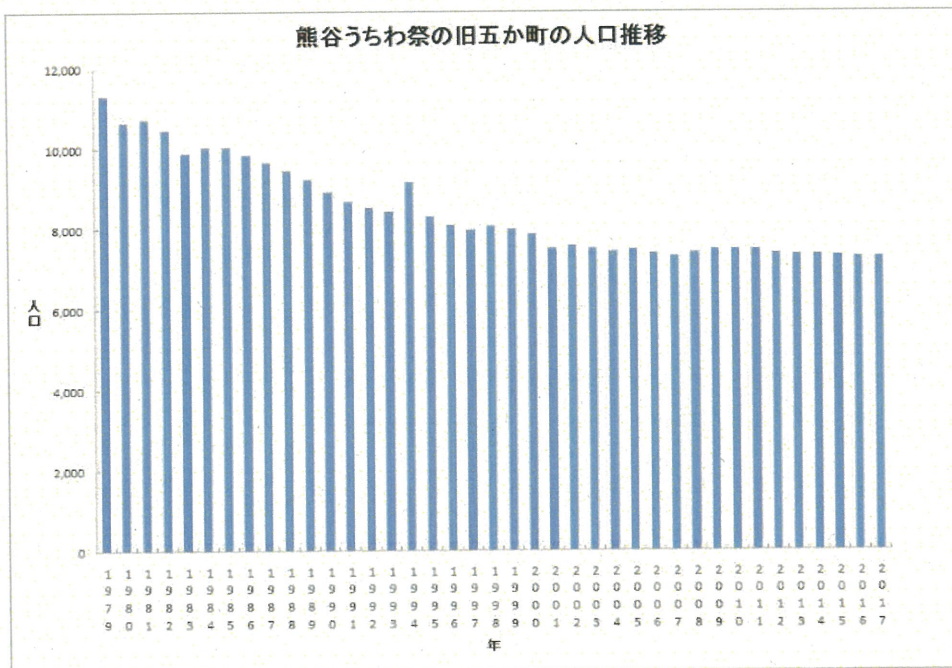


表3 熊谷うちわ祭の費用の比較

費用名	昭和49年度	平成29年度
神社費		
祭典費	177,860	1,018,600
負担金	10,000	100,000
調度調達費	114,000	17,000
宮繕費	40,700	309,000
研究費	15,000	20,000
守護費	30,000	60,000
奉納費	200,000	200,000
ノミ張費	27,300	76,000
行宮設営費	224,000	900,000
祇園柱費	30,940	54,000
本宮テント張費		26,000
助成金	2,801,000	10,058,700
渡還御費	127,780	503,200
遠御費	20,000	125,000
会議費	255,860	677,720
事務費	46,880	333,000
宣伝費	698,000	2,740,144
電気関係費	288,000	566,000
交通整理費	649,200	3,490,841
保険料	21,800	218,690
施設設備費	195,500	1,757,750
全芸能歓迎費	200,000	
救護所開設費		36,000
雑費	101,790	1,164,190
予備費	50,000	
合計	6,365,610	24,451,835

表4 各町祭典関係者の推移

年代		平成21年度	平成29年度
年番役員	総代	7	10
	馬	3	1
第壹本町区	総代	19	18
	馬	3	3
第貳本町区	総代	15	17
	馬	4	4
筑波区	総代	19	16
	馬	3	3
銀座区	総代	11	21
	馬	2	2
弥生町区	総代	12	11
	馬	3	3
荒川区	総代	17	13
	馬	2	2
伊勢町区	総代	7	20
	馬	2	2
鎌倉区	総代	14	15
	馬	2	2
仲町区	総代	10	14
	馬	2	2
櫻町区	総代	17	19
	馬	2	2
石原区	総代	12	10
	馬	4	2
本石区	総代	4	11
	馬	2	2
合計		198	225

第6章 若連の変容と拡大

はじめに

本章では、昭和30年代に結成された若者組織の祇園会の成立した過程に注目する。そこから、祭礼中で旦那衆と鳶とどのような関係性を把持しているのか考察した。

民俗学における若者組織の研究では、村落社会の自治や祭礼などにおける若者の組織の役割や存在意義について研究が行われてきた。町場などの都市部の若者の存在についてあまり注目されてこなかった。都市の若者の若者組織が注目されてこなかった要因として、都市部には町内に在住する町鳶などの職人らが町の自治や祭礼などに関わるためであると考えられる。

祭礼に関わる町鳶などの職人の研究においては、彼らを雇用し仕事を提供する旦那衆との関係が論じられてきた。その中で、関東圏の祭礼においては、町鳶が祭典期間に若者組織を束ねながら行事が執行されていることが報告されてきた。このように、従来の研究では都市祭礼の執行主体は旦那衆と鳶などの職人との関係を中心に論じられてきた。それらの研究においては、鳶と若者組織との関係性や鳶との役割分担の変化についてあまり注目されていなかった。そのため、本研究では都市祭礼における若者組織を中心に、祭礼に関わる旦那衆と鳶との関係性について注目する。そこから、祭礼全体の変化と若者組織の役割が変化する要因について考察する。祇園会が成立した過程とその他の役割との関係性の変遷について分析する。

塚原伸治は『老舗の伝統と〈近代〉一家業経営のエスノグラフィ―』の中で、祭礼研究だけではなく老舗の研究において町内における旦那と職人の関係について詳細な報告を行っている。従来は、旦那衆の経済力や権力によって祭礼が運営されてきたが、旦那衆の解体の後に佐原の大祭などで見られる非営利的な青年組織が誕生し、祭礼の直接の運営を行っているとしている〔塚原 2015 65〕。このように、町内の権力者である旦那衆が衰退していき、若者組織が結成されるようになったと指摘されている。

民俗学では、早期から若者組織の研究は盛んに行われていた。早期から村落社会における若者連が青年団に編成される過程について研究が行われてきた。松平誠は、秩父夜祭における若衆の役割があまり明確でないことを指摘している。祭礼での若衆の役割があまり明確でない理由について松平は、都市の生活においては村落社会で必要とされる若者の仕事は専門の職人が請け負うため、若者に対する生活における役割が格段に小さいとしている〔松平 1990 166〕。このように、旦那、鳶、若連の3者の存在と関連性についての研究が行われていなかった。

1 若連から祇園会への再構成

(1) 現在の祇園会

祇園会の人びと 現在、熊谷うちわ祭では、一部の町内を除く全ての町内に祇園会が存在する(写真1)。祇園会は、昭和34(1959)年に結成された全町共通の若者組織で、かつての若連が再構成された組織である。各町内の祇園会員は、その町内の

支部長によって統括されている。

熊谷祇園会会則によると、熊谷うちわ祭内での祇園会の役割は「熊谷祇園会会員は、還御祭奉仕を主たる任務とし、山車屋台の巡行およびお囃子の継承に寄与し大祭の発展を旨とする」[熊谷祇園会50周年記念誌編集委員会 2013 82]と表記されている。祇園会は熊谷うちわ祭りにおいて、最終日の還御祭の神輿還御、山車・屋台巡行、囃子の継承の役割を担っている。その他に、各町の鳶と協力して、山車・屋台ヒツカワタタキアイ（曳き合わせ叩き合い）を行う位置を交渉して決める役割がある。この交渉は、鳶が中心に祇園会員を率いて打ち合わせする町内、祇園会員だけで打ち合わせする町内、鳶だけで打ち合わせる町内があるなど各町内で異なる。祇園会は結成当初は、7名ほどであったが、年々数が増加していき、平成19（2007）年では492人となっている（表1参照）。

各町内の祇園会・若連の加入対象者は、自町内に在住、もしくは町内に実家や勤め先等がある人びとである。2000年代以降、自町内の在住者だけでは祭礼の運営が困難になり、町内に関わりの持つ人であるならば誰でも入会する事が出来るようになった。祭礼以外の役割として、熊谷市で行われる桜マラソンでのお囃子演奏や熊谷市内の小学校に出向きお囃子を体験させるお囃子体験なども行っている。

（2）旧若連の人びと

旧若連の活動 現在の祇園会は、祭礼の準備、山車・屋台行事や神輿還御などの役割がある。かつての若連は現在の若連とは大きく異なっていた。

祇園会が誕生する以前は、各町区で独自に若連を組織されていた。昭和40年代中盤までは、若連と書かれた絆纏と弓張提灯をもった若連の人びとが存在した。彼らは、ほとんどが鳶や大工などの職人の子どもを中心に組織されていた。彼らは、ほとんどが若連を抜けると鳶として祭礼に関わっていた。

若連は鳶と役割は重なるところがあるものの、手間賃などの扱いが異なっている。熊谷うちわ祭の祭典期間中、鳶には祭礼資金が支払われている。若連の方では手間賃が交付されない。昭和30年代出身の組頭によると「昔の若連は、組織としてまとまっておらず、鳶の補助として存在ししていた。それ以外の役割と言ったら、マンドを持って喧嘩するぐらいだった」と語っていた。

この組頭がいうマンドとは、一般的な祭礼で見られる長方形の灯籠である（写真2）。現在は、伊勢町区でしか見られないが、かつては若連などに寄付を払うとマンドに商店名などが表記されていた。また、このマンドを持って他町内に一種の殴り込みに行くマンド隊と呼ばれる人びともいた。若連として祭礼以外で、町内の自治や防火・防災活動に関与することはなかった。このように、かつての若連は祭典期間だけ集まる非組織的な存在で、鳶の下働きとして活動を行っていた。

旧若連の解体 昭和34（1959）年に祇園会が結成されたきっかけは、町内間で若者同士によるトラブルの頻発が原因であった。この年に、各町内の有志が集まって祇園会と結成した。祇園会を結成した当初の目的は、祭礼でのトラブルの防止であった。祇園会という名称は、当時の祇園会の関係者（70代）によると、京都八坂神社の祇園祭の“祇園”という名称を使用することによって、若者が逸脱した行動をと

らないようにという事で命名に至ったとされる。そして、若者が神事に参加すれば大人しくなるだろうという事で、今まで鳶の役割であった神輿の還御を任せるようにしたとされる。このように、祇園会の結成目的は祭礼内での若者の暴走を食い止めるであった。

(3) 祇園会成立後の動向と役割の拡大

3か町の脱退 祇園会結成後も、山車・屋台の上によじ登って花火を打ち上げたり、サングラスを着用して祭礼に参加したりするなどの問題行動が相次いだ。その中で、筑波町区、仲町区、石原区の参加町は町内でトラブルを起こし祇園会を脱退していった。その後、この3か町は独自で若連を組織している¹。祇園会と若連は、名称こそ違うものであるが、御輿還御以外の役割は、山車・屋台巡行の補助で共通している。

この3か町が祇園会に加入していない理由については、過去に祇園会に所属していたが町内での問題行動により解散させられたりするなど、各町によって事情が異なっている。現在、祇園会に加入していない町内では、筑波区の筑波区囃子保存会、仲町区仲睦会、石原区の若連睦会がある。これらはお囃子会の指導や山車・屋台巡行の際の補助など祇園会と同様の役割がある。彼らは、祇園会に加入していないため、最終日の神輿還御に参加することはできない。また、祇園会に所属していない筑波区の場合、筑波区囃子保存会は鳶の下部組織として活動を行っている。

祇園会が脱退させた理由に関しては、町内のまとめ役である総代が若者を統括することに失敗したことが挙げられる。ある町内の祭事関係者は、昔から鳶は町内から雇用されて祭礼をやっているため身勝手な行動をしないが、祇園会は帰属意識がほとんどなく自己中心で行動する、そのためトラブルが絶えないという。また、祇園会が暴走するのは、旦那である総代の手腕が問題であり、本当に旦那が権力を持っている町内の祇園会は大変大人しいと語っていた。

熊谷囃子の誕生 現在、熊谷うちわ祭のお囃子の演奏は、各町内の祇園会・各町若連、の指導のもとで、子どもたちのお囃子会による演奏が行われている。昭和30年代以前の熊谷うちわ祭では、近隣の深谷宿などから囃子方をお囃子を披露していた。この際に囃子方には、宿泊費や報酬等を渡していた。

昭和34(1954)年以降になると、囃子方を呼ばなくなる町内が出た。近隣地域からお囃子方を呼ばなくなった理由を町内の人びとに聞くと、ほとんどの町内では「暑すぎる」という理由で、囃子方から辞退の要請があがったことを語る。しかし、その実態は町内で囃子方を呼ぶ資金の減少が原因であった。そのため、祇園会の若者が囃子方の住む地域に赴き、お囃子を習った。その後、昭和30～40年代に各町内でお囃子会が結成されて、お囃子は町内の子どもたちが行うようになった。その後、町内の子どもたちでおはやし会が結成されてお囃子の演奏が行われるようになった。また、このお囃子は熊谷囃子として現在でも演奏が行われている。かつてのお囃子は比較的高齢な男性がお囃子を演奏しており、今のお囃子に比べると笛の音が聞こえるほど非常に静かであった。しかし、お囃子会結成後、各町内の祇園会がこぞって大音

¹筑波区は筑波区囃子保存会、仲町区は仲町区若連睦会、石原区は石原区若連睦会が祇園会に替わる活動をしている。

量のお囃子を演奏するようになった。お囃子が変化した要因は、他町内の祇園会会員を意識して演奏されるようになったことである。

祭礼の遠征と役割の拡大 また、昭和45（1970）年以降、熊谷うちわ祭は他の祭礼やイベントに頻繁に遠征するようになる（表2参照）。遠征する理由については、熊谷市と祭礼のPRのために遠征が行われてきた。この遠征の際に、鳶だけでは人員が足りないため、祇園会の若者が大きな役割を担っていた。それが徐々に、一目を意識してお囃子のツケ（小太鼓）をあえて大きく振って叩いたり、大音量でお囃子を演奏したりするなどの祭礼を演出する役割に変化した。このように、実務的な鳶、観客を意識する若者という構造となっている。

昭和50（1975）年、警察やJR東日本などでの山車・屋台巡行の許可が必要になっていった。その中で、祭礼のまとめ役として総代が、関係各所へ山車・屋台巡行への許可を取りに行く必要が出た。現在、熊谷うちわ祭では年番総代が全町の巡行図を集めて、警察へまとめて道路使用許可を取るというかたちがとられている。祭礼行事も規模が年々拡大していった。この祭礼の拡大によって、総代の役割が大きく変化したことと考えられる。また、熊谷うちわ祭では観客を意識して、年番町で新たな行事が追加されている。その中で、鳶だけでは祭礼が賄いきれないため、祇園会の役割が増加した。

令和元年の天皇陛下御即位奉祝巡行 令和元（2019）年5月1日に、熊谷駅周辺において天皇陛下即位式奉祝巡行と称して4基の山車・屋台巡行が開催された。この日に巡行した山車・屋台は石原区²・荒川区・銀座区・第弐本町区である。この巡行は、はじめに愛宕八坂神社で出発に際する神事が行われた。その後、山車・屋台と万灯神輿の巡行が令和元（2019）年の年番町である弥生町まで行われた。また、この行事は祇園会が令和元（2019）年で60周年の記念行事でもあった。

山車を曳き出した町内においては、祇園会の方から総代に提案を行った町内がほとんどであった³。また、山車を出せない町内の祇園会員は、万灯神輿を担いで参加していた。これらの町内の祇園会員は、他町内が巡行を行う事に関して山車・屋台の権限を握っている総代に相談したところ断られた町内の人びとがほとんどである⁴。町内によってばらつきはあるが、基本的に祭礼や山車・屋台の巡行の判断は総代に権利があり、鳶が山車を直接出すことになっている。そのため、祭礼以外で山車・屋台を出すには、総代と鳶の許可を得ないと巡行できないのである。また、この時に山車を出せた町内は、比較的の高校生まで囃子会を経験し、その後祇園会に入会して活動し、その後は祭事・総代を経験する年齢階梯的になっている町内である。今回、山車・屋台を出さなかった町内では、総代、鳶、祇園会・若連の階梯がなく、一種の階層的に祭礼の役割が決められている町内がほとんどである。

²石原区の場合、早朝にトラックの荷台にお囃子方を乗せた町内巡行と石原八坂神社での神事だけが行われた。

³石原区の場合、石原区総代会の呼び掛けに石原若連睦会が協賛するかたちで実現することになった。

⁴ある祇園会員の話では、「今回、山車や屋台を出せた町内は、祇園会が力を持っているところ。あっち（総代）の方の力が強かったら、意見も出すことも出来ないよ」と語っていた。

2 旦那と鳶と若者たち

町内との衝突 熊谷うちわ祭の直接的な実行は、熊谷市内にいる鳶によって行われている。その鳶が活動する際に、必ず手間賃が交付されて行われていた。しかし、かつて祭礼の中心地であった旧5か町の人口は年々減少しており、祭礼資金を集めることが年々困難になってきている。その中で、鳶に手間賃を与えて仕事をさせるのではなく、祇園会に仕事を任せるということが一部町内で行われるようになった。過去の熊谷うちわ祭では、鳶と旦那の関係が中心に祭礼が行われていた。現在、この鳶と旦那の関係は年々希薄化していき、徐々に祇園会・各町若連の若者の仕事が増加している傾向にある。

年々若連の役割が増加する中で、町内では若連に対する祭礼資金の提供がない。そのため、祇園会の内部では鳶と同等の役割を果たしてきているのに自分達はと不満の声もある。このように、旦那と鳶をめぐる関係について、反感を持つ若者が多く存在する。かつての熊谷うちわ祭では、旦那である総代と頭衆との関係が中心となって祭礼が行われていた。鳶の活動には、必ず手間賃が要求されるため、一部町内では祇園会に仕事に移行している。そして、祇園会に仕事を任せると手間賃を支払う必要がないため、年々役割が増大している。その中で、一部の町内では祇園会が鳶・総代に対して不満も上がっている。

年齢階梯制の導入 熊谷うちわ祭の中で、かつて若連や現在の祇園会などの若者は、祭礼の中に組み込まれているものの、祭礼組織のピラミッドでは部外者的な存在であった。一部の町内では、お囃子会から祇園会に進み、その後は総代になるという年齢階梯制的な組織の一部として組み込まれている。

現在、熊谷うちわ祭では徐々に祇園会が年齢階梯の一部として取り入れられているようになってきている。旦那衆の力が強い町内では、祇園会は解散させられて鳶の下部組織として各町若連として取り入れられている。かつての熊谷うちわ祭りは、総代になるのは、家柄や経済力などによって祭礼の立場が決められている一種の階級的な祭礼組織であった。しかし、熊谷駅周辺の人口流出により、祭礼資金を提供する大店が衰退し、上層の人びとに決定権のあった祭礼が崩れて誰でも総代になれるようになった。しかし、全町内一斉に旦那衆が衰退したのではなく、各町内でばらつきがあった⁵。

また鳶の場合では、現在でも組頭は実際の鳶職である。それ以外の人びとは、他の業種の人びとも多く、祭典期間中だけ鳶として活動している。

(2) 鳶と旦那との関係

旦那からの権威の譲渡 熊谷うちわ祭では、過去に鳶と旦那である総代との密接な雇用関係が存在した。現在、かつての旦那衆と呼ばれた人びとは、在住していた町内を離れたたり、廃業したりして大きく減少している。また、かつて名誉職とされた祭典

⁵ある町内の総代(30代)は「本当は、(私は)祇園会に入りたくて入りたくて仕方なかったんだ。けどうち(実家)は代々総代をやっているから、無理やり総代にされてさ、やるのは裃着るだけ。今の他町内の子(祇園会)たちみたいに、裃纏着て馬鹿やりたかったよ」と語っていた。

関係者もその敷居が非常に低くなった。しかし、鳶だけは根強く存続している。その要因として、熊谷うちわ祭の存在が大きいと考えられる。熊谷うちわ祭では鳶の活動に対して手間賃が支払われる仕組みがある。そして、祭礼に関する重要な神事や山車・屋台巡行は、鳶の存在が欠かせないものとなっている。しかし、鳶が活動するためには、手間賃が必要なため彼らを雇用する旦那が必要となる。かつては旦那のポケットマネーで支払われていた。現在の手間賃は、ほとんどが町内や公式スポンサーの資金が支給されている。

総代も同様に、祭事関係者という名誉や他町内に対する意識の中で、かつて熊谷に存在した商家の大旦那を演じる、もしくは成ろうとする意識が窺える。そして、彼らが旦那である証明が鳶の存在である。彼らは、日常的に鳶との関わりが無くても、祭礼の中で鳶を雇用し、自分が商家の旦那であるという事をアピールしていることが指摘できる。つまり、旦那が旦那として祭礼で存在するためには鳶の存在が欠かせないものとなっている。同様に、鳶も祭礼の中で鳶として存在するためには、自分たちを雇用してくれる旦那がいなければ鳶として存在できない。その中で、総代と鳶の両者の思惑が重なり合い、祭礼内での旦那と鳶の関係を構築しているのである⁶。総代の権力や町内の資金提供ができなくなる場合、鳶から祇園会・若連へと果たす役割が大きく変化している。祇園会に関する町内の対応は、全町区で大きく異なっている⁷。鳶と旦那との関係を見てみると、かつては旦那から祭礼の執行を鳶が任せられていた。そのため、旦那からその報酬が少ないなどのことがあると、神輿が家に投げ入れられるなどの報復が行われていた⁸。組頭は、旦那から祭礼を執行する権限を一任されており、山車・屋台の巡行に対しての決定権を握っていた。しかし、昭和45(1970)年に降に起きた熊谷市内の人口減少による大店の衰退と祭礼の遠征などで、祇園会をはじめとする若者組織の活動が増加していった。この若者組織は、町内の旦那衆から祭礼を執行する権限を委託されていないため、祭礼の運営に入り込むことができない。この若者組織の祭典における役割は町内で大きく異なっている。例えば、旦那と鳶の関係が厳格な駅前周辺の町内では、若者組織が祭典の運営に口を出すことが憚られている傾向にある。年番町区外や祭典費用が減少している町内では、鳶に変わって若者組織が祭礼に果たす役割が増大している。

現在、熊谷うちわ祭の祇園会が各町内で活動が大きく異なっていることに関しては、各町内での旦那衆と鳶との力関係と経済的な格差によっている。

3 熊谷うちわ祭の若者組織

本研究では、熊谷うちわ祭の祇園会を事例に、旦那衆や鳶の関係性と祭礼の変化か

⁶旦那が旦那として祭礼で存在するためには鳶の存在が欠かせないものとなっている。同様に、鳶も祭礼の中で鳶として存在するためには、自分たちを雇用してくれる旦那がいなければ鳶として存在できない。その中で、総代と鳶の両者の思惑が重なり合い、祭礼内での旦那と鳶の関係を構築しているのである。

⁷筑波区の場合、筑波区囃子保存会は鳶の下部組織として、活動が行われている。

⁸明治43年(1910)7月26日の東京版『朝日新聞』「熊谷の神輿騒ぎ」によると神輿が商店に衝突し、ガラス戸が破損する事故を報じている。記事によると、最終日の御輿渡御は若い衆が行っていたとある。神輿を担いでいた若者、同行していた祭事掛が負傷したとある。

ら旧若連から祇園会へ再構成される過程について分析を行った。旧若連から祇園会に再構成される要因については、若連の制御が大きな原因であったと考えられる。かつての若連は、祭礼の執行などに支障が出るトラブル等を頻繁に起こしていた。その中で、スムーズな祭礼執行が行われるように祇園会が結成された。

昭和30年代から祭礼組織が観客を意識し始める中で、若連を制御するために神輿還御などを任せるようになった。また、外部からきていたお囃子方が来なくなり、各町内でお囃子方が組織されて、若連の役割が増加していった。その他に、旦那と鳶の関係が徐々に解体していき、無償で準備等をしてくれる祇園会の役割が増加してきたことが原因で、現在の祇園会が成立した。

熊谷うちわ祭りは、先に述べた通りに旦那と鳶の相互関係によって祭礼組織が成立している。その中で、祇園会をはじめとする若者は、この両者に属さない存在である。かつての祭礼組織では、若連は祭礼に参加していたが直接祭礼の運営に関わることはなかった。しかし、現在の祇園会は神輿還御だけではなく、お囃子の指導や山車・屋台の巡行に関わるなどその役割が年々増加している傾向にある。鳶だけに任せて行動させるには経済的にも人力的に大きく不足が存在するため、祇園会がその分を補完する形に変化してきた。その中で、鳶は祭礼の活動に手間賃が出されているで、祇園会は完全に無償で活動をしていることに関して、不満を抱いている人びとも存在する。現在、熊谷鳶の最年少は20代後半の人であり、今後鳶に若手が入ってこなければ鳶から祇園会へと祭礼の実行部隊が変化することも考えられる。

旧若連から祇園会に再構成される要因については、若連の制御が大きな原因であったと考えられる。かつての若連は、祭礼の執行などに支障が出るトラブル等を頻繁に起こしていた。その中で、スムーズな祭礼執行が行われるように祇園会が結成された。昭和30年代から観客を祭礼組織が意識し始める、その中で若連を制御するために神輿還御などを任せるようになった。また、外部からきていたお囃子方が来なくなり、各町内でお囃子方が組織されていき若連の役割が増加していった。その他に、旦那と鳶の関係が徐々に解体が始まり、無償で準備等をしてくれる祇園会の役割が増加していったことが原因で、現在の祇園会が成立した。

おわりに

熊谷うちわ祭りは、先の述べた通りに旦那と鳶の相互関係によって祭礼組織が成立している。その中で、祇園会をはじめとする若者は、この両者に属さない存在である。かつての祭礼組織では、若連は祭礼に参加していたが直接祭礼の運営に関わることはなかった。しかし、現在の祇園会は神輿還御だけではなく、お囃子の指導や山車・屋台の巡行に関わるなどその役割が年々増加している傾向にある。一方で、旦那と鳶から見ると祭礼の運営に関わることを望んではいない。それどころか、祇園会を毛嫌いしている総代も存在する。しかし、鳶だけで行動させるには経済的にも人力的に大きく不足が存在するため、祇園会がその分を補完する形に変化していった。そのため、鳶は祭礼の活動に手間賃が出されている一方で、祇園会は完全に無償で活動をしていないことに関して不満を抱いている人びとも存在する。また、先に述べた通りに、寄付金を

めぐる鳶と祇園会が激化している傾向にある。現在、熊谷鳶の最年少は20代後半の人であり、今後若手が入ってこなければ鳶から祇園会へと祭礼の実行部隊が変化することも考えられる。

一方で、総代の権力や町内の資金提供ができなくなる場合、鳶から祇園会・若連の役割が大きくなっている。鳶と旦那との関係を見てみると、かつては旦那から祭礼の執行を鳶が任せられていた。また、旦那からその報酬が少ないなどのことがあると、神輿が家に投げ入れられるなどの報復が行われていた。組頭は、旦那から祭礼を執行する権限を一任されており、山車・屋台の巡行に対しての決定権を握っていた。しかし、昭和45年以降に起きた熊谷市内の人口減少による大店の衰退と祭礼の遠征などで、祇園会をはじめとする若連組織の活動が増加していった。一方、この若連組織は町内の旦那衆から祭礼を執行する権限を委託されていないため、祭礼の運営に入り込むことができない。この若連組織の祭典における役割は町内で大きく異なっている。例えば、旦那と鳶の関係が厳格な駅前周辺の町内では、若連組織が祭典の運営に口を出すことが憚られている傾向にある。また、年番町区外や祭典費用に限界がある町内では、鳶と同等に若連組織に祭礼による役割が多い重宝され祭典の運営に関わっている。

現在、熊谷うちわ祭の祇園会が各町内で活動が大きく異なっていることに関しては、各町内による旦那衆と鳶の力関係と経済的な格差によって大きく異なっている。依然、熊谷うちわ祭では各町内の祭典組織を支える背景や加入する人々によって大きくことなっている。

表1 祇園会の人数の変遷

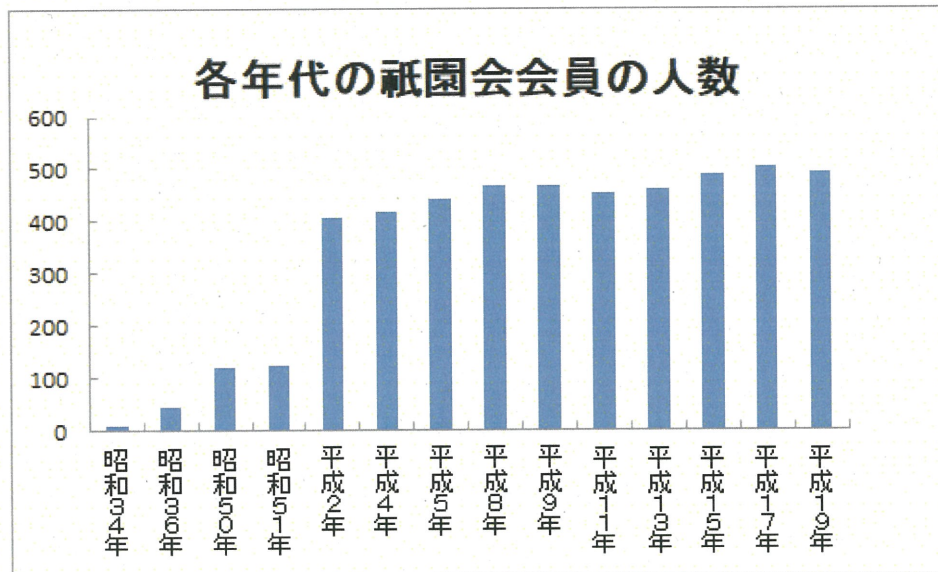


表2 熊谷うちわ祭の遠征の年表

年号(西暦)	内容
昭和43年(1968) 3月	旧東京12チャンネル「街ぐるみワイドショー」出演
昭和45年(1970) 8月	万国博覧会 出場
昭和47年(1972) 2月	NHKテレビ「ふるさとの歌まつり」出演
昭和48年(1973) 0月	東京都 銀座まつり「音と光のパレード」出場
昭和51年(1976) 8月	明治神宮外苑「日本の祭」
昭和55年(1980) 8月	第1回まつり・イン・ハワイ
昭和57年(1982) 6月	上越新幹線開業 試験電車を纏と木遣りで歓迎
昭和63年(1988) 4月	熊谷市 さいたま博覧会 出場
平成2年(1990) 4月	大阪府 花の万国博覧会 出場
平成6年(1994) 7月	京都平安建都1200年記念行事全国山笠巡行



写真1 屋台を曳く弥生町の祇園会



写真2 熊谷うちわ祭のマンド（昭和30年代）

第7章 関西圏の祭礼組織の内部構造—京都祇園祭船鉾町を事例に—

はじめに

前章までは、熊谷うちわ祭りの鳶、旦那、若連の関係性について論じてきた。熊谷うちわ祭の場合、1970年代以前は旦那衆が鳶を雇用し、祭礼を執行していた。その後、2000年代にかけて町内から総代が減少し、スポンサーの資金などが祭礼の資本となっていった。また、地域から旦那衆が移転、消失した町内では総代の創造が行われるようになった。その一方で、若連を活用して、祭典資金の半減を計る町内も存在する。この旦那衆、鳶、若連のもとで祭礼が執行される構造は関東圏の祭礼が中心である。本章では、京都祇園祭の船鉾町を事例に関西圏の祭礼がおこなわれているのか考察を行う。

本章は令和元（2019）年に行った京都祇園祭の参与観察の記録をもとに、船鉾町の大工方の祭礼期間中の活動について報告する。そこから、現在の京都祇園祭における山鉾の組み立てを中心に行う大工方と町内との関係について考察する。

これまで、山鉾を組み立てる役割である作事三方については様々な報告書や論文等で報告が行われた。米山俊直は、京都祇園祭の山鉾は、作事三方と呼称される町内で雇われた職人などの人々が中心となって組み立てられているとした〔米山 1974 81～97〕。その後、轟博志が詳細に作事三方の研究を行った。轟は、京都祇園祭の全32基の山鉾の作事三方の出身地を明らかにした〔轟 1997 101〕。その中で、山鉾巡行に関わる人びとは、近郊農村の関係で外部から大量の人的援助を得て初めて山鉾巡行が可能になるとした〔轟 1997 105〕。また、樋口博美が、作事三方が大きく変化したことを指摘している。樋口によると、作事三方は「世襲」で手伝い方と大工方、車方の作事三方にそれぞれ鉾建ての作業を依頼するのが通例だったが、最近ではこれを一つにまとめる（一人の親方に全てを任せる）、工務店に一括して頼む町が増えていると述べた〔樋口 2012 124〕。さらに樋口は、山鉾巡行の企画とその運営の役割を担うもの（山鉾保存会、町内在企業、通り町衆、山鉾連合会）と、技能によって実動する役割を担うもの（手伝い方、大工方、車方の作事三方）の二つの集団で祇園祭が行われていると論じた。これらは、町会所から離れたところに生活基盤のある祭礼時期に限定的な関係であり、祭礼にかける時間も少ないという特徴で括られる「技能・実動をめぐる祭縁」〔樋口 2012 113〕とした。佐藤弘隆は、船鉾町の作事三方の変遷について研究した。佐藤は、作事三方は1980年代初め頃就業の多様化にともない、一族で大工を専業とする者が減っていき、職人の代わりに手伝いと呼ばれるアルバイトを中心に人員確保が行うようになることを述べた。そのことにより、大工方の構成員の職業は多様化したことを指摘した〔佐藤 2016 99〕。

これらの研究では、1980年代以前の祇園祭ではほとんどが大工等を専業とする職人が中心になっているとされる。一方で、職人と職人ではないアルバイトとの関係性や彼らがどうやって、山鉾を組み立てるのかあまり注目されていなかった。

そこで、私は令和元（2019）年7月12日～18日に、大工方のアルバイトと

して実際に京都祇園祭の船鉾町の大工方に入り参与観察を行った。その事例から、現在の船鉾町で活動する大工方の行動に注目する。そこから、どのように祭礼が実行されているのか考察する。

1 京都祇園祭と船鉾町

(1) 京都八坂神社の祇園祭

京都祇園祭の由来 京都八坂神社の祇園祭は、毎年7月1日～30日に行われる京都市東山区の八坂神社の祭礼である(表1参照)。明治時代以前では、祇園御霊会、御霊会と呼称されていた。祇園祭の行事は、八坂神社が執り行うものと、山鉾町が行うものに分けられている。その山鉾町が行う山鉾行事が重要無形民俗文化財の指定となっている。また山鉾の行事に関しては、前祭と後祭の2部に分けられている。前祭は、7月14日～17日まで行われる。後祭は、7月21日～22日まで行われる。各山鉾町では、前夜祭として宵山、山鉾が四条通りを巡行する山鉾巡行が行われる。八坂神社側の行事では神輿洗、神輿渡御がある。また、7月24日には、花傘連合会が行う花傘巡行も八坂神社の行事である。また宵山、宵々山、宵々々山では旧家や老舗が屏風などの宝物を披露していたそのため、屏風祭とも呼称されている。

現在、巡行している山鉾は前祭りでは、舁山、鉾、曳山、船鉾、傘鉾の5種類の山鉾が登場する。舁山は、布で覆った籠を伏せて置き真松という松を立てて、そこに御神体として人形などを乗せて人が舁いて巡行するものである。現在小さな車輪が付いている。鉾は、真木と呼称される柱を中心に、稚児や囃子方を乗せる車輪のあるものである。曳山は鉾同様に車輪を付け綱で引いて動かし、舁山と同じく真松を立てている山である。船鉾は、真木を立てない船の形の鉾である。傘鉾は、踊りの列や囃子方とともに、大きな傘のような鉾と一緒に巡行する。前祭りの舁山は保昌山、孟宗山、占出山、山伏山、霰天神山、郭巨山、伯牙山、芦刈山、油天神山、木賊山、太子山、白楽天山、蟻螂山、鉾は長刀鉾、函谷鉾、鶏鉾、菊水鉾、月鉾、放下鉾、曳山は岩戸山、笠鉾は綾傘鉾、四条傘鉾、船鉾は船鉾である。後祭りでは、舁山は橋弁慶山、鯉山、浄妙山、黒主山、役行者山、鈴鹿山、八幡山、曳山は北観音山、南観音山、鷹山、船鉾は大船鉾である。

祇園会のはじまり 祇園祭の起こりは、貞観5(863)年の疫病の流行により、神泉苑で疫神や死者の怨霊などを鎮めなだめる御霊会であるとされている。その後も、貞観6(864)年から富士山の噴火、貞観11(869)年には貞観地震などが起こる。その中で、卜部日良麿が66本の矛を立て神輿3基を送り、牛頭天王を祀る御霊会を執行したことが、現在の祇園祭の始まりとされている。貞観18(876)年、播磨国広峯から勧請された牛頭天王が現在の八坂神社の場所へ祀られ、感心院となる。感心院は比叡山延暦寺の末寺となる。

山鉾の誕生 祇園祭で山鉾巡行の記述は、鎌倉時代末期の「花園天皇宸記」の元亨元(1321)年の7月24日の記述である。この記述には、鉾衆の周辺で鼓打らが風流の舞曲を演じたとある。その後、南北朝時代では町衆が競って風流拍子物を繰り出したとされる。また、室町将軍家が調進した久世舞車や西陣の大舎人座の鷺舞など

の芸能が行われていたとされている。

豊臣政権下では、四条室町の町衆の自治組織である寄町が成立すると、各町に趣向を凝らした山鉾を製作し巡行するようになった。寄り町とは、山鉾巡行に際し、一定の米や銭を納めて経費の分担を負い（地の口米という）、祭礼に参加したり、その他の初役をつとめたりする氏子の町をいうのである〔川島 2010 22〕。それが、今日まで行われる山鉾巡行のはじまりとされる。その後、山鉾の巡行は応仁の乱により中断する。明応9（1500）年に祇園祭の復興のため、奉行衆の松田豊前守頼亮が過去の山鉾について古老に聞き取りを行った。

祇園会の発展 宝永5（1708）年の宝永の大火で山鉾が消失するがその後に復活する。天明8（1788）年の天明の大火で再び多くの山鉾が焼失した。その後の山鉾復興は、山鉾の大型化、部品・懸装品の華美化が進み、曳山の多くも仮屋根から、鉾と変わらない千鳥破風の様式となった。元治元（1864）年のどんどん焼により、長刀鉾、函谷鉾、月鉾、岩戸山、霰天神山、伯牙山、保昌山以外の山鉾が焼失する。明治維新以後、山鉾巡行のかなめであった寄町制度が廃止される。明治8（1875）年、神輿渡御や山鉾巡行の経費を援助する協賛組織、清々講社が結成され、以後祇園祭の財政面を支えていく〔川島 2010 118〕。明治19（1886）年、明治20（1887）年、明治28年（1895）年にコレラのため、祇園祭が延期される。

戦後の文化財化 昭和22（1947）年、長刀鉾、月鉾、第二次大戦以降初の巡行が行われた。昭和23（1948）年、北観音山と船鉾が戦後初めて建てられる。昭和24（1949）年、復活した山鉾が9基となる。同年、籤取り式が再開される。昭和25（1950）年、復活した山鉾が16基となる。昭和27（1952）年、当時の全山鉾の巡行が復活する。

昭和36（1962）年5月23日、山鉾29基が重要有形民俗文化財となる。昭和40（1966）年、後祭と前祭が統一される。昭和54（1979）年2月3日に「京都祇園祭の山鉾行事」として、重要無形民俗文化財となる。平成21（2009）年9月30日、国連教育科学文化機関政府間委員会で、「京都祇園祭の山鉾行事」がユネスコ無形文化遺産に登録となる。平成26（2014）年7月24日に後祭が復活され、大船鉾も復興となる。平成30（2018）年、記録的な猛暑のため、花傘巡行が中止される。

（2）船鉾町の歴史と船鉾

船鉾町の歴史 船鉾町は、新町通を挟む両側町である。江戸中期以降は北袋屋町・南袋や町の2町に分立していたとされる。一方で、江戸初期には現町名に近い名称が使用されたという¹。その後、明治2（1869）年の町組改正から、下京九番組となる。明治5（1872）年では、第11区と改称される。明治12（1879）年には下京区袋屋町となる。明治22（1889）年に京都市下京区袋屋町となり、後に下京区船鉾町に改称し現在に至る。明治25（1892）年に、第11学区に編成される。

¹当町蔵の文書箱には「元和二年正月吉日、七日船鉾町」と墨書があるため、船鉾町という町名は既に使われていた可能性がある。

船鉾の由来 船鉾は、祇園祭で7月17日に行われる前祭の山鉾巡行の最後を飾る山鉾である(写真1)。鉾全体を船型で、舳先には金色の鶴、艫には黒漆塗螺鈿の飛龍文様の舵がある。船端には、朱漆塗の高欄があり、唐破風入母屋造りの屋根には紅白の長旒・吹流しが付けられている。船鉾には、御神体と呼称される神功皇后と磯良大神、住吉大神、鹿島大神の3神像の4体の人形が安置される。神功皇后は、神面を装着し緋緘の軍装をしている。神功皇后の神面は安産に奇瑞があるとされ、度々宮中から参内がある²。また、神功皇后の腹帯が安産のお守りとして、船鉾町の会所で販売されている。

船鉾が文献に登場するのは、嘉吉元(1441)年である。これは、八坂神社所蔵の「祇園社記第十五」に7日の前祭に「しんくくわうくうの舟」と表記されている〔佐藤 矢野 2018 9〕。明応5(1496)年、応仁の乱後に船鉾は再興される。十六世紀(1700年代)の洛中洛外図屏風(上杉本)には、帆柱が立った船鉾が描かれている。宝暦7(1757)年の船鉾の帆柱は廃止された。天明8(1788)年に、1月30日天明の大火が起こり、船鉾は巡行に不参加となる。その後、寛政四(1792)年に船鉾が復興も、元治元(1864)年の禁門の変にて車4枚が焼失したため、翌年から再び巡行に不参加となる。

明治22(1889)年に、南観音山の車を借りて船鉾が巡行に参加する。明治25(1892)年、車が新調された。昭和18年(1943)年、山鉾建てが中止される。その後、昭和23(1948)年、北観音山と船鉾を17日に四条寺町まで往復巡行される。その巡行では、船鉾は進駐軍に遠慮して人形を載せず25日まで会所に置いたという。昭和25年(1950)、前祭は長刀鉾、山伏山、白楽天山、函谷鉾、霰天神山、郭巨山、月鉾、占出山、船鉾が四条寺町迄往復曳行された。昭和31年(1956)、前祭巡行を四条寺町南下、松原通西進が四条寺町北上、御池通西進に変更される。昭和36(1961)年、前祭巡行を四条寺町北上から河原町北上に変更された。昭和37(1962)年、阪急地下鉄工事の為前後祭共巡行中止となる。

昭和41(1966)年より、後祭の山鉾も17日に合同巡行に行われる。昭和46(1971)年に船鉾屋根が修理される。平成19(2007)年には、車輪2車新調される。平成20(2008)年、車輪2車新調、車軸2本新調、下水引東側2枚修理が行われる。平成21年(2009)では、下水引西側2枚修理される。平成22(2010)年には、下水引正面修理、水引紋幕新調、水引紋幕吊り紐、曳綱が新調される。平成23(2011)年、神功皇后衣裳一式新調、土蔵改修される。平成24(2012)年に土蔵改修完成した。平成25(2013)年、二番水引が新調される。平成26(2014)年に、二番水引新調がされる。同年、49年ぶりに京都祇園祭で、前祭、後祭と分けられている。

(3) 現在の祭典組織

公益財団法人祇園祭船鉾保存会 現在、船鉾は公益財団法人祇園祭船鉾保存会によ

²宝暦8(1758)年に、恭礼門院藤原富子が菊のご紋章をあじらった黒漆塗りの文庫を下賜した。弘化3(1846)年、前新典侍局が参内した。嘉永5(1852)年、権典侍局が参内した。昭和8(1933)年の上皇陛下御誕生時には、八坂神社にてご神面を奉じられた。

って運営されている。船鉾保存会は、町内居住者と事業者で組織される。『船鉾 財団法人設立五十周年記念誌』によると、平成29（2017）年現在の役員会は、3役と呼ばれる理事長と神事役、会計の常任理事3名を中心に、理事4名と評議員6名、監事2名、参与4名で構成される〔佐藤 矢野 2018 13〕。

その他にも、祭り期間の実働を担う部門して行事人形殿という役割がある。江戸時代から船鉾には、祭典期間の行事の段取りや会計を担う行事役とご神体人形のお世話を担う人形殿という2つの実働的な役割があり、毎年、町内で当番がまわされていた。平成25（2013）年から、これらは一つの役割として再編され、比較的若手の役員の中から毎年5名程が行事人形殿（祭実行委員）として選出される。現在、行事人形殿は理事から2名、評議員・監事・参与から各1名ずつ選ばれている。

囃子方 囃子方は鉾の上で祇園囃子を鉦や笛（能管）、太鼓で演奏する技能集団である。参加条件に地域的な制限はないものの、基本的に囃子方、保存会の構成員からの紹介と、小学校低学年からの入会が必要である。元々、祇園祭の囃子方は鉦方と太鼓方だけを指し、笛方は独立した別の集団として扱われてきたという。このように囃子方は伝統的に町内外から人員を確保してきた。近年に入会した囃子方には、町内出身の子供たちが増加しているという。

作事三方 作事三方とは、手伝い方と車方、大工方の総称で、彼らは各保存会や町内から雇われた外部の技能集団である。現在も作事三方との契約は保存会と各団体の棟梁との間で交わされており、人員の確保や報酬の分配はそれぞれの棟梁の裁量に任されている〔佐藤 矢野 2018 14〕。

手伝い方は、鉾の下層の構造部分である鉾枠を組み立てる。巡行時には、棟梁が鉾の進行や停止の指揮を取り、2人の若手が音頭取りとして鉾の前方に乗る。音頭取りは「ヨーイ、ヨーイ、エンヤラヤー」の掛け声と扇子を差し出す動きで車方や曳き手に合図を出し、「ヨーヨー、イトセ、ヨーイトセイ」の掛け声で辻回しの合図を出す。

車方は、船鉾の車輪の装着を行う役割である。巡行時では、進行方向の舵取りを担っており、カブラデコを車輪に噛ませて進行方向の調整を行ったり、カケヤでブレーキを掛けたりする。辻回しの際は車輪の下にササラという竹や檜の棒を敷き、車輪を滑りやすくしている。棟梁はサエトリといって車方全体の指揮を執る。

大工方は鉾上層部分の屋形の組み立てや装飾品の取り付けを担い、時には部材の修理を行う。巡行時には、大工方の2名が櫓の檣に乗り込み、雨や破損など不測の事態に備えている。船鉾の大工方の人員確保は、専業の大工である親方に任されている。

曳き手・ボランティア・アルバイト 京都・祇園祭ボランティア21が組織され、現在まで曳き手・昇き手の募集を担い、山鉾連合会を通して各山鉾にボランティアが派遣されている。現在の船鉾では、ボランティア21から約20人と立命館大学の学生ボランティアから約10人が集められている。また、巡行の旗持ちや大八車は京都大学のライダー部からアルバイトが集められている。巡行以外にも、立命館大学の学生は粽づくりのボランティア、立命館大学と京都大学の両学生が鉾の見張りや拝観補助等のアルバイトをしている。

2 大工方の活動

(1) 船鉾町の行事と作業

大工方の人びと 船鉾町の大工方は、令和元（2019）年では15名が参加していた（写真2）。彼らをまとめるのは棟梁と呼ばれる宮大工の親方である。船鉾の大工方には、本職の宮大工が3名いる。その棟梁と、宮大工の指示のもと船鉾の組み立てが行われる。また、それ以外の人びとは、アルバイトとして雇用されている人びとである。彼らは、生花店であったり、高校教師であったりするなどの大工とはほとんど関係ない業種の人びとである。また、彼らは伏見区の他、兵庫県であったりするなど県外の参加者も多い。

船鉾の鉾立て 船鉾町の行事は、7月3日～24日まで行われている（表2参照）。7月3日に神面改めの儀式が船鉾町会所で行われる。この内、船鉾の組み立ては11日より開始される。船鉾の組み立ては、船鉾町の会所の前で行われる。

また、船鉾の組み立ては完全な分業制で行われている（表3参照）。はじめに手伝い方が船鉾の装飾品などが保管されている蔵を開く。そこから装飾品の入った箱、船鉾の部品などを取り出す。その後で、船鉾の鉾枠の組み立てが行われる。船鉾の鉾枠はほとんどが藁縄と紐によって組み立てられている。その後、大工方が2日かけて組み立てが行われる。13日に船鉾が完成すると、車方が車輪を装着して曳初めが行われる。この曳初めでは、四条通の手前まで船鉾が曳き出される。その際、手伝い方が音頭取りを行い、大工方3名が船鉾の上に乗る、車型が巡行の舵取りを行う。曳初めの曳き手は、近隣住民たちによって行われる。14日には、船鉾に乗せられる御神体の人形の飾りつけを船鉾町の人々が行う。御神体の人形は17日までの船鉾の会所によって飾られている。

17日の山鉾巡行の際は、町内の人びとの手によって船鉾に人形が乗せられる。御神体の人形が乗った後、複数の囃子方と、大工方3名が乗り込む。その他の大工方は、船鉾の後ろに待機している。船鉾の巡行は、曳初め同様に車方の舵取りのもと、笠をかぶった曳き手たちによって行われる。

山鉾巡行の後、人形は町内、車輪を車方、装飾品を大工方、鉾枠などを手伝い方が片付けを行う。船鉾は、2日間に渡って解体される。このように、作事三方で分業しながら山鉾の組み立てが行われている。

(2) 大工方の作業

船鉾とヤタイの組み立て 大工方の船鉾の作業は、7月12日より行われる。前日の11日に手伝い方による鉾枠の組み立てが行われていた。その鉾枠に装飾品等を施すのが大工方の主な役割である。大工方は、12日の午前中に船鉾町の会所の二階に集合する。そこで、大工方をまとめる棟梁から、名簿の氏名と住所に間違いがないか確認が行われる。その後、保険に関する書類に署名をする。それから、しばらくして作業が行われる。

初めに行われたのは、船鉾の装飾品などが入った箱の運搬である³。箱が運ばれると、書かれた札を見て、外枠や彫刻などに分けられていた。また、破損している彫刻があ

³船鉾の箱は、船鉾町会所の奥にある蔵に収蔵されている。

った際は、大工方の棟梁が応急処置を行っていた。装飾品や木枠などは、二階に広げられて、それぞれ組み立てる部分にて分けられていた（写真3）。箱の中身の確認が終わると、今度は、大工方は二手に分けられる。1つは、船舳に繋がる棧橋の組み立てである。棧橋は、会所の2階から設営される。この棧敷は、電動工具やボルトなどで、組み立てが行われる。また、船舳に通じる階段部分は、上下に調節できるようにロープによって固定されている。もう1つは、日和神楽の際に提灯や鉦を吊るす移動型のヤタイの組み立てである。ヤタイの骨組みは、手伝い方が前日に会所の近くの駐車場に運びだしていた。ヤタイの組み立ては、6名ほどで行われていた。その後、ヤタイの組み立てが終わると、手の空いた大工方は棧敷の設営を手伝った。その後、棧橋の設営が終わると雨除けの障子が付けられる。この障子の部分は、白いアクリル板となっていた。雨除けの障子の設営が終わると、大工方は全員会所の2階に集合し、棟梁が制作してきた屋根をとめる金具について話し合いが行われた。この話し合いは、昼休みまで行われた⁴。

屋根の組み立て 昼食後、最初に船舳の上部である屋根部分の組み立てから行われた⁵。初めに、屋根を支える支柱の取り付けが行われた。部品の組み立てでは、そのまま組み立てるもの、タコ糸の付いた木杭で固定するもの、綱で固定するものの3種類の方法で組み立てが行われている。支柱が完成すると、次に屋根の取り付けが行われる。屋根の取り付けには、ある程度積んだ3名ほどが、屋根の上に乗って屋根の取り付けを行っていた。屋根の取り付けは、装着されている金具によって固定されていた。また、効率よく作業するため大工方はほとんどが裸足で作業を行っていた⁶。屋根の組み立ての最中日が照っていたため、屋根に乗る人びとは顔をしかめながら屋根の組み立てを行っていた。屋根の組み立てが終わると、雨除けの為の障子が屋根の所と船首に付けられる。雨除けの障子は、棧橋に付けられているものと同じアクリル製のものであった。雨除けの障子の装着が終わると、次に船尾にあたる艫櫓の組み立てが行われた。この艫櫓は、3つの部品に分かれており、木杭とロープで固定されていた。船舳ではロープをきつく結び鉦が組み立てられていた（写真4）。

その後、会所2階で天井からつり下げられた下水引と二番水引を合わせる作業が行われた。作業の最中、棟梁から「例年だと、12日は屋根などの組み立て、13日は布や細かい装飾の組み立てを行う」と教えられた。また、ほとんどが本職の大工ではないため、棟梁などから部品や部位の組み立てを指示された際、それが何を指しているのか分からず何度も確認したり、やり直しさせられたりする場面が度々あった。

棟梁からは、「昔は、宮大工が集まっていたが今は大工以外の人も入れるので、意思疎通をするのが難しい」と語っていた。12日は、17時半頃まで作業が行われた。大工方が作業している間も、手伝い方が船舳の組み立てを同時に行っていた。しかし、

⁴ ある大工方の方からは、「毎回、昼近くなると会議が始まるんだ」と笑っていた。この話し合いは、昼食の休憩までの時間稼ぎだという。

⁵大工方の方は、昼食は各人で近所の弁当屋や飲食店で昼食をとっていた。その後、13時頃に全員が2階に集合し、13時30分頃より作業が開始された。

⁶私ははじめ、靴下を履いて作業していた。しかし、船舳の上は非常に滑りやすい。そのため、私も滑りそうだったので、靴下を脱いで作業を行った。

両者ともにほとんど話すことはなく行われていた。

幕と彫刻の装着と曳初め 13日は、大工方は前日と同様に8時に会所2階に集合となった。この日の作業は、布や細部の彫刻の装着であった。初めに、彫刻の装着が行われた。彫刻も、他の部位と同様に綱や木杭などによって装着された。その後、雨が降ってもいいように透明なビニールのカップを上からかぶせた。幕が付け終わると、欄干がはめ込まれた。その後、船酒の鷓などの彫刻が大工方によって次々付けられていた。最後に、飛龍の螺鈿が施された舵を付けて14時頃に船鉾は完成した。

その後、曳初めが行われる。船鉾に車輪を付けるのは車方の仕事である。その間、大工方は二階の会所の片付けと山鉾拝観の用意を行っていた。その後、船鉾に車輪が装着されると、曳初めが行われる。船鉾の曳初めでは、囃子方と共に大工方3名が同乗する。この大工方は、巡行中に彫刻が落ちてこない事の点検などが目的である。大工方は、船首に1名と船尾に2名が乗車する⁷。彼らは、出発から帰着まで船鉾の上で作業を行っている。その曳初めの片付けは、17時半頃まで行われた。片付けの後、粽と山鉾屋台巡行の当日に着用する手ぬぐいが支給された。

山鉾巡行と片付け 17日の大工方の集合は、7時であった。船鉾町に着くと、既に車方が車輪を付けていた。大工方は、町内から巡行に付き添う際の服装を町内から支給される。大工方は、「船鉾」「大工方」と染められた裃纏と白い半ダコと雪駄という服装になる。また、事前に、大工方は白い下着を着用するように連絡があった。町内から支給された服装を着用した後、車方が作業を終えるまで待機となった。その後、車方と手伝い方と曳き手が船鉾を巡行する。山鉾における大工方の役割は、二手に分けられる。1つは、山鉾巡行中に装飾品が落ちた際の修繕などの対処のために、船鉾に大工方2名が搭乗している。それ以外の大工方は、四条通に船鉾が到着するまで、会所2階で待機している。また大工方は、船鉾の巡行中も船鉾の後ろをついているだけであった。15時頃に町内に戻り、船鉾の解体が行われた。解体は、彫刻、屋根、布、棧橋の順番に行われた。解体は、部品されて会所に置かれる形となった。それから18日、昨日しまった彫刻を箱に仕舞う。片づけは手伝い方と協力して、山鉾の装飾品の入った箱を蔵に収めた。最後に会所の掃除を行い、近隣の料理屋で打ち上げとなる。

それから、会所の2階に帰り、給金の支給となる。その後に棟梁から「また来年もよろしくお願ひ申し上げます」のあいさつを持って大工方の仕事は終了となる。また他の役割である手伝い方と車方に対しては、ほとんどつながりがあったのではない⁸。このように、祇園祭の職人は基礎を作る集団と装飾品を飾る集団、車輪を装着して曳きまわす集団と別れている。一方で、神事に関わる作業については町内の人びとが作業を行っている。

⁷今回、私は船首の所に配置させていただいた。

⁸7月17日の山鉾巡行後の大工方の片付け作業中、「手伝い方とは、仕事が被るからいろいろと話はするけど、車方と仕事は被らないから全然誰がいるか分からない」と大工の棟梁が言っていた。

おわりに

本研究では、京都祇園祭の船鉾町の大工方として参加し、大工方の活動について考察を行った。船鉾においては、大工方は棟梁や2名以外は他の職業の人びとがほとんどである。このように大工方という名称でも、実際に建築業に従事している人びとがあまりいないのが現状である。一方で、かつての大工方については『船鉾 財団法人設立五十周年記念誌』に詳しく記載されているので引用する。

平成二十六（二〇一四）年の時点で、経験年数の最も長い前親方の西村幸造（西村工務店）は、父親が船鉾の大工方であった縁から、自身も参加するようになった。西村のもとには普段の仕事で師弟関係にある者や交流のある別の工務店の大工が職人という立場で大工方に参加した。（略）一九八〇年代初め頃、就業の多様化にともない、一族で大工を専業とする者が減ってきた。そのため大工方では、職人の代わりに手伝いと呼ばれるアルバイトを中心に人員確保が行われるようになった。（略）現在では、親方を含め四人の職人と一〇名程の手伝いが集められる。手伝いの増加により、大工方の構成員の職業は多様化した。特に、一時、伝統工芸やものづくりへの関心の高さから芸術分野の学生アルバイトのネットワークが強くなり、就職後も画家や芸術系の教員など専門性の高い人材が定着した〔佐藤 矢野 2018 14〕。

このようにかつては、普段の仕事で師弟関係のある者や交流のある別の工務店の職人などを中心に大工方が集められていた。その後、1980年代以降にアルバイトを中心とする人員に変化していった。また、他の役割もほとんどが職人の集団であったが、それが次第にアルバイトなどに変化していったとされる。『船鉾 財団法人設立五十周年記念誌』によると、手伝い方は昭和35（1960）年頃、船鉾の手伝い方は建設会社の請負であるという。工務店の従業員や知人の大工などで構成されている〔佐藤 矢野 2018 13〕。手伝い方に関しては、現在でも親族が中心となっており、外部の人びとが入ることが困難であるという。また車方は、木製の車の製作を生業とする車大工が担っていた。その後、自動車の普及により、車大工という職業は失われた。現在は、車大工の末裔や棟梁の知り合いなど会社員や大学教員など多様で継承されている〔佐藤 矢野 2018 13〕。

また引き手も、町内の伝承によると船鉾には丹波亀岡周辺の農家から曳き手が集められていたという〔佐藤 矢野 2018 15〕。昭和59（1954）年には、京都・祇園祭ボランティア21が組織、市内の大学の運動部がアルバイトとして山鉾の曳き手やその他の雑用を担うようになったという〔佐藤 矢野 2018 15〕。このように、昭和30年代までは専門の職人の集団や近郊農村などが船鉾の活動を担っていた。

現在の大工方と町内の関係 京都祇園祭における作事三方の研究などで指摘された通り、大工方は町外から来る人びとによって担われていた。この流れは現在でも変わらない事が指摘できる。いずれも、彼らが職人かそうでないかではなく、町外から雇われる人びとである。これらは、職人から職人でない人びとが祭礼に関わるようになってこの流れは変わらないことが指摘できる。また、大工方の集団はほとんどが棟梁の人間関係や大工方の交友関係によって集められている。彼らは、船鉾町内から職

人がやとわれるというかたちは現在も存続している。

熊谷市の場合、町内に祭礼で活動する鳶も彼らを雇用する旦那も居住している。京都の船鉾町では、両者は完全に分かれており、祭典期間だけ作事三方などの人びとを雇用するかたちがとられている。これらの違いに関しては、町内の大きさが影響していると考えられる。京都の船鉾町は、熊谷に比べると非常に面積が小さいために、そこに住む人びとが限られている。

その他の違いでは、熊谷うちわ祭では旦那方が移住、もしくは消失していった。これは、旦那衆が熊谷駅前の開発などによって郊外に移住したことが要因である。しかし、鳶は町内で、ほとんど変わらずに存続している。彼らは、町内での土木作業の他に、熊谷うちわ祭の執行によって存在している。一方で、京都祇園祭における作事三方の研究などで指摘された通り、大工方は町外から来る人びとによって担われていた。この流れは現在でも変わらない事が指摘できる。彼らが職人かそうでないかではなく、町外から雇用される人びとである。これらは、職人から職人でない人びとが祭礼に関わるようになってこの流れは変わらないことが指摘できる。また、大工方の集団はほとんどが棟梁の人間関係や大工方の交友関係によって集められている。彼らは、船鉾町内から職人が雇われるというかたちは現在も存続している。また、町内の側は、ただ作業をすべて委託するのではなく、御神体の人形の飾り付けやお囃子に関しては、町内の人々が行っている。いずれも、作事三方が御神体やお囃子に関して関わることはなく、神事をつかさどる町内と技術によって鉾を組み立てる外部の人々によって祇園祭の行事が行われている。

船鉾では、伝統的に外部から職人を集めて組み立てが行われた。かつての作事三方は、職業と役割が一致していた。しかし、その後は職業の解体に伴い、大工方には宮大工ではないアルバイトの人びとも参加するようになった。

現在、大工方に入ってみたところ、棟梁などの専門職とアルバイトの先輩とで分かれていた。両者はともに協力しながら、山鉾の組み立てが行われていた。また、手伝い方や車方などとはほとんど関わりがなく、完全に町外者とされている。彼らは、完全に棟梁の差配のもと集められている。また、トラブルなどが起きた場合、町内から雇止めのようなかたちで排除することが可能となっている。また、彼らは職人から一般の人びとに変化しても、組織の運営は全く変化していない。いずれも、町内から彼らは雇われている形のため、町衆の人びとの権威は明確になっている。

また、町内に鳶組のような組織が存在しない。彼らは、町外に在住している人びとである。これらのつながりに関しては、かつては屎尿の処理などを外部の近郊農村の人びとに処理させていた関連もある。祭礼に関する人びとの関係は、かつての祭典地域の日常生活とも非常に密接に関わっている。

表1 京都祇園祭の日程

1日～18日	吉符入り
1日	長刀鉾町お千度
1日～11日	二階囃子
2日	くじ取り式 山鉾町社参
3日	神面改め
5日	長刀鉾稚児舞披露
7日	綾傘鉾稚児社参
10日～14日	前祭山・鉾建て
10日	お迎え提灯 神輿洗
12日～13日	前祭山鉾曳き初め・山昇き初め
12日～16日	山鉾上での囃子
13日	長刀鉾稚児社参 久世駒形稚児社参
14日～16日	前祭宵山
15日	斎竹建て 宵宮祭
16日	献茶祭 宵宮神賑奉納行事
17日	前祭山鉾巡行 くじ改め 神幸祭(神輿渡御)
18日～21日	後祭山・鉾建て
20日～21日	後祭曳き初め・山昇き初め
21日～23日	後祭宵山
23日	煎茶献茶祭 藤摩焚き
24日	後祭山鉾巡行 くじ改め 花傘巡行 還幸祭 神輿渡御
25日	狂言奉納
28日	神輿洗
29日	神事済奉告祭
31日	疫神社夏越祭

表2 船鉾の行事日程

日程	行事
7月3日	切符入式
3日～9日	二階囃子
11日～13日	鉾立て
13日	曳初め出発
14日	人形殿開帳
15日	人形殿参拝
16日	宵山 日和神楽
17日	山鉾巡行
24日	還幸祭

表3 船鉾の作業日程と作業者

日程	作業	作業者
7月11日	鉾枠組み立て	手伝い方
12日	上部組み立て 装飾品取り付け	大工方
13日	上部組み立て装飾品取り付け 曳初め	手伝い方 大工方 車方
14日	御神体組み立て	町内
15日		
16日	宵山	
17日	船鉾巡行	手伝い方 大工方 車方
18日	船鉾解体	手伝い方 大工方 車方



写真1 船鉾

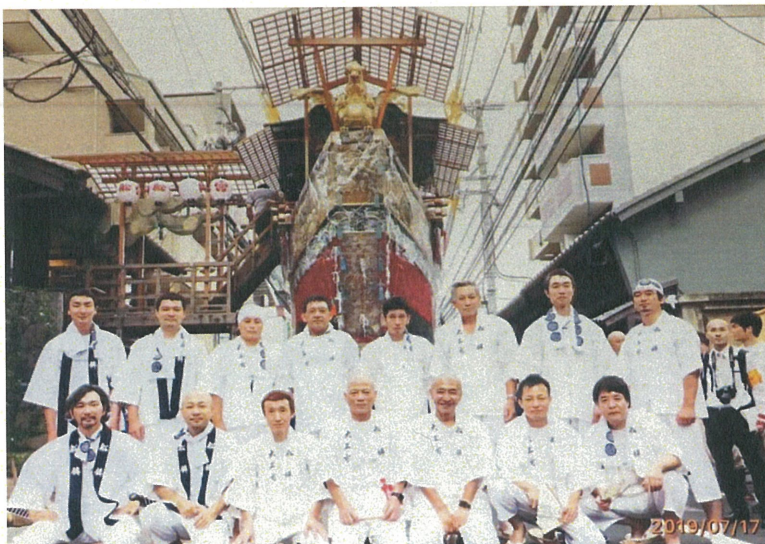


写真2 船鉾の大工方



写真3 船鉾の部品



写真4 組み立て最中の船鉾

第Ⅲ部 外部的な要因による祭礼の変容

第8章 観光化による祭典組織の変化—千葉県成田市成田祇園祭を事例に—

はじめに

第Ⅲ部では、千葉県成田市の成田祇園祭と群馬県沼田市の沼田まつりについて考察する。成田祇園祭とは、成田山新勝寺の奥之院に安置されている大日如来の祭礼である。昭和30年代まで成田祇園祭は、御輿渡御と山車・屋台巡行が中心の祭礼であった。その後、昭和41（1996）年に新東京国際空港の建設が決定され、成田祇園祭の観光化の動きが起った。平成27（2015年）に見学した成田祇園祭の先鋒の役職を中心に、新聞等の文字資料を参考にしながら、成田祇園祭の観光化について検討する。

群馬県沼田市の沼田まつりは、毎年8月3～5日に行われる須賀神社の祇園祭と、沼田まつり商工祭が統合された市民祭である。市民祭として統合される以前は、沼田祇園祭（通称 おぎょん）と呼称されていた。この沼田まつりでは、須賀神社、榛名神社の両神社みこし渡御をはじめ子ども神輿の渡御や、沼田市内外から参加する神輿会の神輿渡御、「千人おどり」と呼ばれる流し踊りなど様々な催しがある。この沼田まつりには、マンドウと呼称される山車が存在する。現在、マンドウについては各町内が管理を行い、巡行が行われている。これまで、このマンドウの形態については様々な報告がなされてきたが、具体的な資料をもとに分析したものはあまり行われていなかった。8章では、祭礼全体の観光化と山車・屋台巡行についての成田山新勝寺との関係性について報告する。9章では、沼田まつりで巡行されるマンドウの新様式と江戸型山車の関係について論じていく。

成田祇園祭では、各町内が若者頭を筆頭とした若者連が山車・屋台の巡行を行っている。その中で、他町内の交渉を行う役目が先鋒である。近年、この先鋒の喧嘩腰の交渉が見せ場となっている。柳田國男は、『日本の祭』で祭りから祭礼へ変化する過程において、祭礼を行う側の人間は、見る側の人間を意識し、徐々に祭りを派手にする風流の存在を指摘した。その後の祭礼研究は、柳田の指摘に関わらず祭礼の本質的な部分に焦点を当てる研究が多く、新たに付加された部分に関する研究はほとんど行われていなかった。

所功は京都三大祭（葵祭、祇園祭、時代祭）の事例から、祭礼を行う町衆が見物に来る観客を飽きさせないために、新たな行事を導入すると説明した¹。所がいう祭礼の革新性・流動性とは、祭礼の担い手である町衆が観客を意識して新たな様式を祭礼に導入するというものである。所は、祭礼の新行事の導入について、地域のコミュニティーを強固にする目的があると分析した。この研究では柳田の指摘する風流とつながり、それが地域のコミュニティーを結束させる効果があるとした。所は観客を飽きさせないための革新性・流動性を指摘したが、実際の事例において詳しい説明はしなかった。

新たな行事を導入する要因は、観客だけではないと指摘したのが谷部真吾である。谷部は、静岡県森町の森の祭りを調査し、自町内の屋台が優位性を得るために新たな飾り、

¹所 功 1996 『京都の三大祭』 角川選書

お囃子を取りこんでいくと指摘した²。谷部は、新しい要素・様式の導入は、1つの祭礼組織だけの要素・様式の独占を防ぐために、他の祭礼組織がその要素・様式を採用すると論じた。この指摘は、祭礼組織同士の対抗が新たな要素・様式の導入につながるというものである。

本章では、成田祇園祭の変化をもとに、祭礼における観光化がどのように行われているのか明らかにする。

1 新勝寺と門前町の祇園祭

(1) 成田山新勝寺の門前町

成田山門前町のあゆみ 成田祇園祭が行われる成田山新勝寺周辺は、古くから門前町として発達してきた。明治31(1898)年に成田鉄道の成田・佐久間が開業し、東京(本所)と成田を鉄道で直結する。明治34(1901)年に成田・我孫子間も鉄道が開通し、日本鉄道と連絡する。この鉄道が開通したことにより、日帰りで成田を訪れる参拝客が増加し、旅館業・飲食業は一時衰退する。旅館業者は「成田町旅館睦組合」を結成し、厳しい規約を設けて、顧客を確保しようとする。

昭和17(1942)年2月に成田町旅館睦組合の規約改正が行われた。改正の目的は、組合運営を国策に順応するためである。それ以外に物資配給に際し、不正を取り締ることも目的であった。同じ頃、旅館業・料理店・飲食店の成田三業組合連合会が結成される。この組合の目的は、町当局と連絡を取り合いながら、業務物資の配給を円滑にしようとするのであった。この門前町の動きによって、参詣客の数は一時回復する。終戦後、成田を訪れる参詣客は再び激減する。その原因は、戦後の精神的荒廃、物質的欠乏、運輸能力などの全面的低下であった。昭和29(1954)年3月、町村合併促進法の適用を受け、7か町村が合併して成田市が誕生する。初代石原市長は、就任あいさつで観光業と商業に多くの予算を投資すると発言した。

昭和41(1996)年に新東京国際空港(以下、成田空港)建設が決定し、それに合わせて空港関連事業の推進が行われた。関連事業として、成田ニュータウンの建設、成田駅周辺の整備事業が開始された。昭和49(1974)年1月に成田空港が完成する。現在、成田市は多くの外国人が訪れる国際観光都市となり、新勝寺とその門前町がある文化都市を目指した街づくりが行われている。

祭礼の由来と行事 成田祇園祭は、毎年7月7・8・9日に近い金・土・日曜日に成田山門前町周辺で開催される。祭神は、新勝寺奥之院に祀られている大日如来である。祭礼を行う目的は、災厄退散、五穀豊穰としている。祭礼期間中、御輿渡御や10基の山車・屋台が成田山門前町周辺を巡行する。

(2) 成田山門前町の祇園祭

成田祇園祭は、享保17年(1731)に、現在のJR成田駅東にある権現山と呼ばれる一角を新勝寺が佐倉藩から拝領した際に、そこに祀られていた妙見、清滝権現を地主神として奥山に祀ったことがはじまりとされる。この祭礼は、享保年間には鎮守湯殿

²谷部真吾 2000 「祭りにおける対抗関係の意味—遠州森町「森の祭り」の事例を通して—」『日本民俗学』222号 日本民俗学会

権現の祭礼として行われていた。その後、明治期より「祇園会」という名称になったとされている。成田祇園祭では、新勝寺と9町内から10基の山車・屋台が巡行する。山車・屋台を巡行させるのは、本町、仲之町、上町、幸町、花崎町、田町、東町、囀護台、土屋である（表1参照）。本町、仲之町、上町、幸町、花崎町、田町、東町の各町内は、成田山門前七か町と呼ばれる門前町である。この7か町で、本町、仲之町、上町、幸町、花崎町、田町、東町の順に当番町を担当する。昭和42（1967）年に囀護台地区、昭和49（1974）年に土屋地区が参加した。

現在の成田祇園祭は、初日に御輿と先導する稚児の安全を祈る警護安全・御輿法楽および大本堂前に全山車・屋台が集合し、祭礼期間中の安全を願う初日大本堂前集合が行われる（写真1）。中日には、JR駅前に全町の山車・屋台が集合し、お囃子をリレー形式で演奏する出囃子披露（写真2）が行われる。最終日は、全山車・屋台が仲之町にある急な坂（通称、仲之町の大坂）を登る総引きが行われる。この総引きは、成田祇園祭において最大の見せ場である。祭典期間中、新勝寺では、大日如来が安置される奥之院が特別開帳される。奥之院前の光明堂では「天国之宝剣頂戴」の行事も行われている。これは、成田山を開山した寛朝大僧正が朱雀天皇に賜わったとされる天国宝剣（あまくにのほうけん）を身体にあてて、身体健全、厄難消除、開運成就の祈願をする行事である。

山車・屋台巡行と若い衆 成田祇園祭では、各町の祭礼委員長を筆頭とする旦那方・旦那衆の組織が設けられる。彼らは、裏方で山車・屋台巡行を行う若者連を支える役割以外にも、御輿関係などの祭事関係に携わっている。若者連は、各町の若者頭を代表とする若者組織である。若者連には各町内で異なるが、若者頭、副頭、総務、会計、進行、先鋒、交通、連絡、渉外、上乗り、頭補佐、山車係という役職がある。この役職の中で山車・屋台巡行における重要な役職は、先鋒である。若者頭は、祭典期間中に一人で行動してはいけないこととなっている³。若者頭は巡行中、梶棒の上において巡行等の指示を出す事はほとんどない。その間、巡行の権限は先鋒に任せられる。先鋒は、他町内との山車の運行について交渉を行う役職である。彼らは、ほとんど山車・屋台の先頭において、他町内の先鋒と交渉して、山車・屋台のすれ違いの順番等を決定する。

初日の17時頃、私が新勝寺総門前で山車・屋台の巡行を見学していたところ、3町内の先鋒が仲之町の大坂を登る順番について話し合っていた。お互いに譲らないところがあるのか、かなり強い口調で話し合いが行われていた。ある町の先鋒が「そっちはどうなんだ！」と声を上げたため、一時その場は騒然となった。その後、他町内の先鋒が代替案を出し、話し合いは終わった。話し合いの後、先鋒についている連絡係が携帯電話で決定事項を山車・屋台のもとにいる幹部に伝えていた。

山車の先頭にいる先鋒以外にも、薬師堂前のセンターポールに先鋒（通称 ポール先鋒）が一人いる。センターポールは、仲之町の大坂を登りきったところの場所である。薬師堂前にあるポールでは、ポール先鋒たちが話し合いをしていた。彼らは、薬師堂前で山車の位置を示すボードを備え、坂の登り降りの順番を決めていた。その話し合いで

³若者頭は、一人で行動してはいけないこととなっている。平成26（2014）年、土屋青和会の若い衆として成田祇園祭に参加した際、私は若者頭の指示でトイレについて行くように言われる。若者頭は、「僕は全然気にならないんだけど、周りの人がうるさいんだ」と言っていた。

も「おい！もう山車が来ているじゃないか！」と強い口調が聞こえた。先ほど見た坂の下の先鋒たち同様、各町内の山車・屋台の順路を決めるときの先鋒たちは、かなり殺気立っていた。ポール先鋒たちは、道の真ん中にいるため、山車・屋台が通過するたびに、一度ポールを離れなければならない。山車・屋台が通過すると再び集まり、話し合いをはじめていた。

ポール先鋒たちは自分の山車の順路が決まると、付き添いの若い衆をもとに山車・屋台の幹部に連絡事項を伝える。現在は、携帯電話を使ってポール先鋒と連絡をとっている。一方で、巡行中は全速力で「連絡！連絡！」と叫びながら走って伝達するスタイルも残している。なぜ古いスタイルを残しているのか、休憩中の若い衆に聞いたところ、「このほうが、かっこいいから」という意見であった。若い衆の中には、走って連絡を伝えることに関して、「正直、きついです」と息を上げている若者もいた。

現在、成田祇園祭では山車・屋台巡行は各町の若者連が担われている。この山車・屋台の整備はもともと鳶職が管轄としていたものであった。現在、祭礼に関わる若者連では、鳶組織を模倣した組織形態を有している。若者頭を立てるという考え自体が鳶に祭礼に関わっていた名残であると考えられる。

2 先鋒の役割と観客

(1) 先鋒という役割

ポール先鋒と綱先先鋒 成田祇園祭では、山車・屋台の運行は若者連に任せられているという特徴がある。若者連の最高責任者は若者頭であるが、山車・屋台巡行に関して、一番重要な役割は先鋒である。関根賢治の『成田祇園祭々礼考 まつりの実際』に、先鋒の役割が詳しく書かれているので引用する。

先鋒は他町内との山車の運行について交渉を行う係で重要な役割となっていて、ある意味若者頭よりも権限が大きい。この先鋒は二人で通常は山車の先頭に行き、山車の擦れ違いの際にどちらかの山車が待って、どちらの山車が行くというような他町内との山車の運行について交渉に当る。夜になると全山車・屋台が仲町（原文ママ）の大坂に集中するため、仲町の大坂の上、薬師堂前のセンターポールに一人、坂下に一人を配置して他町内との交渉にあたる。薬師堂前には山車の位置を示すボードを備え、坂の上がり降りの順番を決めていく。傍からみているとけんか腰でハラハラするが、実際は普段からの付き合いもあって喧嘩になるようなことはない。

〔関根 2003 36～37〕

関根によると、先鋒の役割は山車・屋台の擦れ違いの際の交渉、仲之町の大坂を登る順番等を決めることが大きな役割と説明されている。成田祇園祭が行われる地域は、道幅が狭いうえに、傾斜の差が激しいため、山車・屋台を引くのが困難である。この交渉が上手くいないと、自町内どころか全町内に迷惑をかけることになる。そのため、各町内の先鋒たちは交渉の際は、強い口調になる。関根によると、先鋒はポール先鋒と綱先先鋒の二つの役割があるとしている。

ポール先鋒とは、仲之町の大坂の頂上のポールにいる先鋒をいう（写真3）。ポール先鋒で一番重要な役割は、自町内の山車・屋台の位置を把握することである。ポール先鋒は、この情報を把握していないと他町内の先鋒との交渉することが出来ない。そのほ

かにも仲之町の大坂の順番や自町内の山車・屋台でトラブルが発生した場合、すぐに報告し解決に動くことが義務付けられている。

綱先先鋒とは、各町内の山車・屋台の先頭にいる先鋒である（写真4）。彼らは、山車の擦れ違い（通称 かわし）についての交渉を行う。かわしとは、山車・屋台同士での擦れ違いのことである。先述の通り成田山新勝寺周辺の道は狭いため、山車・屋台がすれ違う場合はどちらかの山車がとまって他町内の山車・屋台が通り過ぎるのを待たなければいけない。かわしは、どちらかが自町内の場合、原則として自町内側が待つこととするが運行状況を考え、もう一方の先鋒と臨機応変に判断するという決まりになっている。かわしの先鋒が順番を決めた場合にポール先鋒はそれに従うことになっている。このように先鋒の役割は複雑で、臨機応変な対応を求められる困難な役職である。また、先鋒は若者頭を中心とする幹部の意向を他町内に伝え、自町内の山車・屋台の曳きまわしをいかに優位に巡行させていくことが重要とされている。

（2）先鋒の成立

先鋒誕生の経緯 成田祇園祭で先鋒が誕生したのは、観客が増加した昭和40年代とされている。『上町祭礼写真集 当番町記念版』に、先鋒が誕生する前の成田祇園祭がどのように行われていたのか、詳しく記されている記事があるので引用する。

昔の成田の祭り、それは今の祭りに比べ、ある意味で実におおらかで自由な時代であった。例えば、祭りは夜通し朝までやって、眠いものは家で寝て、起きてまた曳き出すなんて時代である。その当時は、大雑把な運行で、先鋒などは勿論無かった。

若衆の年齢も幅広く、五十頃まで半天（原文まま）で、役員の数も区長、副区長の2～3名で行っていたという。〔かみちょう編集部 1995 51〕

この記事にある「成田の祭り」とは、成田祇園祭のことである。山車・屋台巡行は、時間通りではなく、「眠いものは家で寝て、起きてまた曳き出す」と各町内で自由に行っていたことが分かる。それでは、なぜ先鋒が登場したのだろうか。『千葉日報創刊三十周年記念 成田祇園祭 THE NARITA GIONSAI』に記載されている祭礼関係者の対談に、その詳細があるので引用する。

司会 勉強になります。（笑）ところで昔は仲之町の坂ですれ違っていたそうですね。山車と山車が。今ではとても……

清宮 レンガ通りでしたが、上り下りですれ違いはできました。今のように店先の看板や宣伝物もなかったし、何しろ見物客の数が違いますよ。この客が仲之町の坂を埋めだすと、擦れ違いは危険だということになった。

そこでできたのが「先鋒」という役なんです。どこの町内の若衆でも派手な一気上がりで目立ちたいから、先鋒同士のカケ引きでこの回数を決める。だから昔も今も先鋒の弱い所はミジメだよ（笑）〔千葉日報 1998 96〕

この対談の中で、山車・屋台の擦れ違いが危険になったために設けられたのが先鋒であると記載されている。先鋒が誕生した契機とは、成田祇園祭を見る観客が増加したことであった。先鋒は、観客の安全を守るためにつくられた役職であった。その後、現在のように山車・屋台巡行の順番を決める交渉を行うようになったと考えられる。

計画運行の導入 従来の成田祇園祭では、先鋒が中心となって山車・屋台巡行が進められてきた。その後、平成26（2014）年から、夜間の山車・屋台巡行での通過地

点と時間が固定化された計画運行が実施される。平成26(2014)年7月5日の千葉版の毎日新聞に、山車・屋台巡行に関する記述があるので引用する。

成田市で4日、恒例の成田祇園祭が始まった。あいにくの雨空だったが、多くの観光客が見物に訪れ、勇壮な山車の出発に見入った。

祭りは同寺の祭礼「成田山祇園会」に合わせて開かれ、歴史は約300年。近年は約45万人の人出を数える人気で、今年から夜間の山車の巡行についてはタイムスケジュールを設定し、狭い坂などでの混乱を避ける。〔毎日新聞 2014〕

毎日新聞によると、タイムスケジュールが設定された目的として、「狭い坂などでの混乱を避ける」とある。以前から、成田祇園祭のパンフレットには初日大本堂前集合・出囃子披露・総引き等の行事の時間が記載されていた。平成27(2015)年から昼間の山車・屋台巡行も固定化が起った。成田市観光協会オフィシャルホームページ⁴には、全町の計画表が掲示されている。その内の土屋青和会を一例として挙げる(参考資料1参照)。土屋青和会の予定表の7月11日の中日午後では、「◎土屋弘恵会前初 16:30⇒薬師堂 16:50⇒大野屋 16:58⇒東町⇒成田高校⇒大野屋前 18:13⇒仲之町⇒薬師堂 18:21⇒上町⇒JR成田駅⇒上町⇒(以下省略)」となっている。このように通過地点・時間が固定化されている。他町内も同様に、その日の山車・屋台の発車時刻から山車を山車蔵にしまう時間まで記載されている。この通過地点・時間の固定化により、今まで以上に各町内の若者連に負担がかかるようになった⁵。平成25(2016)年の成田祇園祭を見てみると計画運行による山車・屋台巡行のルートが固定化されるも、若者連の先鋒の役割はいまだに残っている。

その理由として、成田山門前町周辺の地形が大きく関係していると考えられる。成田山門前町周辺は、先述の通り山車・屋台巡行を行うのに非常に困難であるため、時間通りに山車・屋台巡行を進めるのは難しい。現在の山車・屋台巡行でも、各町内の先鋒たちが交渉を行い、臨機応変に対応する必要があるからである。

3 成田祇園祭の観光化

新勝寺との関連性 現在、初日大本堂前集合では、安全祈願、護摩札授与、乾杯、手打ち、総踊りが行われている。この行事は、昭和45(1970)年から行われた。関根賢治の『成田祇園祭々礼考』によると、初日に全町の山車・屋台が集合するようになった経過が詳しく書かれている。

この初日に全山車が本堂前に集合するというのは、昭和54(1979)年から実施されたので、当時この案については、各町内からかなり反対があった。というのはそれまでは各町内の山車は御輿が出てからではなくては、山車の引きまわしはできない。(略) 祇園祭中日のJR成田駅前の全山車集合、又最終日には旧北総会館前、現在の弘恵会田町駐車場から総引きに続いて本堂前に同じく集合と二日間全山車集合があり、このうえ初日まで本堂前に集合ということになると各町内の自由な山車引き廻しが出来にくくなるという町内の思惑もあった。しかし全町内の若者

⁴成田市観光協会 『FEEL成田 | 成田祇園祭—成田市観光協会オフィシャルサイト』 平成27(2015)年10月1日 (<http://www.rtk.jp/news/gion/dashi.html>) 衆も、大坂を八分で通過しなければいけないと戸惑っていた。

頭が本町若松本店に集合、協議した際、新勝寺側より「今後祭礼を継続していくためには、やはり経費の問題は避けて通れる問題ではない。ついでには初日に本堂前に集合するによりこれをニュースソースとして宣伝し多くの観光客を誘致して成田に金が落ちるようにしなければ、又以前のように三年に一度の祭礼ということにもなりかねない。ここは是非にでも実施したい」

という要望があり、最終的には初日も全山車集合ということになった。〔関根 2001 11〕。

新勝寺側の要望の中で「又以前のように三年に一度の祭礼ということにもなりかねない。」という言葉がある。この「三年に一度の祭礼」とは、昭和36（1961）年から昭和47（1972）年まで、成田祇園祭は人手不足、資金不足が原因で、山車の引きまわしが3年に一度行われる状態であったことをいっている。新勝寺側の要望は、観光客を誘致しなければ、以前のように3年に一度しか山車・屋台の引きまわしが出来なくなってしまうという警告であった。

初日大本堂前集合の他に、新たに追加された行事に中日の出囃子披露がある。もともとJR成田駅前のロータリーに全山車・屋台が集合することは、昭和20年代には行われていた⁶。昭和60（1985）年になると、佐原祇園祭の「通し砂切」を手本にお囃子をリレー形式で行う行事にした。この行事を導入した目的は関根によると、「成田では山車の引きまわしに重点が置かれるため、お囃子を軽視する傾向があった。（略）そのような中であって下座あるいは囃子方の出番を創ろうとする意図もあった。」〔関根2003 58〕としている。同様に成田祇園祭の最大の見せ場である総引きも、以前からある行事を改良された行事である。総引きは、昭和49（1974）年には行われており、旧国鉄駅（現JR駅）前から本堂までという経路で行われていた。当時の総引きは現在のように、経路が固定されたものではなかった。

このように、新たに追加された行事を見てみると、目的が観客に見せることとする共通点がある。成田祇園祭の観光化とは、具体的に時間・順路の固定化と見せる要素と指摘できる。その上で先鋒の役割を考えてみると、ただ山車・屋台巡行のトラブルを防止・解決するために存在しているのではなく、喧嘩腰で交渉するというパフォーマンスの要素が加えられているのではないかと考えられる。

見せるという役割 先鋒と同様に、従来の役割から新たな役割が付加された例が成田祇園祭にある。それは、各町内の山車・屋台の上にいる上乗りという役職である（写真5）。この上乗りとは、もともとは山車・屋台巡行の際に、山車・屋台の上で電線等の障害物を除ける役割となっていた。しかし、平成13（2001）年に新勝寺参道の電線埋設工事が完了し、電線が無くなった〔毎日新聞 2001〕。しかし、上乗りの役割はいまだに存続している。関根の『成田祇園祭々礼考 まつりの実際』には、現在の上乗りの役割が記されているので引用する。

花崎町では「上乗り」と呼んでいるが、もともとは電線除けのために設置された役割だが、現在は電線の地中化のためその必要もなくなり、実際は出しい引き回し

⁶関根によると、従来8日の中日に御輿出迎えの為、成田駅前に全山車・屋台集合、最終日9日に新勝寺境内も同様に集合していたとされる。その後、昭和54（1970）年に初日大本堂前集合がつくられたため、3日間同じことを繰り返すことになってしまうために行事が改良された。

の余興的なものになっている。高さ5mも傾斜がある屋根の上で踊ったり、提灯を振ったりと危険な役割であるがそれがまた祭りに華を添えるものとなっている。

〔関根 2004 30〕

関根の『成田祇園祭々礼考 まつりの実際』には、電線除けの役割から「余興的」なものになっていると記されている。上乗りは、電線の地中化のため役割が無くなってしまったが、新たに見せるという要素が付加されることによって、その役割が存続したと考えられる。この動きは先鋒にもいえると考えられる。先鋒は、計画運行の導入によって従来の山車・屋台巡行の順番を交渉する役割が変容し、わざと喧嘩腰になって交渉を行うパフォーマンス的要素が付加されたと考えられる。一方で、パフォーマンスの役割が付いても、まだ先鋒は残っている。

統一された祭礼 見せるという要素を考える際に、もう一つ重要なものが統一である。現在、各若者連は揃いの半纏を着用している。しかし、もともとはほとんどの若者連は揃いの半纏を着用していなかった。昭和49（1974）年の土屋青和会を中心に撮影された映像を見ると、ほとんどの若い衆は、ダボシャツにドンブリという姿であった（写真6）。各町内が新勝寺の大本堂前に山車・屋台をとめたとき、上町親和会だけが、半纏を着用していた。その後、土屋青和会は昭和51（1976）年に半纏を着用する。他の若者連も、各若者連の半纏を導入していき、現在のような揃い半纏を着用していく。

以前の祭礼において山車・屋台巡行は、必ず山車・屋台を出すという義務はなかった。昭和49（1974）年の土屋青和会の映像には、全町の山車・屋台は集合してはいない。山車・屋台巡行も同様で、各町内で統一して何かを行うということがあまりなかった。現在の成田祇園祭では、初日の大本堂前集合、中日の出囃子披露、最終日の総引きは各町内が必ず集合する行事がある。これらの行事は、先も述べたように近年つくられた行事である。このことから、観客の目を意識して全山車・屋台を集合させるようになったと考えられる。

祭礼の観光化 成田祇園祭の観光化については、①山車・屋台の通過地点・時間の固定化、②観客の安全性の確保、③新勝寺との関連性の創造、④先鋒のパフォーマンス化の4つの点があげられる。成田祇園祭が観光化された契機については、観客が増加していったことがあげられる。また、成田祇園祭の日程も観光化と大きく関わっている。

現在の7月7日に近い金・土・日曜日に開催するようになったのは、平成17（2005）年からである。それ以前の開催日は、7月第一週の金・土・日曜日であった〔毎日新聞 2001〕。これは、平成13（2001）年に変更されたものである。それ以前の成田祇園祭の日程は、7月7～9日というように固定化されていた。なぜ、金・土・日曜日になったのかというと、平日に山車・屋台引きを行うための人出を確保するのが難しくなったことが原因であった。このように、山車・屋台引きを行う人出を確保する目的で金・土・日曜日に祭日が移されたことにより、観客が増加していった。このように本来の祭日を金・土・日曜日にずらすことにより、観客を呼び込もうとする動きが見られる。また、新勝寺との関連性を持たせることにより、新勝寺の行事として行われることにより、行事の正当性を補完していることが言える。また、新勝寺側も、山車・屋台巡行を大本堂の前で行うことにより、参詣客の確保にもつながっている。

おわりに

本章では、平成27(2015)年に見学した成田祇園祭の先鋒の役職を中心に、文字資料等を参考にして、成田祇園祭の観光化について考察してきた。平成27(2015)年の成田祇園祭で、綱先先鋒とポール先鋒を見学した。先鋒は、山車・屋台巡行の順番を決定するために各町内の先鋒と交渉を行う役職である。各町内の先鋒たちは、ただ話し合っただけで交渉を行うのではなく、喧嘩腰の強い口調で交渉を行っていた。

この先鋒という役割が登場したのは、昭和40年代である。それ以前の成田祇園祭は、山車・屋台巡行は各町内の判断で行われていた比較的自由的な祭礼であった。その後、山車・屋台巡行を見物する観客が増加する。この観客の増加により、見物している観客に山車・屋台がぶつかる危険性がでてきたため、若者連に先鋒という役割が追加された。先鋒は本来、各町内で山車・屋台が通過する順番を交渉し、観客の安全を確保するための役職であった。平成26(2014)年の成田祇園祭から、山車・屋台巡行に計画運行が導入されるようになった。この計画運行とは、各町内の山車・屋台が通過する場所・時間をあらかじめ計画し、この計画通りに巡行を進めるという制度である。この計画運行の導入のために先鋒の役割が必要なものではなくなったが、以前先鋒の他町内と山車・屋台が通過する順番を交渉するという役割は残っている。なぜ先鋒の役割が残っているのかというと、何らかのトラブルが起きた際に対応するために先鋒が残っていると考えられる。一方で、先鋒に新たな役割が担われたために、先鋒が存続しているのではないかと考えられる。その役割とは、喧嘩腰で交渉を行うパフォーマンスではないかと考えられる。

現在の成田祇園祭で行われている、初日大本堂前集合、出囃子披露、総引きは近年に付加・改良された行事である。これらの行事は、観客に見てもらうことを意識して、新たに付加・改良された行事であった。これらの行事と同様に、先鋒にも他町内と交渉しているところを観客に見せるという役割が付加されたのではないかと考えられる。この先鋒の役割のように、新たな役割が付加されていった事例が成田祇園祭に存在する。それは、山車・屋台の上で電線を避ける役割であった上乗りという役割である。成田山門前町周辺では、ほとんどの地域で電柱が地中化されている。そのため、電線を避ける役割が無くなったため、上乗り役の若い衆が必要なくなった。上乗りは、山車・屋台の上で踊り等を行う役割が追加され、現在も山車・屋台巡行の際に欠かせない存在となっている。この上乗り同様に先鋒にも、見せることを意識した役割が付加されたのではないかと考えられる。

以上、成田祇園祭の観光化では、見せるという意識という意識が強く存在していることが分かる。それに合わせて、観客に来てもらうための工夫もみることができる。それは先鋒を創設することにより観客の安全を確保すること、祭典期間を平日から金・土・日曜日に変更することである。このように現在の成田祇園祭は、観客に重点が置かれた祭礼がおこなわれている。成田祇園祭が観光化される以前は、地域住民の祭礼であったが、祭礼が次第に乖離していると考えられる。それは祭礼の担い手の祭礼に対する意識にも、大きな影響を与えている⁷。

⁷ ある町内の役員にお話を伺ったとき、「もう、おらが祭じゃないんだなよな」という声が聞こ

えた。この役員が言うには、もう成田祇園祭はただ自分たちが行っているのではなく、観光客に見てもらっていることを意識しなければいけないと話していた。他の役員からも「もう自分たちだけがいいと思うお祭りじゃないんだ、多くの人が訪れる国際都市のお祭りだからなあ」という声もあった。この他に、祭りを行うことだけではなく、見物人の安全対策なども考えていかなければいけないという声もあった。

参考資料1 平成二十七年度 成田祇園祭 土屋地区山車運行表

平成27年度 土屋区山車運行表

7月10日(金)

◎神酒所発 10:30 ⇒ 本堂前 11:00

◎本堂前セレモニー 13:00~ 本堂前出発(2番) ⇒ 神酒所前 ⇒
長谷川ストアー ⇒ 土屋宮谷津入口 ⇒ 土屋房谷津 ⇒ 土屋弘恵会前着 16:00

◎土屋弘恵会前発 17:00 ⇒ 薬師堂 17:18 ⇒ 大野屋前 17:26 ⇒ 田町弘恵会 ⇒
大野屋前 18:33 ⇒ 仲之町 ⇒ 薬師堂 18:41 ⇒ 上町 ⇒ 新道 ⇒ JR 成田駅 ⇒
京成成田駅 ⇒ 電車道 ⇒ 信徒会館 ⇒ 大野屋 20:21 ⇒ 仲之町 ⇒ 薬師堂 20:29 ⇒
JR 成田駅 ⇒ 上町 ⇒ 薬師堂 ⇒ 幸町 ⇒ 神酒所前 ⇒ 長谷川ストアー ⇒
神酒所着 22:00

7月11日(土)

◎神酒所発 7:15 ⇒ 土屋弘恵会駐車場前 8:00 ⇒ JR 成田駅 8:45 (通し砂切)
JR 成田駅出発(7番) 9:40 ⇒ 薬師堂 ⇒ 壇生神社着 10:40
壇生神社発 11:00 ⇒ 神酒所 ⇒ 出雲屋着 11:50

◎出雲屋発 13:00 ⇒ 長谷川ストアー ⇒ イオンSC着 13:25
ミニストップ発 14:30 ⇒ 寺谷津 ⇒ 土屋弘恵会前着 15:20

◎土屋弘恵会前発 16:30 ⇒ 薬師堂 16:50 ⇒ 大野屋 16:58 ⇒ 東町 ⇒ 成田高校 ⇒
大野屋前 18:13 ⇒ 仲之町 ⇒ 薬師堂 18:21 ⇒ 上町 ⇒ JR 成田駅 ⇒ 上町 ⇒
薬師堂 19:12 ⇒ 大野屋前 19:20 ⇒ 田町弘恵会前 ⇒ 大野屋前 20:35 ⇒
仲之町 ⇒ 薬師堂 20:43 ⇒ 上町 ⇒ JR 成田駅 ⇒ 上町 ⇒ 薬師堂 ⇒ 幸町 ⇒ 山崎眼科 ⇒
神酒所前 ⇒ 長谷川ストアー ⇒ 神酒所着 22:00

7月12日(日)

◎神酒所発 11:00 ⇒ 土屋弘恵会前発 11:20 ⇒ 薬師堂 ⇒ 田町弘恵会着 12:30

◎総引開始 13:30 出発(6番) ⇒ 仲之町 ⇒ 幸町 ⇒ 本堂前着(3番) 14:30

本堂前セレモニー 16:00~総踊り 16:45~

◎本堂前出発(4番) 17:20 ⇒ 幸町 ⇒ 薬師堂 ⇒ 上町 ⇒ JR 成田駅 ⇒ 電車道 ⇒
信徒会館 ⇒ 仲之町 ⇒ 上町 ⇒ JR 成田駅前 ⇒ 電車道 ⇒ 信徒会館 20:10 ⇒ 仲之町 ⇒
上町 ⇒ JR 成田駅 ⇒ 電車道 ⇒ 信徒会館 21:10 ⇒ 仲之町 ⇒ 薬師堂 ⇒ JR 成田駅 ⇒
薬師堂 ⇒ 幸町 ⇒ 神酒所前 ⇒ 長谷川ストアー ⇒ 神酒所着 23:00

※天候や諸事情により、時間、運行を変更する場合があります。土屋区

表 1 成田祇園祭 平成二十七(二〇一五)年 参加町山車・屋台一覧

町名	若者連	下座連 お囃子方	額	人形	備考
本町	本町和会	江戸里神楽四世 萩原彦太郎社中	武勇(成田山中興第十五世石川照勤大僧正筆)	藤原秀郷	明治三十五年(一九〇二)製作の江戸型山車。山車は上中下三段構造の上段迫り上がり式。町内が狭いため、上中段が三六〇度回転するのが特徴。平成十二年(二〇〇〇)に車輪を新調。お囃子は新宿区無形文化財の萩原彦太郎社中による神田囃子である。
東町	東栄会	あづま下座連	×	×	屋台は二代目で、昭和五十三年(一九七八)六月に完成。正式には「曳きまわし屋台」という。平成十八年(二〇〇六)に、屋台の四方に獅子、鳳凰、恵比寿大黒、昇り龍などの立派な彫刻が施された。
仲之町	仲之町睦会	如月垣	妍哉得國(成田山中興第十五世石川照勤大僧正筆)	神武天皇	明治三十三年(一九〇〇)、東京神田で製作の成田最古の江戸型山車。
上町	上町親和会	鳥羽下座連	上町(成田山中興第二十世鶴見照碩大僧正筆)	×	江戸時代に作られた彫刻踊り屋台。平成一四年(二〇〇二)に大改修を行った。
幸町	幸若連	幸町下座連	金剛(成田山中興二十一世橋本照稔大僧正筆)	朱雀天皇	平成二十三年(二〇一一)製作の山車。左右の前柱に唐獅子と中央に方法と雲と金箔張り。
花崎町	花若連	花崎囃子連	智勇(成田山中興二十一世橋本照稔大僧正筆)	八幡太郎義家	昭和五十一年(一九七六)製作の江戸型山車。前部は囃子台に唐破風の屋根、後部は三層からなる鉢で最上部はせり上がり式になっている。
田町	田町東門会	神崎芸座連	光明(成田山中興二十一世橋本照稔大僧正筆)	素戔鳴尊	人形がせり上がる二層式の山車。昭和五十三年(一九七八)から活用するもので三代目のものとなっている。
成田山	成田交通会	都築社中	大日(成田山中興二世橋本照稔大僧正筆)	日本武尊	昭和六十三年(一九九八)に成田山開基千五十年祭を記念して製作した江戸型山車。
因護台	因護台三和会	因護台下座連	法王	嵯峨天皇	成田山開基一〇七〇年に合わせて作られた二層式屋台。
土屋	土屋齊和会	土屋囃子連	×	大穴権神 (大國主神)	平成一十九年(二〇〇七)に新調された江戸型山車。神話の山車と呼ばれる。

(成田祇園祭実行委員会『平成二十七年度 成田祇園祭』より複製)



写真1 初日大本堂前集合



写真2 出囃子披露



写真3 ポール先鋒



写真4 網先先鋒



写真5 上乘り



写真6 昭和49（1974）年の土屋青和会

第9章 外部の祭礼における影響—沼田まつりのマンドウを事例に—

はじめに

本章は、群馬県沼田市で開催される沼田まつりのマンドウの変遷について考察する。これまで沼田まつりに関する研究は、祭典地域の都市構造と祭礼の変化について注目されていた。それらの研究では、沼田祇園祭が沼田まつりとして再構成される過程について論じたものであった。そのため、祭礼に登場するマンドウや神輿などの存在について、あまり関心が示されていなかった。また、マンドウについては、具体的な資料を用いて分析することがあまり行われていなかったことが指摘できる。

そこで、本稿では沼田まつりに登場するマンドウの構造の変化について文献資料をもとに分析する。そこから、祭礼に登場するマンドウが変化する要因と祭典地域との関係について考察する。

沼田祇園祭については、現存する文献記録をもと当時の祭礼に関する報告がなされてきた。桑原健次郎は、昭和55(1980)～57(1987)年に『沼田万華鏡』へ「沼田祇園まつり私考」と題して、祭礼について報告を行った¹。この報告は、沼田まつりの歴史的変容や祭典組織などに多岐にわたり、綿密な報告がなされている。桑原は、当時のマンドウは肩で担ぐ程度のものであったとしている。その後、沼田まつりでは万灯に車輪がついたものが巡行されていたが、明治15(1882)年に上之町が山車を祭礼の中に導入したことにより、各町に山車の形をしたマンドウが普及していったとした。

高力渉、菅谷宏一、東昌孝、八木知則は、「祭りの持つ意味合いの変化—沼田まつりを事例として—」で、沼田まつりの時間軸、空間軸の双方から考察を行っている²。高力らは、沼田祇園祭から沼田まつりに変容するにあたり、祭りの持っていた神事的意味合いが徐々に希薄化している一方で地域活性化の要素が年々濃くなっていることを

¹桑原健次郎 1980 「沼田祇園まつり私考」『沼田万華鏡』16号 沼田郷土研究会、1981 a 「沼田祇園まつり私考(二)」『沼田万華鏡』17号 沼田郷土研究会、1981 b 「沼田祇園まつり私考(三)」『沼田万華鏡』18号 沼田郷土研究会、1982 a 「沼田祇園まつり私考(四)」『沼田万華鏡』19号 沼田郷土研究会、1982 b 「沼田祇園まつり私考(五)」『沼田万華鏡』20号 沼田郷土研究会、1983 a 「沼田祇園まつり私考(六)」『沼田万華鏡』21号 沼田郷土研究会、1983 b 「沼田祇園まつり私考(七)」『沼田万華鏡』22号 沼田郷土研究会、1983 c 「沼田祇園まつり私考(八)」『沼田万華鏡』23号 沼田郷土研究会、1984 「沼田祇園まつり私考(九)」『沼田万華鏡』24号 沼田郷土研究会、1985 a 「沼田祇園まつり私考(一〇)」『沼田万華鏡』25号 沼田郷土研究会、1985 b 「沼田祇園まつり私考(一一)」『沼田万華鏡』26号 沼田郷土研究会、1986 a 「沼田祇園まつり私考(一二)」『沼田万華鏡』27号 沼田郷土研究会、1986 b 「沼田祇園まつり私考(一三)」『沼田万華鏡』28号 沼田郷土研究会、1987 「沼田祇園まつり私考(一四)」『沼田万華鏡』29号 沼田郷土研究会

²高力渉、菅谷宏一、東昌孝、八木知則 2010 「祭りの持つ意味合いの変化—沼田まつりを事例として—」『自然と暮らし』17号 筑波大学大学院修士課程教育研究科教科教育専攻社会科教育コース

指摘する。吉岡亮太は、祭礼と都市構造の関わりについて考察を行った³。吉岡は、沼田祇園祭では江戸時代、従来の都市構造と密接に祭礼がおこなわれており、明治時代になると新たな都市構造を有した祭礼へ再構成されたと述べた。この明治時代の都市構造とは、町の中心が下之町から上之町から材木町に変化したことである。吉岡は江戸時代の祭礼は都市の構造と密接に関わっており、明治時代に入ってから町の変化と共に変化していったことを論じた。細矢久瑠実は、「沼田まつり祇園祭の変容と祭礼文化の展開」において、平成28（2017）年度の沼田まつりについて詳細な報告を行っている⁴。細矢は、沼田まつりの事例から地域社会の変化と、祭典地域での共有と展開の2つの視点から論じた。細矢によると、沼田まつりでは天狗神輿やマンドウの巡行など、沼田市街地周辺に在住する住民以外の人びとも取り込みながら展開していること指摘している。

これらの研究では、沼田祇園祭から沼田まつりへの変容について注目されてきた。一方、桑原が報告したマンドウや神輿などの祭礼の物質的な存在に関して、あまり注目されていなかった。そこで、本稿では沼田まつりで曳きまわされるマンドウについて注目する。そこから、近世や近代の資料をもとにマンドウがどのように変化していった過程について分析する。その変化をもとに、祭典地域の変化とマンドウがどのように変化していったのか考察を行う。

1 地域と祭礼の概観

(1) 祭典地域と神社の歴史

祭典地域と神社の歴史 群馬県沼田市は西部を利根川が、南端をその支流である片品川が流れ、大規模な河岸段丘を形成している。周囲を群馬県前橋市、桐生市、渋川市、みどり市、吾妻郡高山村、利根郡みなかみ町、片品村、昭和村、川場村と栃木県日光市に囲まれている。沼田まつりは、この段丘の上部の中心街を中心に開催される。中世から近世にかけて、沼田藩は沼田城の城下町として栄えた。明治22（1889）年4月1日 町村制施行に伴い、沼田町となる。明治29（1896）年4月1日、北勢多郡と利根郡が統合し利根郡となる。昭和29（1954）年4月1日に、利根郡の1町4村、沼田町を中心に利南村・池田村・薄根村・川田村と合併し、市制を施行し沼田市となる。その後も合併が続き、平成17（2005）年2月13日 利根郡白沢村・利根村が沼田市に編入されて現在の沼田市となる。

須賀神社と榛名神社 須賀神社の創建年代については、不明である⁵。慶長17（1612）年、真田信之が城を改築するにあたり現在地に移築した⁶。明治元（1868）年に須賀神社と改め、氏子は6か町で明治16（1883）年に村社、同21（18

³吉岡亮太 2012 「近世・近代における沼田祇園祭の変容過程」『地域と環境』12号 京都大学大学院人間・環境学研究科文化・地域環境論講座 地域空間論分野

⁴細矢久瑠実 2017 「沼田まつり祇園祭の変容と祭礼文化の展開」『えりあぐんま』23号

⁵金子正宏は、沼田の天王宮は同市内の沼須の天王畑より勧請されたと推測している。

⁶天王宮の跡地には、天王石と呼ばれる石が設置されている。祭礼の際、神輿をこの石の所に安置していたので、御旅所と呼ばれている、天王石は、天王様の腰かけ石とも呼称される。

88)年には北白川宮殿下の参拝、幣帛料を奉納された。昭和3(1928)年には郷社になる。

榛名神社の創祀の年代はあきらかでないが、享禄2(1530)年、沼田万鬼斎頭泰が沼田城築城にあたり現在地に榛名神社を移築したことがはじまりとされる。明治6(1873)年に榛名神社は、郷社になる。その後、昭和3(1928)年に県社に列せられた。明治5(1872)年に、須賀神社と榛名神社とで氏子分けが行われる。この氏子輪により、榛名神社の氏子圏は、材木町、原新町、倉内町、柳町、高橋場町、榛名町となる。須賀神社の氏子圏は鍛冶町、下之町、中町、上之町、馬喰町、坊新田町になる。

(2) 沼田まつりの歴史

牛頭天王の勧請 沼田まつりの前身である沼田祇園祭は、天正18(1590)年、下之町四ツ角に牛頭天王が祀られた頃よりはじまったとされる。慶長17(1612)年現在の境内のある中町へ移された。当時の祭礼は、6月23~25日、年によっては7月~10月の間の3日間など不定期であった。当初は、上之町、中町、下之町の三か町の氏子が中心となり、祭礼を実施した。明治14(1881)年以降、この祭礼は神社と榛名神社とで合同に行われるようになる。

上之町と下之町の攻防 明治時代、榛名神社では御旅所の位置は、各氏子町内をまわる順番制で決められていた。一方、須賀神社では下之町の天王石と限定されていた。明治17(1884)年に御旅所の場所について上之町から異議申し立てがなされ、下之町との間で御旅所の設置場所を巡る争いが起こった。この上之町と下之町の争いにより、翌年の明治18(1885)年の祭典執行が不可能になる。その後、明治41(1908)年7月30日に、毎年御旅所を各町にまわす永年輪番制が確立してこの争いが解決する。この争いが起こった要因は、御旅所の場所によって祭典期間中の人通りやマンドウの巡行も大きな影響があるためであったとされている。大正15(1926)年、前年神輿が渡御の最中に破壊されたため、須賀神社白木神輿新調する。昭和12(1937)年に日中戦争の影響により付け祭りが自粛される。その後、昭和15(1940)年に紀元二十六百年奉祝としてマンドウを出す。昭和20年代になると沼田祇園祭が再興される。

沼田祇園祭から沼田まつりへ 昭和33(1958)年に神社神輿が暴徒と化す騒ぎがあり、10年ほどの間は祭礼の規模が縮小した。神輿渡御は、昭和40(1965)年まで中断となる。その間、下之町、中町、上之町の三か町はマンドウの巡行が行われた。昭和34(1959)年11月に天狗おどりが登場する。昭和45(1970)年に昭和36(1961)年より行われていた沼田まつり産業祭と祇園祭と合わさり、市民総参加型の沼田まつりとなる。昭和47(1972)年に女性が担ぐ天狗神輿や千人踊りが行われる。平成2(1990)年からは、沼田商工会議所青年部作製の先導車があった。昭和49(1974)年には、交通事情の問題などからお祭り広場と呼ばれる歩行者天国が設置される。その後、平成年間には薄根ふるさと太鼓やバカ面踊り、だんべえ踊りなどが取り入れられ多くの人に参加できる催しが増加した。

各町内のマンドウの新調 沼田祇園祭が沼田まつりに統合される前後で、各町内でマンドウの新調が行われるようになる。昭和37（1962）年に中町が清水町より山車を買って、マンドウとして巡行する。昭和47（1972）年に上之町がマンドウを改装する。翌年、昭和48（1973）年に下之町が群馬県渋川市より山車を買って、マンドウとして新調する。昭和49（1974）年、材木町がマンドウの巡行をはじめ。昭和51（1976）年、西原新町がマンドウも巡行をはじめ。昭和52（1977）年に上之町がマンドウを高崎よりマンドウを買って新造する。同年、西倉内町もマンドウを新造する。昭和53（1978）年、東倉内町がマンドウを新造する。昭和54（1979）年、沼田祇園囃子保存会連合会結成され、活動が開始される。昭和56（1981）年に坊新田町がマンドウを新造する。平成2（1990）年に高橋場町がマンドウを新造する。平成6（1994）年に中町のマンドウが新造する。同年、鍛冶町が中町よりマンドウを譲り受ける。平成7（1995）年に沼田祇園囃子保存会連合会が沼田市重要無形民俗文化財に指定される。

沼田まつりの行事と日程 祭礼の日程は、8月1日頃にマンドウ洗いと呼ばれる作業が行われる。これは山車を子供たちが中心となって洗い、大人たちが仕上げる作業である。祭礼の用意は3日の午前中までマンドウなどの飾り付けを行う。祭礼当日は、各町内の袴纏や浴衣などを着用する。マンドウの前には女の子の手古舞が先導する。お囃子は上州系統「さんてこ囃子」の中のサンテコ、テケテットン、吉原カンラ、箆まわし、麒麟、夜神楽などが演奏される。

3日は午前1時より市街地を中心に車両が通行止めになりマーチング隊によるオープニングパレードにより祭礼が開催される。飾り付けの済んだ須賀神社、榛名神社の神輿は午前8時頃に氏子町内を車両に乗せられて渡御する。その後、神輿は御旅所に安置される。御旅所を出た後、神輿は市街地を一周する。各町のマンドウは、車両が通行止めされた後に巡行する。また、各町の祭典事務局には、祭典の役員、婦人会、青年会、育成会などの役員が待機しており、神輿や山車が近づくと飲み物などを出して接待する。午後6時半頃から、2基の天狗神輿が市役所前より出発する。午後7時頃に各町のマンドウが市役所に揃い、その後にマンドウ行列と称して市街地の本通りを中心に巡行する。4日も同様に、神輿渡御とマンドウの巡行が行われる。この日の昼に沼田祇園囃子の競演会が中町、中の会駐車場前から審査が行われる。その後、優勝・準優勝が決められる⁷。また、天王石のところで5日に神社に入場する順番を決める籤取式が行われる。

5日は各町内で子供神輿、マンドウの自主巡行が午後1時～午後8時まで行われる。この日の午後5時頃より須賀神社と榛名神輿の両社の神輿を出発し渡御を行う。その後、午後8時に市役所前広場にて両社の神輿の競演が行われる。その間、須賀神社の前では沼田祇園囃子の決闘が行われている。その後、4日の籤取式の順番の通りに、マンドウが須賀神社に入場する。その際、一番籤を引いた町内が、須賀神社入り口の注連縄を太刀で切る注連縄切が行われる。

⁷この沼田祇園囃子の競演会には毎年京都祇園祭の長刀鉾町の関係者が観覧に来ている。競演会の最後には毎年、長刀鉾町の関係者のあいさつが行われている。

その後、両社の神輿は一時間ほどネリを行い、午後11時頃に各神社の社殿に収められる。

祭典組織とマンドウ 現在、沼田まつりは、須賀神社、榛名神社、両神社の氏子、沼田まつり実行員会が中心になって運営が行われている。現在、祭礼に関わっている町内は、東倉内町（ひ組）、西倉内町（西組）、柳町（や町）、高橋場町（た組）、材木町（さ組）、原新町（は組）、上之町（か組）、馬喰町（む組）、中町（な組）、坊新田町（ほ組）、下之町（に組）、鍛冶町（い組）、榛名町（お組）、清水町（よ組）、薄根町（う組）の15町内である。現在、マンドウを持っている町内は、鍛冶町、下之町、坊新田町、中町、上之町、材木町、原新町、高橋場町、東倉内町、西倉内町の10町内である。マンドウを持っている地域は、マンドウは、各町内が競って人形、幕、提灯、熨斗などで飾り付けられる（写真1）。この山車は、三段せり上がり式で囃子方が乗車する江戸型山車という形態である。マンドウに乗るお囃子方の楽器は、鉦、太鼓、笛である。江戸時代のマンドウについては、肩に担いでまわるマンドウであったがそれが次第に大きくなり、車輪がついていったのではないかと考えられる。マンドウは、明治時代以前は一本柱の上に人形が乗っている構造であったとされている。明治41（1908）年に市街地に電線が引かれ、人形が電線に引っかかり破損する事故が多発する。その後、大正初期に四本柱とするマンドウが制作されたり、低めに作られたりするなどマンドウが改良される。その他、勾欄が上下できるすり込み式、上部だけが開店する回転式などのマンドウが導入されていった。現在、沼田まつりで曳かれているマンドウは10町内より10基である（表1参照）。

2 マンドウの変遷

（1）江戸時代のマンドウ

江戸時代の祭礼とマンドウ 江戸時代の祇園祭では、競馬、踊り、狂い獅子、神輿渡御が行われていたとされている〔金子 2008 301〕。マンドウについての記述は文化3（1806）年の沼田下之町「御用日記留」の6月23日の頁にわずかに記述を見ることができる（資料1参照）。

この記述によると、町役所に当年の祇園祭では材木町が「子供まんとう」を出す計画にいて、その他の町内では何も出さないという報告をしたと記載されている。また、同記録の6月25日の項目には、「一材木町まんとう、ほうらい山、尤子供」〔沼田市史編さん委員会 1997 895〕と記述されている。沼田下之町の「御用日記留」には、「子供まんとう」や「尤子供」とあり、このマンドウは子どもが行うものであったのであろう。6月25日の記述に「ほうらい山」とあり、人形などが作られていたのであろう。江戸時代地の古文書の中には、山車という言葉は登場せず、マンドウと屋台などの表記だけが存在しない。沼田まつりの中で山車という言葉が導入されたことを示す資料が確認できないため断言できない。この山車という言葉が、資料に登場するようになったのは明治以降である。明治時代になるとマンドウの写真が存在する。この写真には、一本柱の上に人形が乗っている四輪の曳きものが写っている（写真2）。この明治時代のマンドウについては、『沼田万華鏡』3号の下之町の老人たちを中心に

行われた座談会に、詳しく記載されている。

この頃は電線という厄介なものがなかった時代であるから高さは殆んど無制限で、見られる通り二階家の棟よりはるかに高い、おそらく十メートル以上あったのではあるまいか。考えればまことに不安定の高さでよくもてん倒の危険がなかったものだ。

最上部に人形、その足元は「岩」と称するはりぼてで、これは竹の芯に紙を張ったもの、それが乗っている上勾欄、その周囲から下に垂れ下がっているのが「波」とよぶ和紙の飾り物、そして下勾欄となる。下勾欄には「波玉」とよぶ竹の棒に銀紙を張って波のしぶきを表したものを相当数上を向けてとりつける。下勾欄の前後には、日除けがつき、日除けの両端には麻をまとめて紙で包んだ熨斗が取り付けられる。この熨斗はまんどうを天王宮へ奉納した意味を表わす。日除は大巾の布三枚をはぎ合わせたもので各町それぞれ好みの色にきまっていた。上之町は赤と白の組み合わせであったと記憶する。

そして最下部は人の乗る車で、これをまんどう枠と称した。この枠には車輪が四個とりつけられ、中央に柱がありこれが人形の身体の中まで通してある。(略)

まんどう枠は四輪だが、車軸が固定しているため、せまい道路で方向転換をする時は、付添の鳶の連中がてこでくじって向を変えるのだがその大騒ぎのこと話の外である。(略) もちろん引綱は前後にするし、トラ綱を張って転回を防いだ。

[沼田郷土研究会 1976 35]

この記述では、電線が張り巡らされる前のマンドウについては、一本柱の上に人形が載せられており10メートル以上ある非常に大きなものであったと語られている。また、マンドウには4輪が付けられており、鳶たちを中心に曳きまわされていたことが記されている。その他に、明治18(1885)年の上之町祭典記録には、当時のマンドウの巡行について詳しく記されている(参考資料2参照)。

この「須賀神社祭典約定書」には、マンドウは山車と表記されており、山車を奉納する順番はくじ引きによってきめられていることが記されている。その他に、各町内を巡行する場合は各町の都合に任せてマンドウを巡行させるように記されている。また、マンドウは、神輿還御の際に、「御送山車ノ儀」という行事が行われ、日没までに祭式を終了するようにすることが記されている。

文献記録を見る限り沼田祇園祭において、山車という言葉が登場するのは明治以降である。明治18年の祭典記録を見る限り、「頭明治十八年度六ヶ町和解祭トシテ、上之町旧火ノ見跡へ、馬喰町へ向ケ神輿行在六ヶ町一同ノ処適宜ニ付、祭トシテ山車差出ノ事」とあるため、それ以前から山車が存在していたことが記されている。

明治時代のマンドウについては、一本柱で人形が乗る非常に大型なものであった。また、明治18年には、籤引きで巡行の順番を決めていたため、それ以前から大型なマンドウが巡行されていたと考えられる。

(2) 明治時代のマンドウ

電線という障害 江戸時代から明治にかけてマンドウは、徐々に規模が大きくなり明治30年代になると、祭典地域では電線が設置される。この電線が大きくマンドウ

の巡行へ大きな妨げになる。明治32（1899）年の「上之町祭典録」には電線の影響が窺える（参考資料3参照）。

「上之町祭典録」の明治32（1899）年の記録によると雨により坊新田町の道でマンドウが進めなくなり、マンドウを巡行していた4か町は坊新田町へ行くことを省略するよう申し出た。しかし、坊新田町はこれに対して「後年へ悪例ヲ遺ス」と撤回したことが記されている。その後、坊新田町と上町のマンドウが衝突し、マンドウの上から下駄などが投げられる騒ぎが起こる。それから坊新田町の人形の安部貞任の人形が電線に引っかかり破損したことが記されている。この記述から、明治32（1899）年には市街地に多少電柱が設置されていたと考えられる。また、マンドウの上から下駄や小石などが投げられたことから、マンドウの上に電線除けのために人がいたと予想できる。また、「上之町祭典録」の明治38（1905）年の項目には、上之町の人形が電線に引っかかったことが記されている（参考資料4参照）。

この記録によると、花車が電線に引っかかり破損し、修繕して須賀神社に奉納したと記されている。また、雨により道が悪くなり巡行が困難になったことが記されている。

電線への対策 このようにマンドウに人を配置して、電線を除けることが行われていた。しかし、その後この電線の設置がマンドウの形態に大きな影響を及ぼす（参考資料5参照）。明治41（1908）年の記述には、電線の設置によって町内にとってかなりの苦悩があったことが窺える。これの記述には、「極力旧来の美観を傷わぬ様講究した」とあり、かつてのマンドウの形をとどめようとしていた。上之町では、電線の高さを測量して高欄を上下できるように改良したことが記されている。また、「スエズ運河の富士艦みたやうに慥に列強イヤ各町の羨望せられた処だろう」と他町内から羨望の目で見られていたことが記されている。一方で、電線をもたらした影響はマンドウだけではなかった（参考資料6参照）。

このように、かつての祭礼で幟が飾られていたが、電線が設置されて以降幟を飾る家が少なくなっていることが記されている。また、マンドウも各町内で大きさを縮めたとある。一方、下之町では、上之町と異なる改良が行われていた。先ほども引用した『沼田万華鏡』三号に記載されている下之町の座談会に、電線によるマンドウの変化が記載されている。

一下之町の進取積極的な気風によって来った原因がなにかわかるような気がいたします。（略）次に祭りに関するお話をどうぞー

「山車について大正六年沼田ではじめて四本柱形式を採用したのが下之町ではないかな。多分大正堂の永井万吉さんのアイデアだと思うが。」

「それに牛を使ってまんどうを曳かしたのも下之町が皮切りと思う。本音を打ち明ければまんどうを引く人が少なくなったため、その応急策として考えたのだが、二、三回実施したと覚えています。」

（略）

四十一年の電線架設に伴いまんどうの高さは大きく制限された。それでもまだ昔のスタイルは忘れかねて上勾欄を上げ下げできるじくろを取りつけて原型をでき

るだけ保つように努力したものの、大正六年に下之町が今日のまんどうに見られる四本柱形式へ移った。

ここではじめて同町の思い切った企画によって後年主流となった形式が採用された。その頃はあまりにも異様な形なので、町の人々は「品のないまんどうだな」と冷笑したが機能性にまさる四本柱マンドウはやがて全町とり入れるようになった。〔沼田郷土研究会 1976 35—36〕

この座談会では、大正6（1917）年に下之町が四本柱形式のマンドウを作成されたことが記されている。また、当時の人びとから「品のないまんどうだな」などと冷ややかな視線で見られていたとされている。下之町が四本柱にした理由としては、電線が設置されたことへの対応策であった。

明治時代から大正時代のマンドウの変化を見てみると、明治時代は電線の設置により大きくマンドウに影響を与えたことが記されている。上之町のマンドウでは、高欄を上下できるように改良が行われた。また、それ以外の町内ではマンドウを電線より低くするなどの工夫が行われていた。大正時代になると下之町がマンドウを一本柱から四本柱のマンドウに改良したことが座談会の記事に記載されている。下之町は、それ以前は上之町と同様に高欄を上下させる様式を採用されていたが、町内の人の提案により四本柱のマンドウが採用されたとある。

明治時代では、一本柱のマンドウが巡行していったが徐々に高欄が上下するなどの工夫が施された。これから四本柱で人形を支えるマンドウが登場する。電線が設置される以前のマンドウは、現在の江戸型山車とは異なる形であった。この電線が設置されて以降、江戸型山車に近い形態に変化していく。

（3）マンドウの転換期

車マンドウの登場 明治時代から大正時代にかけてのマンドウは、電線によりマンドウが改良されていった。その後、沼田まつりに登場するマンドウは一本柱に車輪が4つついたものから、電線の設置によりその姿が大きく変化した。その後、昭和期に入りさらにマンドウが変容することになる。「中町祭典記録」の昭和9（1934）年によると、大正9年にマンドウについて記されている（参考資料7）。

この自動車マンドウとは、トラックを飾り付けて山車に見立てたものである。このクルマンドウに変化した理由として、祭典費用と安全性により祭典費用が抑えられたことが要因であると言える。また、「コヽニ最モ近代的スピード」とあり、審美性よりも技術的な要因を行ったことが窺える。また、昭和23年の祭典録には、「七月二十五日区民全部ノ世論調査ノ結果約八割ノ賛成者有リタルニ付キ、其ノ内ヨリ世話人ヲ選挙シ、山車ヲ造リテ八月三、四、五ノ三日間ノ夏祭ヲ盛大ニナス」とあり、地域住民たちによる自動車マンドウへの飾りつけが行われていることが記されている。また、他の町内でも自動車マンドウが採用された理由に関しては、先ほど引用した下之町の座談会にも語られていた。

自動車応用のまんどうは、昭和八年下水道工事のため道路状況がきわめて悪い時、中町が採用したのが沼田におけるそもそものはじまりだった。たしかに引き手も楽し人数のれるが昔のまんどうを知るものにとってはなんともやり切れ

ぬ感じのする運搬車といったものだった。もはやこの段階にいたっては完全に伝統は崩れ去り、そこにあるのは便宜主義的な近代まंदうの姿だけとなってしまった。〔沼田郷土研究会 1976 85—86〕

沼田まつりのマンドウは、一本柱のマンドウから四本柱のマンドウに変化し、其の後自動車を利用した自動車マンドウに移り変わっている（写真3）。この自動車マンドウから現在のマンドウに映るきっかけは、道路事情の変化と沼田祇園祭から沼田まつりへ変化していく過程において起こったことと考えられる。

自動車マンドウから江戸型山車へ 現在、沼田まつりで巡行されているマンドウは、唐破風の屋根がついた三段せり上がり式の山車、俗にいう江戸型山車という形態になっている。昭和47（1972）年に上之町山車が、昭和48（1973）年に下之町、昭和49（1974）年に材木町、昭和51（1976）年に西原新町のマンドウが次々と新造する。その後も、昭和52（1977）年に上之町がマンドウ、同年西倉内町、昭和53（1978）年に東倉内町がマンドウの新造を行った。

このマンドウの新造とほぼ同時期に、祭礼には大きな変化が起こっている。昭和33（1958）年に神社神輿が暴徒と化す騒ぎがあり、昭和どの間は祭礼の規模が縮小した。神輿渡御は、昭和40（1965）年まで中断となる。そして、昭和45（1970）年に沼田まつり産業祭に吸収され現在の沼田まつりとなる。この沼田まつりとして祭礼が再構成された後に、各町内の山車の新造が相次いで行われている。

機能と江戸型山車化 また注目すべきは、四本柱のマンドウが採用された際、「品のないまंदうだな」と町内の人びとから言われたことが記されている。また、自動車マンドウについては、座談会で「完全に伝統は崩れ去り、そこにあるのは便宜主義的な近代まंदうの姿だけとなってしまった。」と語られていた。いずれも、機能面を優先したマンドウは批判されている傾向にある。また、マンドウが増加した時期が祭礼の衰退期と重なる。いずれもマンドウに江戸型山車の様式が導入されるようになったきっかけは、マンドウの見目の他、他町内の人への意識があったと考えられる。また、あえて江戸型山車のかたちを造る事により、新造のマンドウを批判されないようにしたことが考えられる。

また、沼田祇園囃子の競演会には毎年京都祇園祭の長刀鉾町の関係者を招待したり、籤取式や注連縄切などを模倣したりしている。これらも、同様に昭和40年代に新たに創設された行事である。これらは、外部の祭礼や山車の様式を取り込むことにより、祭礼の歴史性や正当性を表彰しているのではないかと考えられる。新たな様式を導入することは、外部的の祭礼との関連性を創造しているのではないかと考えられる。

おわりに

本章では、沼田まつりのマンドウの変遷について考察を行った。沼田まつりに登場するマンドウは、江戸時代は上部に人形が飾られている形状であったと考えられる。当初のマンドウは、肩や手に持って巡行する物である。その後、マンドウが巨大化していき、明治時代には10メートルを超す大きさになっていったと考えられる。その後、明治時代になるとマンドウに変化が生じていく。その変化の要因は、市街地の電線

の設置である。この電線の設置により、マンドウの巡行に大きな障害を生じることになる。このことについては、「上之町祭典録」によると「慣れては然程感ぜぬ様になるやならぬに又々乗込んで来たのは電話と云ふ奴と電灯ちう家並の軒端近くへめでそうもない太い糸を懸る奴さ、二条山上の電信より遥に行く十倍の力ある障害物よ」とあり、電線がかなりの障害となっていることが分かる。しかし、上之町はマンドウの高欄を上下できるように加工が行われていたことが指摘できる。その後、大正時代に入り下之町が四本柱のマンドウを製作する。このマンドウの製作は、各町内からは品の無いマンドウと揶揄されていたが、その後四本柱形式が他町内に広がることになる。電線によるマンドウの変容に対しては、かつてのマンドウの姿を守りながら新たな構造を導入するような傾向がある。一方、新たな形式を導入した場合、初期に他の町内から非難される傾向にある。つまり、どれだけ元の形を保ちながら構造を変えるかに力点が置かれている。

その後、マンドウは自動車マンドウへと変化していく。この自動車マンドウになる以前は、牛に曳かせるなどの方法がとられていた。牛に曳かせるようになった経緯は、人で不足の緩和策として牛にマンドウを曳かせるということが行われてきた。その後、トラックを応用した自動車マンドウが各町内で広まっていく。自動車マンドウが導入されて経緯には「意外カラ意外ニ発展シイル恐慌ノ中ニアリテ我等ハ多額ノ費用ト大ナル犠牲的精神トニ依リテ採点執行ノ命ヲ受ケ、コヽニ最モ近代的スピードト、安全性アル自動車ヲ使用シタル花車ハ当町ニアッテハ之ヲ嚙矢トシ」となっていることが記されている。中町が自動車マンドウを採用した経緯については祭典費用の縮小と機能性と安全性の三点によって行われたものである。他町内に自動車マンドウが採用されていったのも、その三点に重きを置いていったものであると考えられる。

本章では、古文書などの文字資料によってマンドウについて考察を行った。昭和後期から行われた各町内のマンドウの新造については、沼田まつりに再構成されることと密接に関わりがあると考えられる。しかし、今回は昭和後期のマンドウの新造と祭礼との関わりについて明確な根拠を見つけ出すことはできなかった。今後の課題として、沼田まつりの再構成とマンドウの新造について研究していきたい。

参考資料 1

廿三日 (略)

一天王様下ノ町御仮家江御入被成候而又々雨降、暮時過雨止ミ候間、踊足揃始メ可申申度いたし候処、又々雨降、当日踊揃止いたし、自分青木広助様其段御届三行、青木様勇太方へも下目附へ行候秩序二届濟候様申聞呉候成申遣候間勝野勇太様御届いたし、下目附若松勘介様へ今晚踊止メいたし、町役所へ御届申上候様届帰ル、当年ハまんとウ材木町子供まんとウ計、外町ハ出来不申候〔沼田市史編さん委員会 一九九七 三〇一〕

参考資料 2

(明治十八年)

須賀神社祭典約定書

一 当明治十八年度六ヶ町和解祭トシテ、上之町旧火ノ見跡へ、馬喰町へ向ケ神輿行在六ヶ町一同ノ処適宣ニ付、祭トシテ山車差出ノ事但本年三丁、馬喰町山車差出ノ事九月廿七八九 (略)

右五ヶ年間付祭ノぎハ社之町ハ毎年鍛冶町坊新田馬喰町其年ノ都合任セ

三ヶ町ノ内ニテ山車本ツ、奉納ノ事

一 祭日三日間ノ事、但八月十一・十二・十三

一 初日神輿御迎山車ノ儀ハ午後二時ヲ期トシ間ニ合次第差出ノ

事

一 中日山車奉納ノ順次ハ毎年圖引ヲ以テ定ムキ事

但老番或ハ式番圖ト雖モ後番温順ニ先着ヲナシ、先番遅速後番ヲ止メ置候様ノ節ハ後番ハ先番ニ換リ、奉納濟ノ上ハ他町ニ関セ

ズ引取不苦候事

一 山車差出シタル節ハ沼田町各町へ持廻リノ儀ハ、各町自々ノ都合ニ任セ、適宣巡行其制限ハ不立事

一 末日神輿還幸ニ付御送山車ノ儀ハ、午后二時ヲ以テ旅所引上ゲ、日没迄ニ祭式取納ノ事

但供奉人足ハ同日正午十二時旅所揃ノ事〔沼田市史編さん委員会 一九九八 三一四〕

参考資料 3

(明治三十二年)

祭典美香館無滞相濟シ候へ共、最終ノ夜大雨ニテ大閉口致シ候、依テ坊新田下ノ所悪路ニ付本年丈ケ除キ申度ト四ヶ町共同坊新田へ申込候へ共断然謝絶ト申ス訳ニハ御座ナク候へ共、グズグズ致シ居リ候内幸雨も晴レ候故後年へ悪例ヲ遺スモ如何ト考へ申込ラテツカイシ中町ト一致共同運動致シ大骨折リニテしばら漸く無事相濟ミ申候

此夜御馬出しにて摺違ひノ節、町内ト坊新田トニテ万灯ノ上モテ小シウ突有之、其後町内へ来リ角田亀右衛門氏表辺ニテ又々坊新田万灯ノ上ヨリ小石又ぞうり等投ゲタル者有之候由評有之、一時ハ警察署ニテも非常ニ心痛ノ結果、万燈一本ニ付巡查一人ツ、乗込マシル事ト成、無事ニ相濟候

右ノ天罰ノ然シムル所カ、町内へ石又ハぞうりヲ投ゲタル坊新田ノ万灯、安部貞任ノ首電話線ニ首かゝり致し候、大失体ニ有之候

其他ハ記録ニ遺可き事ナク無滞相濟、目出度シ

上ノ町万歳 上若万々歳〔沼田市史編さん委員会 一九九八
一二〜一四〕

参考資料4

(明治三十八年)

二日目ハ曇天なりし故急ぎ須賀社へ奉納し、其時我町花車ハ御馬出し四辻ニテ電話線へ引かけ破損せしめたりしが其まゝ奉納、明治二にて修繕し、直ニ郷社奉納す雨降り出し帰途ニ就く時ハ大雨ニテ大閉口せり、此日雨中々強く午後無論止む見込みなき故世話人数人他小供等金盛座へ芝居見物ニ行シニ午後七時頃より雨止ミシ故各町世話人より申込みあり村社六ヶ町丈け花車廻す、雨後とて道悪しく特ニ坊新田ハ殆ど田の如く大閉口なりしが兎ニ角無事巡廻せり〔沼田市史編さん委員会 一九九八 二二〕

参考資料5

四拾壹年祭典概況

本年は前に述べた通り祭典史上特筆すべき改革が行われたと同時に此祭典に尤も重き一大要素として神も人も歓喜せる山車をして革新せねばなぬま場合となつた、此革新は山車ニ対して喜ぶ出来事ではなく寔に困つた出来事なのである、斯う書と沼田文化史の一頁を飾る様だがドーモ開化は凡ての旧慣例は勿論別けて祭典に対しては敵である、徳川のお江戸の花見が明治の東京に画く事の出来ぬ様なものだらう

昔源頼光が退治したと云ふさゝ蟹が明治の御世に誕生して文明世界の目抜の場所の青天井に巢を懸た、併し主上を悩せ奉らざ

るのみか却て嘉みせられ対して少なからぬ妨害を加へたが、慣れでは然程感ぜぬ様になるやならぬに又々乗込んで来たのは電話と云ふ奴と電灯ちう家並の軒端近くへめでそうもない太い糸を懸る奴さ、二条山上の電信より遥に行く十倍の力ある障害物よ

電話は既設、電灯は工事中、まだ蝨る程の価値もないが近き将来の式三ヶ月の后には光るであらう。

斯様な訳沼田町の姿も一寸昂て慥に都会らしくなつた、洵に文化は難有が山車にとつては最も不都合な奴に舞込れて困難く大困難に立到た。

独り我町の山車の困難でなく沼田全町である事は云ふ迄もない、各町何れも工夫の余地がないと早極してか棒を矮くし心棒を切約て電線下の通行を容易ならしめた、然るに我町は山車の美観を戦くは唯にも知れ切つてる話であるからそう軽拳しなひ、極力旧来の美観を傷わぬ様講究した、先づ測量隊を派して横たう電線の最低が地上より何十尺と踏査して、而して迫出式を充分に活用し上下の勾欄を具すことを得伸縮自在で難なく電線下の通過をなした、恰もスエズ運河の富士艦みたやうに慥に列強イヤ各町の羨望せられた処だらう、吾町が独り旧来の様に上下の勾欄を用ひたと云ふのは最も誇となすに足る巧技であるや、これはしたり、電線の為に山車の工夫ニ力瘤を入れて長過た、お退屈さま、扱本文を端折て語りましやう〔沼田市史編さん委員会 一九九八 二六〜二七〕

参考資料6

明治四拾貳年

祭りは三日間晴天で水菓子やは到る処繁盛を極めた、幟は電柱と取替へられたも同様昨年より又少なくなつた、幟りを戸々で樹ると云ふ慣例も遂に消へてしまうと思ふ山車も昨年よりより低き電線の為又其丈けを縮めた、併し町内の格別手数も係らなかつた、伸した処が十六尺で縮めた処が十尺だ、昔の俵があるのみである〔沼田市史編さん委員会 一九九八 二八〕

参考資料7

(昭和九年)

著シク混頓トシタ財界・農村不況、商工業ノ没落等アラユル方面カラ財界推移ヲ見ルニ、意外カラ意外ニ発展シイル恐慌ノ中ニアリテ我等ハ多額ノ費用ト大ナル犠牲的精神トニ依リテ採点執行ノ命ヲ受ケ、コヽニ最モ近代的スピードト、安全性アル自動車ヲ使用シタル花車ハ当町ニアツテハ之ヲ嚆矢トシ更ニ費用ノ点ニアリテモ無軌道の予算ヲ廢シ下及的ノ少額費用又従来ノごとき喧噪モナク円満裡ニ行ヒエシ祭典ハ、エボクメイキング、ナリシハ一重ニ区民一般ノ絶大ナル支持ニ依ルモノニシテ区民諸子ニ感謝スルモノ也〔沼田市史編さん委員会 一九九八 五九〕

表 1 各町内のマンドウの一覧

町名	氏子團	組名	人形	その他
郷治町	須賀神社	い組	燕姿鳴尊	戦前は毎年、木枠のマンドウを出していた。 戦後は、自動車マンドウを出していた。 人形は鐘撞様・源義経などで岡本屋から借りていた。 平成6年に中町のまんどうを買い受けた。
下之町	須賀神社	に組	雷	引手不足のために、牛にひかせたことがある。 大正9年に自動車マンドウを導入した。 昭和48年に浜川市寄居町の大工に頼んで新調した。 これ以降、各町内で新造がはじまった。
坊新田町	須賀神社	ほ組	茨木	明治22年から毎年出した。 昭和30年代には二台出し、同30年前後は自動車マンドウでに切り替わった。 同年56年に昭親会の手によりマンドウが新造され、翌年か現きたされた。 子供神團は、昭和46年に東京都上野の南部屋五郎右衛門商店から購入。
中町	須賀神社	(な)組	勸進帳	明治時代は、真中に太い柱を立て、その上に高欄、その上に右を乗せて波玉を刺し一番上に人形を置いた。前の目隠しを付け、その両側に麻を垂らして「のし」とした。 電線が架けられて、高くできなくなり四本柱にした。 昭和6年に自動車マンドウを初めて出した。 昭和37年清水町から彫刻を買い受けて、平成五年まで使用した。 平成6年に富山県井波町南部白雲作のマンドウができる。
上之町	須賀神社	可(か)組	小鍛冶	大正末に浜川の南町からか受す。昭和37年まで使用した。 昭和52年に高崎市の高橋工務店製作のマンドウを購入した。
材木町	標名神社	さ組	橋弁慶	明治、大正時代にも出ていた。昭和49年に従来あったマンドウと彫刻を合わせて新造した。 昭和57年に現在のものになった。
原新町	標名神社	は組	鏡獅子	明治、大正、昭和と原新町としてマンドウを出してきた。 昭和32年、どんどん焼きで焼失した。 昭和48年、ラック山車として祭礼を復活させた。
高橋場町	標名神社	た組	鐘撞	記録によると、明治12年にマンドウを出し、大正12年には新造している。 昭和48年に自動車マンドウを、昭和51年から商工会議所青年部から譲り受けたマンドウを出した。 平成2年に、絵標のマンドウが町内宮大工・綾谷至(彫刻は龍林の寺田秀麿・幸次作)により完成した。
栗倉内町	標名神社	ひ組	小松姫	戦後は、昭和30年代前半にかけて自動車マンドウを出し、昭和53年にマンドウを新造した。 昭和28年にマンドウが新造された。
西倉内町	標名神社	西組	忠信	大正19・20年、昭和15年にマンドウを出した。戦後は27・28・31・32年と自動車マンドウを出した。昭和52年に上之町が新造するおりに買い受けた。



写真1 沼田まつりのマンドウ



写真2 明治時代のマンドウ（上之町）



写真3 自動車マンドウ（西倉内町）

結論—祭礼における権威・権力という視点—

1 熊谷うちわ祭の中にみる鳶、旦那衆、若連

(1) 旦那と鳶との関係

熊谷うちわ祭の旦那衆と鳶 本論文では、埼玉県熊谷市の熊谷うちわ祭における鳶、旦那衆、若連の動的な関係性について分析した。本章では、ここから祭礼研究における権威と権力という視点について検討していきたい。

従来の鳶の研究では、職業としての鳶で生計を立てていた人びとが対象であった。熊谷うちわ祭の鳶をつぶさにみていくと、現状として旦那から仕事を提供してもらって生活をしているかつての鳶のような生活をしている人は存在しないことが明らかになった。彼らは、建築会社などを起業して勤務したり、鳶と関係のない職業で生計を立てたりしている。また、町内や旦那である総代との関係も、現在は祭礼の中だけの関係である。そのため、現在の鳶は、職業としての鳶という存在ではなく、祭礼の1つの役割としての鳶である。現在の熊谷市内の鳶は、熊谷うちわ祭が主の活動となっており、祭典期間中は熊谷うちわ祭に関する業務を優先して行われている。

旦那衆に関する先行研究では、町内で経済力や権力をもつ旦那衆が祭礼の指揮を執り、祭礼の資金援助を行い、祭礼を支配しているとしていた。彼らは、旧家や大店の年長者（隠居者）の男性で、町内においても特別な立場にいる人びとであった。この総代は、熊谷うちわ祭では資金を提供したり、町内の祭礼の統括をしたりする役割があった。また、総代の役職に就けるのはごく限られた名家だけであった。祭礼以外でも、彼らは日常的に旦那衆として鳶に仕事を与えて、手間賃などを提供する人びとであった。その一方で、熊谷うちわ祭の総代と鳶の関係性に注目すると、鳶と旦那との交渉の中で権威が創造していることが指摘できる。かつての熊谷うちわ祭は、旦那の下で祭事掛や鳶や祇園会が祭礼を行っていた。伝統的な旦那衆は、直に祭典組織の中に入って指揮を執るということは、ほとんど行われていなかった。その中で、実際に祭礼を取り仕切っていたのは、山車・屋台を巡行させる組頭であった。彼らは、旦那である総代から、山車・屋台の巡行を任せられて、祭礼を行っていた。また、若連は、祭礼の際に組織として存在していた。

人口減少と旦那衆の解体 それらの構造は、その後熊谷市内の人口減少をはじめとする事象により、旦那衆の解体が起きて大きく変化していった。その流れの中でも、鳶は根強く残り、祭礼に大きく関わりを持っていた。その後、鳶が町内の人びとに旦那としての振る舞いを促すようになり、現在の総代の制度が成立したと推測できる。旦那衆についての先行研究では、旦那の経済を中心とする大きな力関係によって祭礼が成り立っているとされている。しかし、熊谷うちわ祭ではそれとはまったく逆の力関係で祭礼がおこなわれているのである。京都祇園祭の場合でも、町内で直接作業を行う作事三方を雇用している。熊谷市内の鳶たちは、旦那衆に雇用されることにより祭礼に携わり、報酬を受け取っていた。その後、この伝統的な旦那衆が消失もしくは町外に移住していき祭礼以外の場で鳶の活動は大きく変化した。

かつては、その町内の旦那衆の権威を持っていて、それが職人に一部が譲渡されて祭礼が行われていた。その一方で、旦那衆はほとんど山車・屋台の巡行には参加していな

かった¹。いずれも、直接の巡行に関しては、組頭に一切が任せられていた。その上で、組頭は自町内を自由に山車・屋台を巡行していた。また、他町内で山車・屋台を移動させる際は、その町内の組頭を介して巡行を行っていた。これは、祭典期間中に旦那衆から祭礼の一切が任せられる仕組みになっていた。一方で、旦那衆と若連には直接のつながりはなく、ある程度たつと鳶になるか、祭礼に関わらなくなっていた。現在でも、祇園会は鳶と同等の活動をするところがあるが彼等には報酬などが無いのも、雇用関係にないことが理由である。また、町内で活動する鳶は、組頭と副頭は鳶組合や七月会に加入している鳶職であることが限られている。しかし、その他の人びとは、鳶以外の人びとでも町外者でも組頭の許可があれば鳶として活動が出来る。

(2) 権威を創る目的

熊谷うちわ祭では12か町ごとに経済的な格差が非常に明確である。特に、駅に面している町内と郊外の町内、面積の大小によって集められる寄付金に格差が存在する。しかし、山車・屋台は鳶が操縦することになっており、どの町内も組頭を雇い巡行を行っている。そのため、祭礼を実際に進めるにあたり、町内をまとめる旦那衆が必要となってくる。さらに、1970年代以降祭礼の規模は急速に拡大していく中で、より各町の結束が必要不可欠となってくる。

また、ある祭典関係者は「熊谷うちわ祭で、鳶が1年の稼ぎをする」と語っていたほど、鳶にかかる祭礼の費用は非常に多い。熊谷で鳶が生き残っている理由として、熊谷うちわ祭のような大規模な祭礼があることが1つの要因ではないかと考えられる。一方で、熊谷うちわ祭の金銭面を支えた総代は、徐々に熊谷市近郊に移り住むようになり、町内とのつながりが減少していった。これは各町内で状況が違うが、旦那衆であった総代が近郊に行った場合、近郊の住宅まで鳶が出入りに行っていたという。このように、旦那衆が近郊に移り住んだ町内は、祭礼の時に再び町内に戻ってきてもらい、総代をやってもらうことができる。しかし、旦那衆が完全に消滅、もしくは元の町から分裂して誕生した町内では、旦那を連れ戻すことは不可能である。そのため、鳶による旦那衆の創造が行われる。

鳶の存続と祭礼 福澤昭司が調査した長野県松本市の事例では、松本の鳶はかつての商家との関係は断絶しているとした。このような現状になった要因として、熊谷うちわ祭で鳶に手間賃を払って祭りを任せる仕組みが変わらずに残っていることが原因であると考えられる。熊谷うちわ祭は、現在でも鳶と旦那である総代との関係が厳格に守られている祭礼であり、熊谷うちわ祭自体が、鳶と旦那である総代を結びつけている。その他にも、商店への出入りや町内での雑務を行うなどの鳶として役割が大きく衰退していく中で、熊谷うちわ祭やイベントなどで熊谷市指定民俗文化財の木遣りや纏振りや梯子乗りなどを公演する保存会へと変化していったことが指摘できる。現在の熊谷市内の鳶は、職人でありながら木遣りや纏振りなどを行う芸能の伝承者という性格が非常に強くなっている。熊谷木遣りが文化財指定されたため、熊谷市内で行われる郷土芸能大会

¹ 2019年7月21日の熊谷うちわ祭の昼の休憩時間に、ある町内の組頭から「昔の旦那は、巡行や祭りに頻繁に来ることがなかった。ほとんどが芸者遊びをしていたよ」と教えられた。また、「最近、何かあっては困るから、というより昔の旦那じゃなくなったから、巡行についているんだ」と語っていた。

に鳶が登場して、ステージ上で木遣りと纏振りを行うことが多くなった。鳶の技能が芸能化していった中で、鳶たちは自分自身が伝統的な鳶であるという認識を強く持っている。また、かつての伝統的な鳶から変化していき、さまざまな業種に関わる人びとが祭礼に加入していった。その中で、熊谷の鳶は①建築業の職種、②活動する場（帳場）の存在、③木遣りや梯子乗りの3点を持っている人が鳶である。

若連から総代へ 昭和34（1959）年からお囃子方が来なくなり、町内で独自のお囃子会が結成され、お囃子の披露がされるようになった。それまでは、現在のような大音量のお囃子ではなく、比較的ゆっくりとしたテンポで鉦もするようにして演奏が行われていた。お囃子会が結成されて以降、他町内を意識してお囃子のテンポは急速に早くなり、笛の音がかき消されるほど大きな音で鉦が叩かれるようになった。熊谷うちわ祭のお囃子が大きく変容した理由については、他町内を意識したお囃子の競争が行われるようになったことである。このように、かつては鳶の下で活動していた若者たちが、祇園会になって以降山車・屋台上でお囃子を披露する花形的な立場に変容した。これらの祇園会と鳶の関係の変化は、旦那衆の解体による町内と鳶との関係性が薄れたことが大きな要因である。その後、町会によっては祇園会から総代へ昇格する年齢階梯制が導入されていった。

かつては、総代になれる家は一部と限られていたが、人員の不足により名家でもない人でも総代になることができるようになった。それにより、一部町内では鳶と若連との軋轢が生じている町内もある。また、各町内でも未だに名家が歴任を行っている町内もあり、一概に全ての町内が同じ状況でない。そのために、年番町の事情によって毎年の祭礼の会議では議論がまとまらないこともある。この年番制度をめぐっては、廃止して実行委員会を中心とする運営に変更すべきだという意見もある。一方、「これが熊谷の町衆の祭りだから」と言って、年番制度の存続を望む声も出ている。

いずれも、この旦那と鳶、そして年番制を維持していることが熊谷うちわ祭の関係者の誇りとなっているところがある。

（3）大総代の創設

職人の不在の町内 京都祇園祭の大工方と関東地方の鳶などの職人に比べると、町内との関連性がほとんど存在しないことが明らかにである。また、実際に大工方として雇用されている人びともほとんどが大工方の棟梁の人間関係で集められているため、組織的な職人集団と異なっている。関東地方の場合、町内に職人が在住しており、町内独自の職人集団が組織されている。一方で、京都の場合では職人は町の外から通いで来ている。職人が、外部から来る理由として、京都では町の面積が小さいため、職人が在住できないためである。また、かつての祇園祭では、宮大工が集められていた。現在、非職人の大工方が増加していく中でも、町内から雇用されている形態はそのまま維持されている。そのため、町内の人びとが持つ発言権は非常に強い。いずれも、船鉾町では作事三方は町外から来た人びととされている。

かつて熊谷うちわ祭では、年番町の総代長が祭礼を統括していた。その後、大総代という役割が設立された。これは、自町内とはほとんど関係なく祭礼一切を仕切り総代である。この大総代は、毎年の祭礼の顔となり祭礼を統括している。年番町の総代長が祭礼を取り仕切る仕組みから大総代制度が誕生した背景については、祭礼の規模拡大によ

る人員不足が原因である。かつての総代は、10人以下で町内の祭礼の費用が精算できた。その後、それまで祭礼にかかわりのなかった本石区と石原区が祭礼に参加、山車・屋台の増加、観客の増加で総代の責任と費用が増大していった。このため、年番町の総代長では祭礼のすべてを監督することは不可能になっていった。以上の背景により、大総代が誕生していった。

この大総代制度に関しては、町内の行事と年番の行事を分けるということに成功したものの、人手がない町内では年番総代と町内の総代を満足にそろえることができず、より町内で人員の格差も増えている状況にある。また、面積が小さく、人員のいない町内では祇園会の経験者を総代にして人員を確保している町内も存在する。

俯瞰する存在 船鉾町の役員は、祭典期間中は寄付金の清算や来客の接待などを中心に行っている。一方、作事三方では力仕事などを中心に行っている。また、作事三方でも、他の役割がどのようになっているのか明らかでないため、何かしら調整する人が必要である。船鉾町の場合は、職人は外部から来るため、仮に何かしらの問題を起こした場合、雇止めをすることができる。一方、町内の人間は仕事がない分、町内全体を俯瞰することができる。そこで、職人に指示を出したり、行事を順調に進行させたりすることができる。町内在住者（特に委員会の役員）が権威と権力を保持していることができる。この権威と権力に関しては、町内の中という極めて狭い範囲のものであるが、この町で活動する人びとにとっては大きな影響がある。

祭礼の中で複数の町内が参加している場合、その全体をまとめるコーディネーターが必要不可欠である²。そのため、誰か指揮を執る人間がいなければ存続することが不可能になる。その中で、祭典期間中の旦那の呼び戻しと鳶による旦那衆の創造が行われていったと考えられる。その権威を示す事物の創造として年番札が造られた。

2 祭礼における権威付けと競争

(1) 観光化の影響

観光と競争 成田祇園祭では、見せることを意識した動きをみることが出来る。それは行事の統一であった。成田祇園祭における行事の統一は、各町内の若者連の揃い半纏、山車・屋台巡行の義務化であった。昭和40年代の成田祇園祭では、揃いの半纏を着用している町内とそうでない町内があり、若者連の衣装の統一がされていなかった。山車・屋台巡行も同様に、各町内で山車・屋台を引きだす町内と引きださない町内があり、統一がされていなかった。その後の成田祇園祭では、若者連の揃い半纏、山車・屋台巡行の義務化が定着されていった。これらの統一は、成田祇園祭を見栄えの良いものにしようとする動きがあったのではないかと推測できる。さらに、若者頭が絶対に一人で行動してはいけないことになっているなど、祭礼内の権力関係を視覚化がなされている。また、ほとんど山車・屋台巡行に関わりがなかった新勝寺との関連性を持たせることにより、行事の正当性を補完していることが言える。新勝寺側も、参詣客の確保にもつながっている。このように、大本堂前集合と山車・屋台巡行が祭礼と新勝寺の2つが集客

² いずれも、大総代には多くの権限を保持しているが、会議の設営や行事の進行などは、その下の副大総代を中心とする年番役員が中心となっている。また、町内の行事に関しては総代長が一切を差配している。

と権威性を創造が行われている。

先鋒と権力 祭礼において、権威や権力が表象化するのには、何らかの共通の目的を持つ集団が、同じ空間内で同じ行動をとった時である。新勝寺と関わりを持つのは、新勝寺を中心として各町内をまとめることに狙いがあったと思われる。成田祇園祭の場合、毎年必ずと言っていいほど、町同士の対立が起こる。その中で、先鋒という役職が誕生した。彼らは、自分の町内の自町内の山車・屋台を優位に巡行させるために他町内と交渉を行う³。この先鋒は、町内の若連の幹部と連絡を取りながら、交渉を行っている。成田祇園祭では、自町内の若者頭の意向をくみながら、幹部たちがその下の若い衆に指示を出し山車・屋台が巡行する仕組みがとられている。この先鋒は、若者頭から交渉を一任されており、先鋒の交渉次第によって巡行が大きく変わる。先鋒は、山車・屋台の巡行の際に、若者頭からの一任のもとで他町内と交渉を行っている。いずれも、先鋒は祭典期間中、その町内の若者頭の権威によって、各町との交渉と行っている。一方で、もしも先鋒が他町内との交渉を失敗した場合、若者頭がその町内に謝罪しに行くというかたちになっている。

つまり、若者頭から権威の譲渡が無い限り、その権力は全く効力を持たないということである。この権威と権力は、権威は権力に権限を与え、権力は権威から権限を譲渡している。

新勝寺の存在 若者連の権威と権力の関係以外にも、祭礼外の新勝寺の存在も祭礼をまとめる重要な存在と考えられる。

それまで、成田祇園祭では新勝寺は単なる集合場所であり、全町内共通の行事は行われていなかった。昭和54（1979）年に、新勝寺の意向により祭典初日に、全町内共通の法楽が行われた。これに対して、各町内から反対意見が噴出したものの、祭礼の存続のために新勝寺の意見を採用して正式な行事とした。これは、新勝寺を中心に立てることにより、各町内の均衡を保つことにその目的があったと考えられる。一方の新勝寺でも、成田祇園祭を寺の行事として取り込むことにより、参詣客を多く取得することができるという利点があるためであったのであろう。

（2）江戸型山車化と権威

江戸型山車の影響 成田祇園祭では、行事の統一と新勝寺との関連性の創造が指摘できる。沼田まつりのマンドウは、祭礼が沼田祇園祭から沼田まつりに変化した京都祇園祭との関連性の創造を行っていた。また以前の祭礼では、マンドウの江戸型山車化が起こっていた。いずれも、これは外部的に著名な祭礼の様式を導入することにより、他町内と差異化、また新様式の導入の批判を防ぐために行われたと考えられる。いずれも、外部的な存在の権威を利用することにより、祭礼の様式の変更を行っている。

沼田まつりのマンドウは、昭和30～50年代にかけて、現在のマンドウの形へ移行する。このマンドウの変化については、祭礼が沼田祇園祭から市民祭としての沼田まつり転換したことが大きな要因である。また昭和49（1974）年には、交通規制を懸けられるようになり、徐々に自動車マンドウから現在のマンドウに変化していったと考えられる。このマンドウの構造が変化するようになった要因は、巡行を円滑に行う目的

³ 自町内の山車・屋台を優位に行う以外にも、他町内と交渉して踊りの競演も行っている。

で構造が変化していったと推測できる。過去の祭典記録から、マンドウが停止することにより他町内とのトラブルが起きたことが記されている。そのためにマンドウの構造を変容させていったのだろう。また、沼田祇園囃子の競演会には毎年京都祇園祭の長刀鉾町の関係者を招待、籤取式や注連縄切など、京都祇園祭との関係の創造や模倣が行われている。これらも、同様に昭和40年代に新たに作られたもので、京都祇園祭との権威的なつながりを創造しているのではないかと考えられる。

4 都市祭礼の権威と権力という視点

(1) 視覚化される町内の権威と権力

見える権威と権力 本論文では、熊谷うちわ祭を中心に祭典組織の権威と権力の関係に注目した。それらの祭礼の中で、共通して言えるのは祭典地域や祭典組織における権威や権力を視覚化していることが指摘できる。例を上げるのであるならば、熊谷うちわ祭の年番札などである。いずれも、これは祭典組織内部の人びとと共に外部である観客に見せるということ意識している。

また、熊谷うちわ祭の場合、権威を司る旦那衆は現場におらず、現場にいる鳶がその権力を譲渡されて祭礼を行うという仕組みとなっている。また、祭礼が終了した場合、権力は旦那衆に戻されるかその場で消失している。

いずれも、これらの権威と権力とは、祭典組織をまとめ上げて祭礼を挙行することの能力である。いずれも、装飾品で目を引くことと同様に、組織をいかにまとめ上げるかということも自身の権威や権力を披露しているのではないかと考えられる。

権威と権力の領域 これらの権威と権力が働く空間は、熊谷うちわ祭の参加町内、その参加町内の鳶や若連などの集団である。そして、その目的は祭礼の執行、もしくは自町内の優位性の表象が目的である。それらの目的は、集団を束ねる存在なくしては達成できないのである。その中で、はじめに権威が創造されて、その権威から権力が譲渡されて初めて目的が達成されるのである。これは、熊谷うちわ祭でいう、旦那衆が存在しない町内で旦那となる人が創造され、その人から鳶に山車・屋台を巡行させる権限が譲渡されることである。これらの存在に関しては、大総代も同様に創設されたと言える。なぜ、このように権威の創造が行われるのかというと、熊谷愛宕八坂神社の存在が影響している。熊谷愛宕八坂神社は、明治時代に無格社とされている。現在も、熊谷愛宕八坂神社は兼務社となっている。そのため、神職が常駐しておらず、神社側の人間は不在である。そのため、熊谷うちわ祭の中心人物となる存在が不在のまま祭礼が運営されている。そのせいで、「熊谷うちわもめ祭」と皮肉が出るほど、収拾の付かない揉め事が多く起きている。それらを鎮圧化するために、大総代を設けているがほとんどが祭礼にかかわりのない人が大総代を歴任するため、それらが鎮圧化されていないのが現状である。また、権威は実態がないため、それらを表象化させる際には必ず何らかの事物と結びつく。その存在こそ、大総代が受け継ぐ年番札や年番送りの見栄切りとなっている。

(2) 外側の権威と権力

外部から来る権威と権力 熊谷うちわ祭のように祭礼内部で発生する権威・権力が存在する一方で、外部から伝わってくるものも存在する。それは、成田祇園祭や沼田まつりの事例から読み取れる。また、沼田まつりの場合は、沼田という地域の中のものでは

なく外部的な権威を取り入れることによって、祭礼を盛り上げようとする動きがある。これらの権威と権力は両方の合意がないと成立しない。これらの祭礼では外側からの歴史やその祭礼内で権威がある様式を採用することによって、新たに行うことに対する批判の制御ができていていると考えられる。

権力を描くということ 赤坂憲雄は、『現代民俗誌の地平2 権力』の序文の中で、民俗や伝承については近代の制度や行政などの権力や権威が絡んでいるとした〔赤坂 2004 3〕。また、赤坂は、かつての民俗学では柳田以来「村八分」について関心を持ち、調査項目に含めてはきたが、それをムラの秩序維持装置として読みほくような試みは希薄であり、「ムラの政治を迂回してきたのである。」とした〔赤坂 2004 5〕。また、赤坂自身「民俗学のフィールドにうごめく見えない政治・権力を浮かび上がらせ、記述する知の方法と言ったものは、いまだどこにも存在しない。」と指摘している。これは、現在まで権力を映し出す民俗学の方法がないという事である。

いずれも、本論で鳶と旦那と若連の動態的な観察から、都市祭礼における権威と権力の発生と創造を見ることができた。今後、都市祭礼の研究を行う上で、この権威と権力という視点は重要になっていくのではないかと考えられる。一方で、この祭礼研究において権威と権力という視点を見るためには、社会学や政治学の研究蓄積も参考に必要であろう。今後、祭礼を調べていくうえで、この権威と権力という視点をもとに研究を続けていきたい。

付記 最後に本稿を執筆にあたって、藤間憲一様をはじめとする熊谷うちわ祭協賛会の皆様、石山洋一様を中心とする第一本区の皆様、棚澤正行様を中心とする第二本町区の皆様、大谷公一様を中心とする筑波区の皆様、田代充雄様を中心とする銀座区の皆様、栗原弘様を中心とする弥生町区の皆様、平成26年(2014)に成田祇園祭に加えていただき、レクチャーいただいた団長の鈴木正崇先生、久保田滋子先生、板橋春夫先生、村島義則さんをはじめとする土屋地区の役員の皆様、土屋青和会の皆様、沼田まつりを調査するに当たりご指導を頂きました金井竹徳様、伊藤駿様、船鉾町の大工方についてご紹介いただきました佐藤弘隆様、大工方の作業について教えて頂きました辻本正夫様、その他の船鉾町の皆様、そして本稿を執筆するに当たりご協力いただきましたすべての方々に御礼の言葉を持って本論文を終了する。

〈参考文献〉

- 赤坂憲雄 2004 『現代民俗誌の地平2 権力』 朝倉書店
- 飯塚 好 1986 「町場における鳶職の役割—川越の鳶職を例として—」『埼玉県立民俗文化センター研究紀要』3号 埼玉県立民俗文化センター
- 池上彰彦 1978 「江戸火消制度の成立と展開」『江戸町人の研究』5巻 吉川弘文館
- 伊藤雅一 2015 「8章 社会学的な都市祭礼・祝祭研究におけるシンボル分析論—伝統概念を手がかりに—」『千葉大学大学院人文社会科学研究科研究プロジェクト報告書』288号 千葉大学大学院人文社会科学研究科
- 林慶澤 1998 『日本の地方都市における商家の家業と社会的関係—千葉県佐原市の事例分析』 東京大学大学院1998年度博士論文
- 岩井香奈 須藤早希 松崎多宏 石塚諭 高橋信博 2016 「熊谷うちわ祭の意義と位置づけ—立場と地域的差異に着目して—」『自然と暮らし 2015年度地理学野外実験報告—埼玉県深谷市・熊谷市—』23号 筑波大学大学院修士課程教育研究科教育専攻社会教育コース「自然と暮らし」編集委員会
- 岩本通弥 1980 「城下町の社会と民俗—茨城県古河の常民生活誌から—」『日本民俗学』129号 日本民俗学会
- 1981 「鳶の社会史—城下町古河の社会と民俗—」『日本民俗学』134号 日本民俗学会
- 内山大介 2007 「ダンナとカシラー—栃木県小山市における商家と町鳶の民俗—」『民具マンスリー』40巻9号 神奈川大学常民文化研究所
- 2016 「町鳶をめぐる政策と民俗—東京・千住の鳶頭と地域社会の近現代—」『日本民俗学』286号 日本民俗学会
- 絵守すみよし a 2000 『平成10年(1998)度 熊谷うちわ祭の記録』 私家版
- b 2000 『関東一の祇園 熊谷うちわ祭の記録』 私家版
- 尾股惣司 1972 『ある鳶職の記録』 ふだん記全国グループ
- 1974 『鳶職のうた』 丸ノ内出版
- 北村敏 1992 「大山詣りの「神酒悴」について」『多摩のあゆみ』69号 たましん地域文化財団
- 川島将生 2010 『祇園祭 祝祭の京都』 吉川弘文館
- 神地義彦編 1993 『祇園祭のすべて 豪華絢爛・祇園祭の徹底ガイド』 婦人画報社
- 金井竹徳 2001 「沼田祇園祭」『群馬県の祭り・行事 群馬県祭り・行事報告書』 群馬県教育委員会
- 金子宏正 2008 『史料にみる「江戸時代 沼田の庶民の暮らし」』 上毛新聞社出版メディア局
- 祇園祭編纂委員会 1978 『祇園祭』 筑摩書房

- 祇園祭山鉾連合会編・福井秀一 1974 『改訂近世祇園祭山鉾巡行史』 祇園山鉾連合会
 金賢貞 2013 『「創られた伝統」と生きる 地域社会のアイデンティティー』 青弓社
- 日下部朝一郎 1963 『新編熊谷風土記稿』 国書刊行会
- 桑江友博 2009 「都市祝祭祭礼研究・再考」『武蔵大学総合研究所紀要』19号 武蔵大学
- 日下部朝一郎 1978 『新編熊谷風土記稿』 国書刊行会
- 熊谷祇園会50周年記念誌編集委員会 2013 『熊谷祇園会 五十年を顧みて』 私家出版
- 熊谷郷土会編 1937 『熊谷市郷土会誌』2号 熊谷市郷土会
- 熊谷市 2010 『特例市以降記念 2010 熊谷市勢要覧』 熊谷市
- 熊谷市教育委員会 2014 『熊谷市史 別編1 民俗編』 熊谷市
 2015 『熊谷市史 別篇1 民俗編』 熊谷市
- 熊谷市立図書館編 2003 『熊谷歴史年表—市制施行70周年記念— 増補改訂版』 熊谷市立図書館
- 熊谷市総務部庶務課統計係 2015 『平成25年度版 熊谷市統計書』 熊谷市
- 熊谷八坂神社祭礼行事保存会 2015 『熊谷うちわ祭の歴史—未来へつなぐ 熊谷うちわ祭—』 熊谷八坂神社祭礼行事保存会
- 桑原健次郎 1980 「沼田祇園まつり私考」『沼田万華鏡』一六号 沼田郷土研究会
 1981 a 「沼田祇園まつり私考(二)」『沼田万華鏡』一七号 沼田郷土研究会
 1981 b 「沼田祇園まつり私考(三)」『沼田万華鏡』一八号 沼田郷土研究会
 1982 a 「沼田祇園まつり私考(四)」『沼田万華鏡』一九号 沼田郷土研究会
 1982 b 「沼田祇園まつり私考(五)」『沼田万華鏡』二〇号 沼田郷土研究会
 1983 a 「沼田祇園まつり私考(六)」『沼田万華鏡』二一号 沼田郷土研究会
 1983 b 「沼田祇園まつり私考(七)」『沼田万華鏡』二二号 沼田郷土研究会
 1983 c 「沼田祇園まつり私考(八)」『沼田万華鏡』二三号 沼田郷土研究会
 1984 「沼田祇園まつり私考(九)」『沼田万華鏡』二四号 沼田郷土研究会
 1985 a 「沼田祇園まつり私考(一〇)」『沼田万華鏡』二五号 沼田郷

- 土研究会
- 1985 b 「沼田祇園まつり私考 (一一)」『沼田万華鏡』26号 沼田郷土研究会
- 1986 a 「沼田祇園まつり私考 (一二)」『沼田万華鏡』27号 沼田郷土研究会
- 1986 b 「沼田祇園まつり私考 (一三)」『沼田万華鏡』28号 沼田郷土研究会
- 1987 「沼田祇園まつり私考 (一四)」『沼田万華鏡』29号 沼田郷土研究会
- 幸田露伴 1898 「知々夫紀行」(1987 『露伴全集 第14巻』 岩波書店)
- 古河市史編さん委員会編 1975 『古河市史 民俗編』 古河市
- 埼玉県編 1991 「新編埼玉県史 資料編14 近世5 村落・都市」 埼玉県
- 埼玉県編 1995 『新編埼玉県史 資料集14 近世5 村落・都市』 ぎょうせい
- 埼玉県教育委員会編 1985 『埼玉県祭礼基本資料収集調査報告書 埼玉の祭り』 埼玉県教育委員会
- 酒井惣七 1912 『熊谷百物語 前編』 埼玉新報社
- 佐々木真理 2011 「観光地・浅草の「三社の絵」—浅草における地域維持の仕組み—」
2010年度 早稲田大学 大学院人文科学研究科 地域・地球環境科学研究領域 修士論文
- 佐藤弘隆 2016 「京都祇園祭の山鉾行事における運営基盤の再構築—現代都市における祭礼の継承—」『人文地理』68号3 人文地理学会
- 佐藤弘隆 矢野桂司編 2018 『船鉾 財団法人設立五十周年記念誌』公益財団法人祇園祭船鉾保存会
- 佐野市史編さん委員会 1975 『佐野市史 民俗編』 佐野市
- 重竹賢一 1992 『熊谷祇園祭稿』 私家出版
- 下田憲一郎 1917 『熊谷大観』 埼玉新報社
- 真野和俊 2001 『日本の祭りを読み解く』 吉川弘文館
- 関根賢治 2001 『成田祇園祭々禮考壺』 私家版
- 関根賢治 2002 『成田祇園祭々禮考式』 私家版
- 関根賢治 2003 『成田祇園祭々禮考 参』 私家版
- 関根賢治 2004 『成田祇園祭々禮考 まつりの実際』 私家版
- 関口和好 2007 『わが郷土 熊谷・石原・本国の歴史』 私家出版
- 全日本郷土芸能協会編 1976 『熊谷うちわ祭 その歴史と現在』 熊谷市観光協会
- 藪田稔 1990 『祭りの現象学』 弘文堂
- 高力渉、菅谷宏一、東昌孝、八木知則 2010 「祭りの持つ意味合いの変化—沼田まつりを事例として—」『自然と暮らし』17号 筑波大学大学院修士課程教育研究科教科

教育専攻社会科教育コース

- 竹元秀樹 2014 『祭りと地方都市—都市コミュニティ論の再興』 新曜社
- 田中重好 2007 『共同性の地域社会学—祭り・雪処理・交通・災害』 ハーベスト社
- 塚原伸治 2014 『老舗の伝統と〈近代〉 家業経営のエスノグラフィー』 吉川弘文館
- 千葉日報 1998 『千葉日報創刊三十周年記念成田祇園祭 THENARITAGIONSAI』 千葉日報
- 所功 1996 『京都の三大祭』 角川選書
- 轟博志 1997 「京都・祇園祭における担い手の属性とその輩出地域」『立命館地理学』9号 立命館大学
- 中村孚美 1972 a 「秩父祭り—都市の祭りの人類学—」『季刊人類学』3巻4号 京都大学人類学研究会
- 1972 b 「都市と祭り—川越祭りをめぐって—」『現代諸民族の宗教と文化』社会思想社
- 1987 「博多祇園山笠—そのプロセスと都市性」『季刊人類学』18巻3号 京都大学人類学研究会
- 中野泰 2003 『近代日本の青年宿—年齢と競争原理の民俗—』 吉川弘文館
- 成田市立図書館編 2011 『成田の地名と歴史大字別地域の 辞典』 成田市
- 成田山新勝寺編 1968 『新修成田山史』 大本堂建立記念開帳奉修事務局
- 成田市史編さん委員会編 1972 『成田市史近代編・資料集一（旧町村誌）』 成田市
- 成田市史編さん委員会編 1982 『成田市史民俗編』 成田市
- 成田市史編さん委員会編 1983 『成田市史近代編資料集五 産業・経済』 成田市
- 成田市史編さん委員会編 1986 『成田市史近現代編』 成田市
- 沼田郷土研究会 1976 「座談会 下之町」『沼田万華鏡』三号 沼田郷土研究会
- 1976 「資料紹介」『沼田万華鏡』三号 沼田郷土研究会
- 沼田青年会議所 1976 『おぎょん』 沼田青年会議所
- 沼田市史編さん委員会 1997 『沼田市史 資料編二 近世』 沼田市
- 1998 『沼田市史 資料編三 別冊 沼田祇園祭り記録』 沼田市
- 新島章夫 2001 『関東一の祇園 熊谷うちわ祭り』 さきたま出版会
- 2013 『熊谷市制施行八十周年 熊谷鳶組合 創立百周年記念誌』 熊谷鳶組合
- 野口 宏 2010 『野口家のルーツ考』 私家出版
- 林 有章 1935 『幽章閑話』 私家出版
- 橋本照稔 1994 「成田祇園会再考」『成田史談』第39・40号 成田史談会

- 平山和彦 1978 『青年集団史研究序説』下 新泉社
- 日向野徳久 宮田登 藤田稔 和田正洲 直田昇 村崎勇 井上善治郎 1973 『関東の民間信仰』 明玄書房
- 樋口博美 2012 「祇園祭の山鉾祭礼をめぐる祭縁としての社会関係——祭を支える人々——」『専修人間科学論集社会学篇』第2巻第2号 専修大学人間科学学会
- 福澤昭司 1998a 「鳶のいたマチ」『松本市史研究』第8号 松本市
1998b 『民俗と地域社会』 岩田書院
- 福原敏男 1999 「山車をうしなつた都市祭礼—津八幡宮祭礼の戦後—」(国立歴史民俗博物館編 『民俗学の資料論』 吉川弘文館)
- 藤井英貴 2005 『「見る者」が変容される祭り—熊谷うちわ祭りを通して—』 平成17年早稲田大学政治経済学部卒業論文
- 藤澤好一 遠藤和義 1983 「地域型住宅研究—熊谷— その7 鳶職」『研究報告集計画系』第五四号 日本建築学会
- 細矢久瑠実 2017 「沼田まつり祇園祭の変容と祭礼文化の展開」『えりあぐんま』23号
- 堀口熊五郎 1970 『うちわ祭の今昔』 私家出版
- 松平誠 1983 『祭の文化 都市がつくる生活文化のかたち』 有斐閣
1990 『都市祝祭の社会学』 有斐閣
- 丸山穂波 2000 「鳶職の丸太架設の技術—町神輿の御仮屋の例から—」『学術講演梗概集 F-2 建築歴史・意匠』 日本建築学会
2001a 「鳶職の丸太仮設の技術—山車小屋の例から—」『日本建築学会技術報告集』第13号 日本建築学会
2001b 「鳶職の丸太仮設の技術—御神楽殿と御囃子舞台の例から—」『学術講演梗概集 F-2, 建築歴史・意匠』 日本建築学会
2002 「鳶職の丸太仮設の技術—上屋(素屋根)の例から—」『日本建築学会技術報告集』第15号 日本建築学会
- 柳川啓一 1987 『祭と儀礼の宗教学』 筑摩書房
- 柳田國男 1942 『日本の祭』 弘文堂(1989 『柳田国男全集』13巻 筑摩書房)
- 谷部真吾 2000 「祭りにおける対抗関係の意味—遠州森町「森の祭り」の事例を通して—」『日本民俗学』222号 日本民俗学会
2011 「祭礼研究の軌跡 中村孚美と米山俊直の祭礼論を事例として」『テクスト布置の解釈学的研究と教育』5巻2号 名古屋大学大学院文学研究科
- 山瀬一男 1996 『幻の江戸の祭 神田三天王祭』 私家出版
- 山下祐樹 藤間健一 2015 『熊谷うちわ祭の歴史 vol.01 更なる地域連帯感の充実とコミュニティ再生を目指して』 熊谷八坂神社祭礼行司保存会

- 米山俊直 1974 『祇園祭—都市人類学ことはじめ』 中央公論新社
 1979 『天神祭 大阪の祭礼』 中公新書
- 吉岡亮太 2012 「近世・近代における沼田祇園祭の変容過程」『地域と環境』12号
 京都大学大学院人間・環境学研究科文化・地域環境論講座 地域空間論分野
- 脇田春子 1999 『中世京都と祇園祭—疫神と都市の生活—』 中央公論社
- 渡辺 拓也 2014 「飯場の社会学——下層労働者の排除の構造とメカニズム——」
 2014年度大阪市立大学博士論文
- ERIC and TERENCE RANGER (eds) 1983 The Invention of Tradition, the
 University of Cambridge Press. (1992 前川啓治 梶原景昭訳 『創られた伝統』
 紀伊国屋書店)

〈新聞記事〉

- 東京版朝日新聞 1890 8月21日 「江ノ島の蚊軍」
- 東京版『朝日新聞』 1900a 7月21日 「熊谷町祭典の椿事」
- 東京版『朝日新聞』 1900b 11月28日 「元御嶽教訓導の就縛」
- 東京版『朝日新聞』 1903 8月12日 「熊谷の団扇祭り」
- 東京版『朝日新聞』 1905 7月22日 「熊谷の団扇祭」
- 東京版『朝日新聞』 1906 8月12日 「熊谷団扇祭の椿事(山車転覆、傷者三名)」
- 東京版『朝日新聞』 1908 7月15日 「熊谷町の団扇祭」
- 東京版『朝日新聞』 1909 7月31日 「熊谷の団扇祭り」
- 東京版『朝日新聞』 1910a 1月8日 「熊谷の改正初市」
- 東京版『朝日新聞』 1910b 2月21日 「奴稻荷の競争」
- 東京版『朝日新聞』 1910c 5月22日 「熊谷の八坂神社祭典」
- 東京版『朝日新聞』 1910d 7月21日 「熊谷の八坂大祭」
- 東京版『朝日新聞』 1910e 7月22日 「熊谷八坂祭」
- 東京版『朝日新聞』 1910e 7月26日 「熊谷の神輿騒ぎ」
- 『埼玉新聞』 2015 7月3日 「熊谷うちわ祭 うちわ配布、明治35年頃 山車・
 屋台導入と同時期と判明」
- 千葉県版『毎日新聞』 2016 7月5日 「成田祇園祭 始まる 勇壮に山車、出発 雨
 空の中、観光客見物」

初出一覧

序論（書き下ろし）

第Ⅰ部 熊谷うちわ祭の歴史と民俗

第1章 熊谷市と熊谷うちわ祭の概要（書き下ろし）

第2章 新聞にみる明治時代の熊谷うちわ祭（2017 「新聞から見る祭礼の歴史—明治時代の熊谷うちわ祭の再検討—」『歴史民俗資料学研究』22号 107～133頁（査読有））

第3章 熊谷うちわ祭に関わる民俗事象

第1節 熊谷うちわ祭の関連行事（書き下ろし）

第2節 熊谷うちわ祭の祇園柱（2019 「熊谷うちわ祭の祇園柱の一考察—文献資料を中心に—」『比較民俗研究』33号 307～314頁）

第3節 団扇の頒布と祭礼（2019 「団扇の頒布と祭礼—埼玉県熊谷市 熊谷うちわ祭を事例に—」『民具マンスリー』52巻2号 1～13頁）

第4節 鳶と総代の大山代参（2018 「鳶と総代の大山代参—熊谷うちわ祭を事例に—」『埼玉民俗』43号 埼玉民俗の会 83～100頁）

第Ⅱ部 旦那衆・町鳶・祇園会の攻防

第4章 祭礼における熊谷鳶の変容（2017 「都市祭礼における鳶の変貌—熊谷うちわ祭を事例に—」『長野県民俗の会会報』40号 59～76頁）

第5章 旦那衆の権威の創造（市東真一 2019 「祭礼における旦那衆の権威の創造—埼玉県熊谷市 熊谷うちわ祭を事例に—」『日本民俗学会』297号 67～92頁（査読有））

第6章 若連の変容と拡大（2020 「都市祭礼における若連組織の結成—熊谷うちわ祭を事例に—」『信濃』第72巻第1号 掲載予定）

第7章 関西圏の祭礼組織の内部構造—京都祇園祭船鉾町を事例に—（2020 「関西圏の祭礼組織の内部構造—京都祇園祭船鉾町を事例に—」『歴史民俗資料学研究』25号 掲載予定）

第Ⅲ部 祭礼の変容と祭典組織の動向

第8章 観光化による祭典組織の変化—千葉県成田市成田祇園祭を事例に—（2015 「成田祇園祭における観光化の研究—先鋒の役割を中心に—」『長野県民俗の会会報』38号 81～95頁）

第9章 外部の祭礼における影響—沼田まつりのマンドウを事例に—（2019 「沼田まつりにおけるマンドウの変遷」『群馬歴史民俗』40号 67-82頁）

結論（書き下ろし）